

仙台市文化財調査報告書第238集

陸奥国分尼寺跡ほか

発掘調査報告書

1999年3月

仙台市教育委員会

陸奥国分尼寺跡ほか

発掘調査報告書

1999年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市には約700ヶ所の遺跡が存在し、年間にそれらの遺跡に関する開発や建築は280件以上あります。それらの行為に対して、文化財保護法の定めにより、それぞれの工事内容を審査したうえで、立会調査や発掘調査の対応をすることになっております。

本調査には時間がかかり、調査着手を待っておられる申請者も多い状況にありますが、当仙台市教育委員会文化財課では一日でも早く調査に着手できるよう、また一件でも多く調査が終了するよう努めておりますので、今後ともご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成10年度は45遺跡75ヶ所の確認調査、本調査を実施いたしましたが、前段で触れましたように、調査の効率化を図るための調査体制の見直しを行ったうえでの実施となりました。具体的には小規模調査は別に調査班を組んで機動的に対応できるようにしたものであり、相当の成果を上げたものと考えております。

その小規模調査班の担当した遺跡のうち、8件をまとめてここに報告することになりました。

ここで報告できなかったものも含め、仙台市の各区で確認調査、小規模な本調査を実施しました折り、多くの皆様のご協力、ご指導を賜りましたことに対しまして、心より感謝申し上げます。

小規模調査を中心とした報告ではございますが、各地域の情報を提供しておりますので、ぜひ参考資料としてご活用いただければ幸いです。

1999年3月

仙台市教育委員会

教育長 小 松 弥 生

例　　言

- 1 本書は、民間開発事業に関わる陸奥国分尼寺跡（第8次調査）・王ノ塙遺跡（第3次・4次調査）・山田条里遺跡（第2次調査）・富沢遺跡（第110次調査）・北日城跡（第2次調査）・北星敷遺跡（第2次調査）の発掘調査報告書と、仙台市関連事業に関わる山田条里遺跡（第3次調査）の発掘調査報告書である。
- 2 本書の編集は、仙台市教育委員会文化財課 佐藤 洋・主浜光朗・竹田幸司・伊東真文が担当し、本文の執筆等については、下記のとおり分担した。

本文執筆	陸奥国分尼寺跡・山田条里遺跡………主浜光朗
	王ノ塙遺跡………3次調査 佐藤 洋 4次調査 竹田幸司
	富沢遺跡・北日城跡・北星敷遺跡………1・2・3 伊東真文 4・5・6 竹田幸司
遺構図・遺物図作成	伊東真文・佐藤 洋・主浜光朗・竹田幸司・豊村幸宏
遺物写真撮影	豊村幸宏
- 3 本書に關わる整理作業に下記の方々の参加を得た。

相沢美佐子	石川カツ子	及川のり子	熊谷きぬ子	小泉幸子	小林由美	小山つるよ	斎藤喜恵子	佐藤悦子
佐藤とき子	佐藤洋子	佐藤優子	高橋弘子	森谷愛子	若生洋子	渡辺まき子		
- 4 発掘調査・報告書作成にあたり次の方々のご指導、ご助言、ご協力を賜った。(敬称略・顛不同)
手塚 均 及川 規(東北歴史資料館) 佐藤和彦(多賀城跡調査研究所)
- 5 本書に關わる図面・写真・遺物、及び小規模調査に関する資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本書中の土色については「新版標準土色帳」(小山・竹原:1976)を使用した。
2. 本書に使用した地形図は国土地理院発行の1:50,000「仙台」の一部を転載した。
3. 本書で使用している方位は磁北で統一している。
4. 本書中の遺構略号は以下のとおりに表している。

S D : 溝　　跡	S I : 竪穴住居跡・竪穴造構	S K : 土　　坑
S F : 道路跡	S X : その他の遺構	
5. 本書中の遺物略号は以下のとおりに表している。

C : ロクロ不使用の土師器	D : ロクロ使用の土師器・赤焼土器	E : 須恵器	F : 丸瓦
G : 軒平瓦・半瓦	N : 金属製品		

目 次

序 文

例 言

凡 例

I 陸奥国分尼寺跡（第8次調査）

1 調査要項.....	1
2 調査方法と基本層序.....	1
3 発見遺構と出土遺物.....	2
4 まとめ.....	18

II 王ノ壇遺跡（第3次調査）

1 調査要項.....	26
2 遺跡の位置と環境.....	26
3 調査の方法.....	27
4 基本層序.....	27
5 発見遺構と出土遺物.....	31
(1) 3層上面検出遺構.....	31
(2) 4層上面検出遺構.....	31
(3) 5層上面検出遺構.....	32
(4) 6a層上面検出遺構.....	32
(5) 8層上面検出遺構.....	38
(6) 基本層出土遺物.....	40
6 まとめ.....	45

III 王ノ壇遺跡（第4次調査）

1 調査要項.....	50
2 当調査区の近隣の中世の状況.....	50
3 調査の方法.....	50
4 基本層序.....	52
5 発見遺構と出土遺物.....	52
(1) III層上面検出遺構.....	52
(2) V層上面検出遺構.....	60
6 調査成果のまとめと考察.....	63
(1) 道路跡について.....	63
(2) まとめ.....	64

IV 山田条里遺跡（第2次・第3次調査）

1 調査要項.....	69
2 遺跡の位置と環境.....	70
3 第2次調査.....	71
(1) 調査方法.....	71
(2) 基本層序.....	71
(3) 発見遺構と出土遺物.....	71
(4) まとめ.....	75
4 第3次調査.....	76

(1) 調査方法.....	76	(2) 基本層序.....	76
(3) 発見遺構と出土遺物.....	77	(4) まとめ.....	80
V 富沢遺跡（第110次調査）			
1 調査要項.....	84		
2 調査の経過と方法.....	84		
3 基本層序.....	84		
4 まとめ.....	85		
VI 北目城跡（第2次調査）			
1 調査要項.....	86		
2 遺跡の位置と環境.....	86		
3 調査方法.....	86		
4 基本層序.....	86		
5 発見遺構と出土遺物.....	87		
6 調査のまとめ.....	88		
(1) SD-1 堀跡の変遷.....	88	(2) SD-1 堀跡の形態.....	88
(3) まとめ.....	88		
VII 北屋敷遺跡（第2次調査）			
1 調査要項.....	90		
2 遺跡の位置と環境.....	90		
3 調査方法.....	91		
4 基本層序.....	91		
5 発見遺構と出土遺物.....	92		
(1) A期.....	92	(2) B期.....	93
6 調査のまとめ.....	95		
(1) 遺構の切り合いと年代について.....	95	(2) 溝跡の性格について.....	104
(3) SD-2「しがらみ」について.....	104	(4) 近世陶磁器について.....	104
(5) 漆器・木製品について.....	104		

I 陸奥国分尼寺跡（第8次調査）

1 調査要項

遺 跡 名	陸奥国分尼寺跡（宮城県遺跡番号 01020）
調 査 地 点	仙台市宮城野区宮千代一丁目3番9号
調 査 原 因	RC 8階建共同住宅建設
調査対象面積	615m ²
調 査 面 積	120m ²
調 査 期 間	確認調査 平成9年11月26日～11月27日、平成10年3月9日 本調査 平成10年7月17日～8月10日
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員	篠原信彦 主浜光朗 竹田幸司 根本光一 松本知彦 伊東真文
調査参加者	伊藤清子 内田節子 加嶋みえ子 小山つるよ 佐藤優子 庄子弘子 高橋弘子 森谷愛子 吉田やよえ 渡辺まさき子
申 請 者	狭間苑枝
調 査 協 力	三協土地建物株式会社 有限会社アーバンプロット 狹間善一郎

2 調査方法と基本層序

遺跡の位置と環境については、これまでに刊行されている発掘調査報告書と重複するため割愛する。それらを参考していただきたい。

平成9年9月22日付で仙台市宮城野区宮千代一丁目3-9にRC造8階建共同住宅建設に伴う発掘届が提出された。この場所は、陸奥国分尼寺跡の推定寺域の北東部に位置し、江戸時代後期（天保年間）桜田權太夫（齋斎）が構えた「桜田屋敷」と地元の人々に呼ばれる聚勝園という屋敷地の西端付近と考えられる場所であることから、仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、共同住宅建設予定地域内において発掘調査を行うこととした。

調査にあたっては、平成9年度に2度にわたって、共同住宅建設部分を対象に調査区を設定して確認調査を実施した。その結果、聚勝園に係わる遺構・遺物は検出されなかつたが、古代の竪穴住居跡・土坑が検出され、軒瓦・土器類・須恵器などが出土したため本調査が必要と判断された。それをうけて平成10年7月より本調査をおこなうことになった。本調査では、確認調査で遺構が検出された部分を中心に調査区を設定し、重機で表土を排除した後、人力で遺構の検出、精査を行った。



第1図 調査地点と周辺の地形

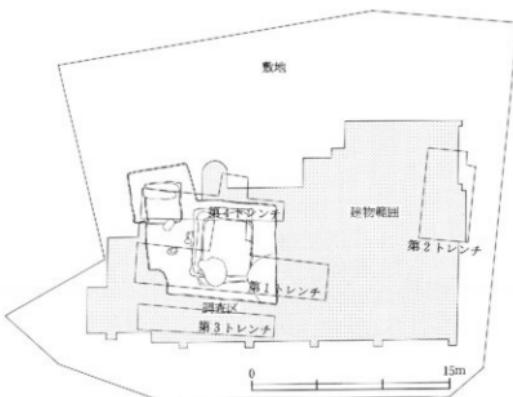
基本層は2層認められた。1層は暗褐色シルトで表土であるが、更地にする際の擾乱が著しい。層の厚さは30～40cmである。2層は明黄褐色シルト・粘土質シルトの地山で、この層の上面が遺構確認面となっている。擾乱坑の壁面では、砂層及び砂礫層が観察される部分も見られ、2層上面に砂礫層

が現れている部分も見られる。

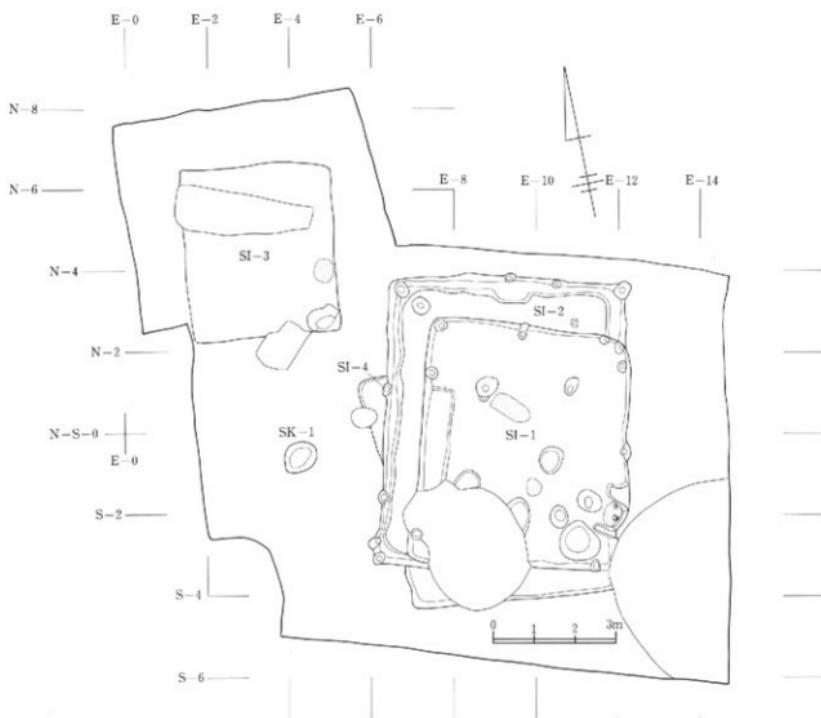
3 発見遺構と出土遺物

検出遺構には、堅穴住居跡4軒・土坑1基があり、このうち3軒の堅穴住居跡は重複している。

SI-1 堅穴住居跡 調査区南側中央部の2層上面で確認され、SI-2・4 堅穴住居跡と重複関係にあり、本住居跡がそれぞれを切っていることから本住居跡が最も新しい。また、住居跡南西部及び、南東コーナーは後世の擾乱により確認できなかった。平面形は南北6.06~5.7m、東西5.2mの北東

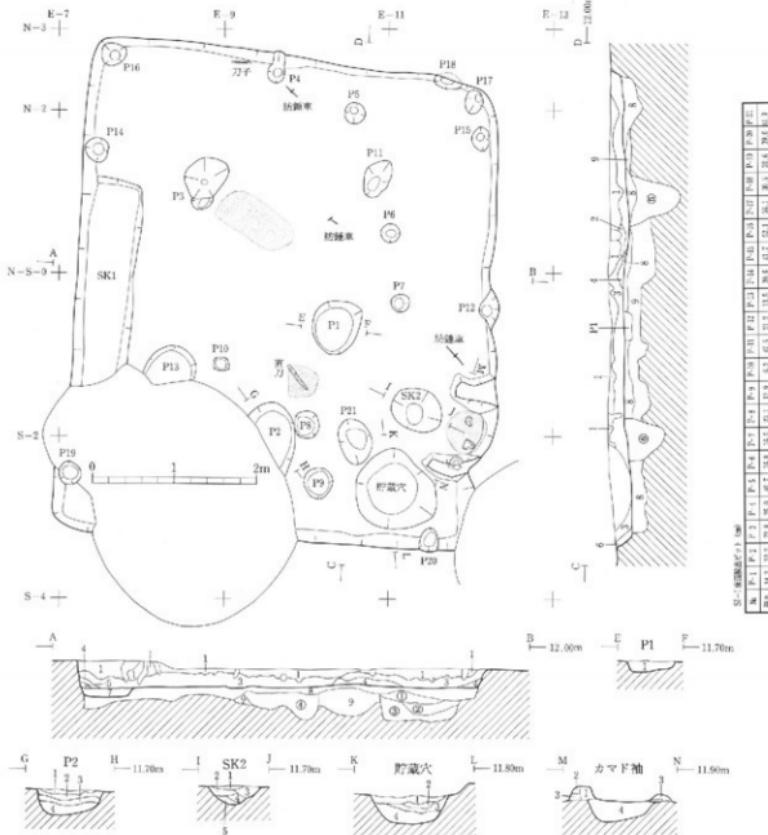


第2図 調査区配置図



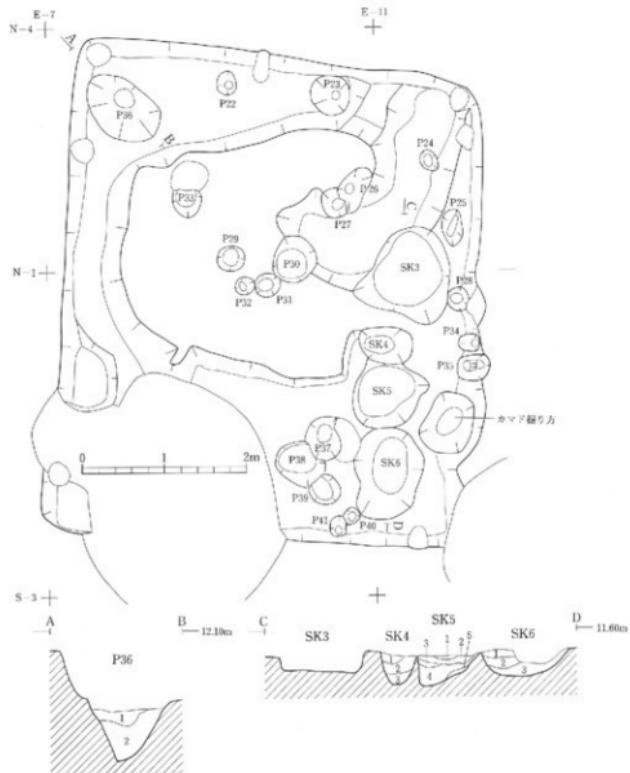
第3図 遺構配置図

コーナーがやや丸みをもつ長方形で、カマド部分が若干膨らんでいる。西壁を基準とする主軸方向はN-14°Eである。堆積土は6層に分けられ、大部分の床面を覆う3層に多量の炭化物や、焼土が含まれており、4~6層は部分的に確認されるのみである。壁は最も保存の良い西壁の北側で37.5cmあり、床面から急角度で立ち上がる。床面は掘り方埋土の上面から成っている。小さな凸凹はあるが、ほぼ平坦で傾斜は見られない。床面上の数カ所に焼け



第4図 SI-1住居跡（床面）

面が見られ、炭化物がほぼ床面全体に散乱しており、なかには材の形態を残しているもの、炭化した種子が窓みの中に詰まっているものも見られた。周溝は検出されなかった。床面で13個のピットが検出されているが、その全てに柱痕跡は確認されなかった。柱穴はP3・11・21の3個のピットが主柱穴と考えられるが、住居跡南東部では攪乱によりピットは検出されなかった。また、P4・12・14・15・16・17・18・19・20は壁柱穴であると考えられる。掘り方底面では20個のピットが検出されているが、SI-2堅穴住居跡の柱穴が含まれている可能性がある。東壁の南寄りにカマドが付設されており、燃焼部が検出された。煙道部、煙出しピットは検出されなかった。燃焼部は奥行き0.7m、幅1.4mで底面、奥壁、側壁内面は加熱により赤変している。底面に2個の礫が立てられており、赤変していることから支脚として用いられていたものと思われる。側壁上部で土師器壺、下面に平瓦が出土している。カ



層位	№	土色	土性	性	号
P-30	1	ISHYU4/ 灰色	シルト	非砂質、小礫少。	
	2	ISHYU4/ 灰色	シルト	小礫1mmより大きいもの多量に含む。	
SI-4	1	ISHYU4/ 壓出褐色	シルト	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、土質を含む。	
	2	ISHYU4/ 褐色	シルト	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物を含む。	
	3	ISHYU4/ 黑色	シルト	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物を含む。	
SK-4	1	ISHYU4/ 黑褐色	シルト	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物、灰を含む。	
	2	ISHYU4/ 黑褐色	シルト	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物、灰を含む。	
SK-5	1	ISHYU4/ 黑褐色	シルト	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物、灰を含む。	
	2	ISHYU4/ 黑褐色	シルト	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物、灰を含む。	
	3	ISHYU4/ 黑褐色	シルト	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物、灰を含む。	
	4	ISHYU4/ 黑褐色	粘土質シート	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物、灰を含む。	
	5	ISHYU4/ 黑褐色	シルト	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物、灰を含む。	
SK-6	1	ISHYU4/ 黑褐色	シルト	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物、灰を含む。	
	2	ISHYU4/ 黑褐色	シルト	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物、灰を含む。	
	3	ISHYU4/ 黑褐色	粘土質シート	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物、灰を含む。	
	4	ISHYU4/ 黑褐色	粘土質シート	ISHYU4/6粒土質シートを複数枚にわたり、灰化物、灰を含む。	

SI-1 挖り方検出ピット (cm)

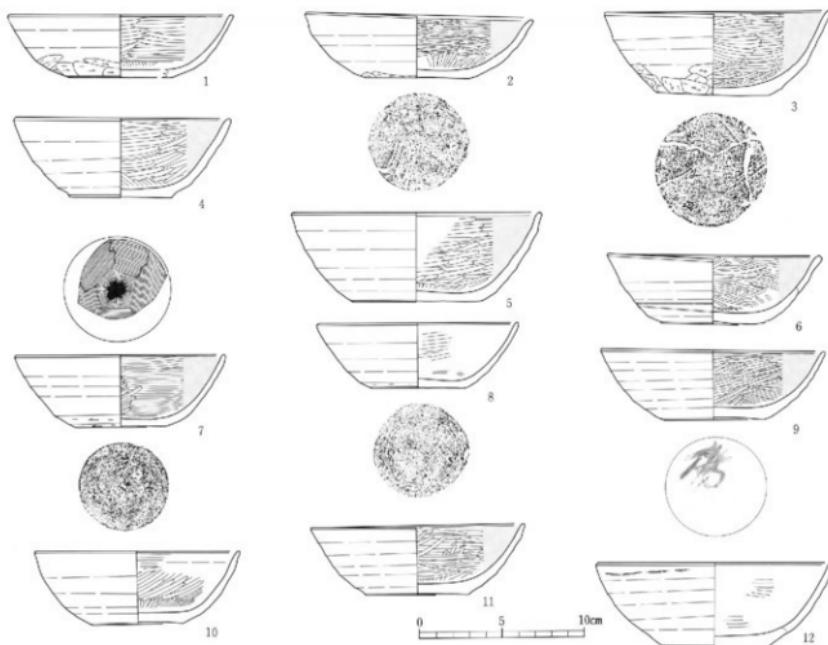
%	P-22	P-23	P-24	P-25	P-26	P-27	P-28	P-29	P-30	P-31
深さ	23.1	20.0	17.5	38.3	63.0	45.5	31.5	25.4	32.9	10.6
%	P-31	P-33	P-34	P-35	P-36	P-37	P-38	P-39	P-40	P-41
標高	20.5	30.5	15.4	24.0	73.5	58.8	24.2	7.5	16.5	21.1

第5図 SI-1 住居跡掘り方底面

マド南脇に貯蔵穴が検出された。長軸1m、単軸0.9m、深さ35cm、不正な円形である。その他の施設として、土坑が床面で2基検出された。SK-1は住居西壁際中央部で検出され、長さ2.5m以上、幅55cm、深さ16cmの長方形を基調とした平面形であるが擾乱による削平のため正確な規模は不明である。SK-2はカマド手前で検出され、長さ65cm、幅50cm、深さ20cmの梢円形で堆積土中には多量の炭化物や焼土、灰が含まれている。本住居跡の掘り方は壁際が中央部より深く、中央部が一段高くなっている。掘り方埋土は2層に分けられるが、下層のものはSI-2堅穴住居跡の掘り方埋土と考えられる。掘り方底面で4基の土坑が検出された。SK-3は中央部の東側で検出され、長さ1.2m、幅1m、深さ25cmの不整な梢円形である。SK-4は長さ66cm、

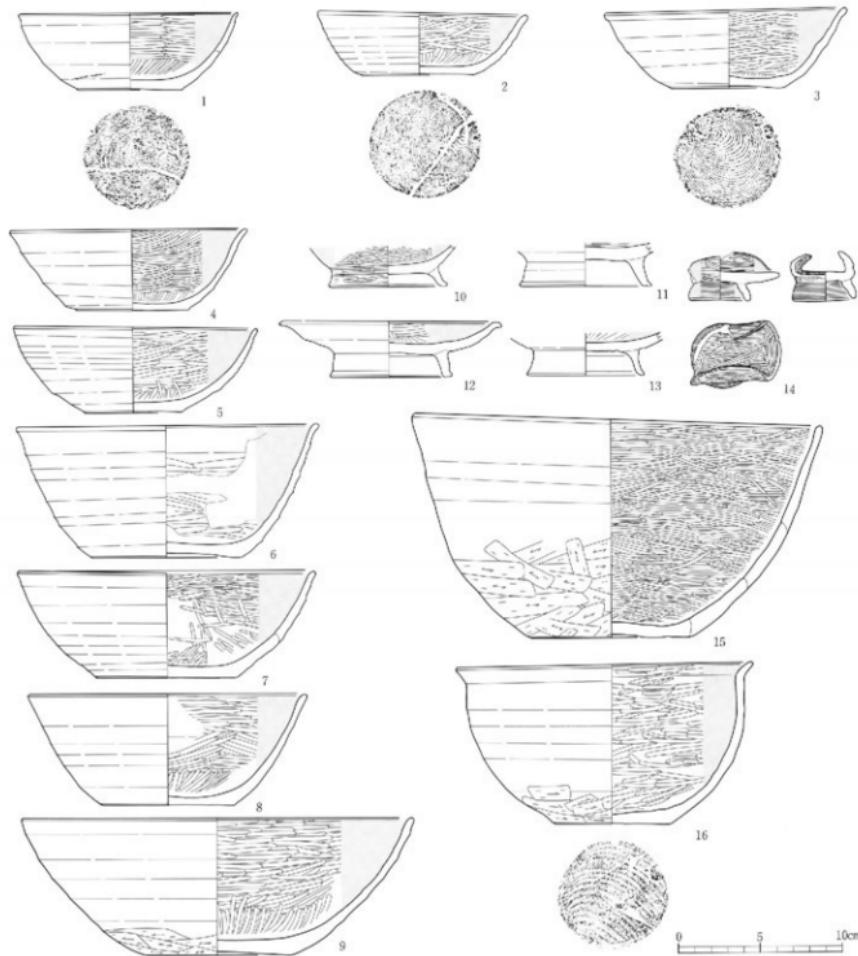
幅46cm、深さ39cmの梢円形である。SK-5は径80cm、深さ37cmの不整な円形で南側が浅くなっている。SK-6は長さ1.12m、幅84cm、深さ32cmの不整な梢円形で、それぞれの堆積土中には多量の焼土や炭化物が含まれている。掘り方底面で検出されたものなかにはピット同様SI-2堅穴住居跡の施設が含まれている可能性がある。

出土遺物には土師器、須恵器、瓦、鉄製品がある。このうち図示したものは土師器壺21点、高台付壺4点、甕10点、鉢2点、須恵器壺4点、壺3点、広口瓶2点、甕7点、平瓦4点、丸瓦2点、直刀1振、刀子5挺、鉄錆5点、鉄製紡錘車4点である。土師器壺1点に墨書き認められる。その他に復元できなかった須恵器大甕が1点ある。



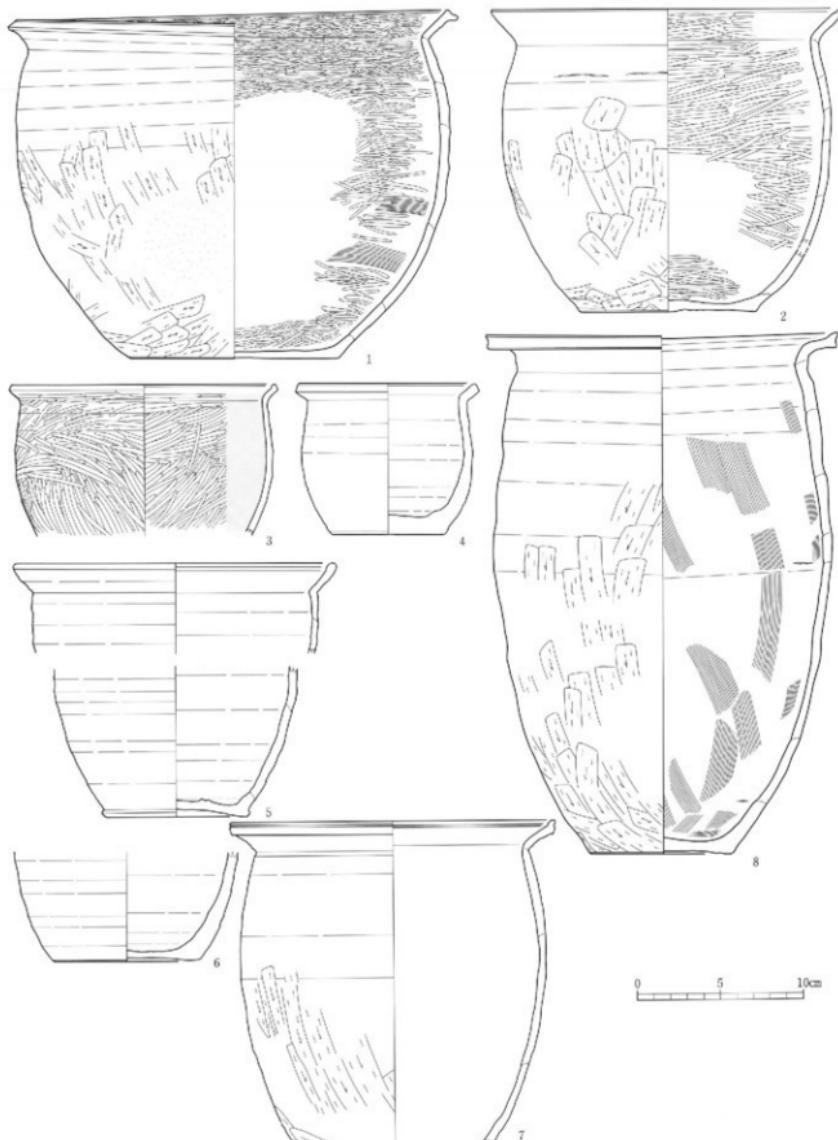
No.	登録番号	種類	形状	層位	外観	内観	通し番	特徴	参考	写真図版
1	D-5	土師壺	壺	2 層	ロクロ美濃型・手待ちカラケズリ	ハラミガキ・黒色絞繩	手待ちカラケズリ			
2	D-15	土師壺	壺	縦り方付上	ロクロ美濃型・手待ちカラケズリ	ハラミガキ・黒色絞繩	手待ちカラケズリ		15-1	
3	D-9	土師壺	壺	灰	ロクロ美濃型・手待ちカラケズリ	ハラミガキ・黒色絞繩	手待ちカラケズリ		15-2	
4	D-4	土師壺	壺	2 層	ロクロ美濃型	ハラミガキ・黒色絞繩	手待ちカラケズリ		15-3	
5	D-14	土師壺	壺	脚付方付上	ロクロ美濃型	ハラミガキ・黒色絞繩	手待ちカラケズリ			
6	D-18	土師壺	壺	脚窓大底付	ロクロ美濃型	ハラミガキ・黒色絞繩	手待ちカラケズリ			
7	D-16	土師壺	壺	カラマフ	ロクロ美濃型・回転ヘラケズリ	ハラミガキ・黒色絞繩	回転ヘラケズリ			
8	D-3	土師壺	壺	2 層	ロクロ美濃型・回転ヘラケズリ	ハラミガキ・黒色絞繩	跡・余切4・七點ヘラケズリ			
9	D-20	土師壺	壺	p=II 墓土	ロクロ美濃型	ハラミガキ・黒色絞繩	回転余切4・削調整	表面に墨書き「鉢」	15-4	
10	D-11	土師壺	壺	灰	ロクロ美濃型	ハラミガキ・黒色絞繩	回転余切4・削調整		15-6	
11	D-6	土師壺	壺	2 层	ロクロ美濃型	ハラミガキ・黒色絞繩	回転余切4・削調整		15-7	
12	D-10	土師壺	壺	灰	ロクロ美濃型	ハラミガキ・黒色絞繩	回転余切4・削調整		15-8	

第6図 SI-1堅穴住居跡出土遺物（1）



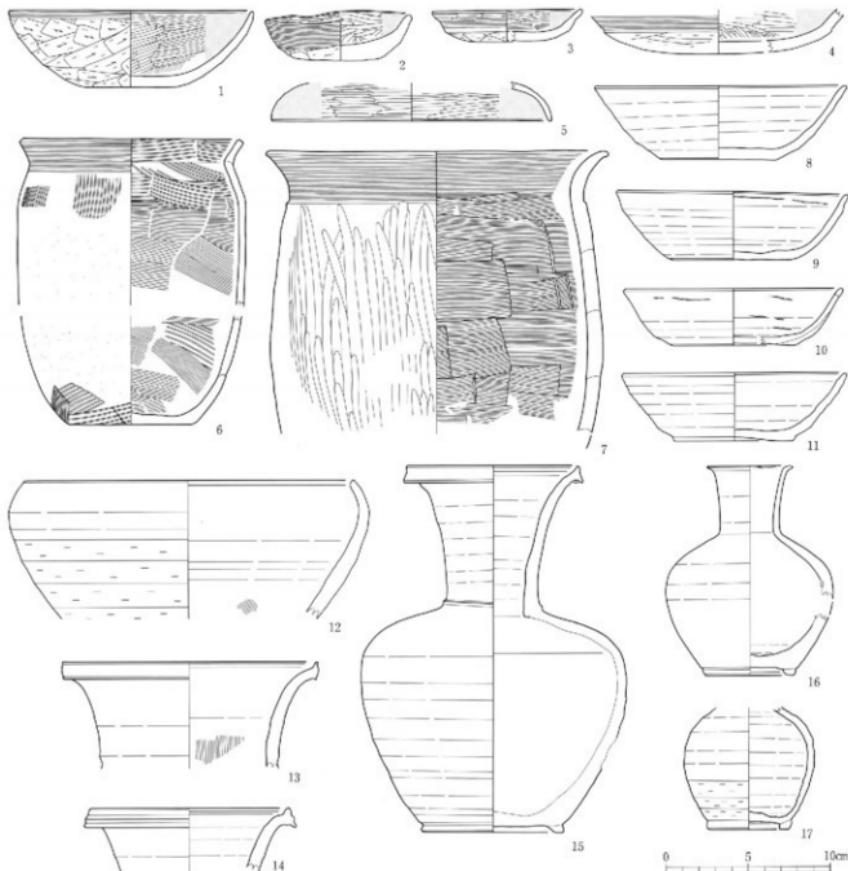
No.	空缺番号	形	示	種	量	想	位	月	相	内	面	底	沿	備	考	下真目数
1	D-12	上切縫	坪	灰	中	クロ	調			ハラミガキ・黒色の斑	滑輪手切り無調					15-9
2	D-19	上切縫	坪	灰	高	クロ	調			ハラミガキ・黒色の斑	滑輪手切り無調					15-10
3	D-1	土鍋	坪	2	厚	クロ	調			ハラミガキ・黒色の斑	滑輪手切り有調					15-11
4	D-7	土鍋	坪	2	厚	クロ	調			ハラミガキ・黒色の斑	滑輪手切り有調					15-14
5	D-2	土鍋	坪	2	厚	クロ	調			ハラミガキ・黒色の斑	滑輪手切り有調					15-12
6	D-13	土鍋	坪	薄	中	クロ	調			ハラミガキ・黒色の斑	滑輪手切り無調					15-17
7	D-17	土鍋	坪	カド	中	クロ	調			ハラミガキ・黒色の斑	滑輪手切り無調					15-13
8	D-38	土鍋	坪	カド	中	クロ	調			ハラミガキ・黒色の斑	滑輪手切り無調					15-15
9	D-8	土鍋	坪	2	厚	クロ	調	→	手持ちヘラケズリ	ハラミガキ・黒色の斑	滑輪手切り無調					15-15
10	D-22	土鍋	高台付坪	2	厚	クロ	調	→	ヘラミガキ・黒色の斑	ハラミガキ・黒色の斑	手					15-15
11	D-23	土鍋	高台付坪	株	中	クロ	調			ハラミガキ・黒色の斑	滑輪手切り→ナデ					15-16
12	D-24	土鍋	高台付坪	カド	中	クロ	調			ハラミガキ・黒色の斑	ナデ					15-17
13	D-21	土鍋	高台付坪	焼印	中	クロ	調			ハラミガキ・黒色の斑	滑輪手切り無調					15-19
14	D-31	土鍋	高台付坪	2	厚	クロ	調	→	ヘラミガキ・黒色の斑	ハラミガキ・黒色の斑	ナデ					15-20
15	D-35	土鍋	株	2	厚	クロ	調	→	ヘラケズリ	ハラミガキ	ナデ					15-19
16	D-36	土鍋	坪	2	厚	クロ	調	→	ヘラケズリ	ハラミガキ・黒色の斑	滑輪手切り無調					15-20

第7図 SI-1 積柱住跡出土遺物（2）



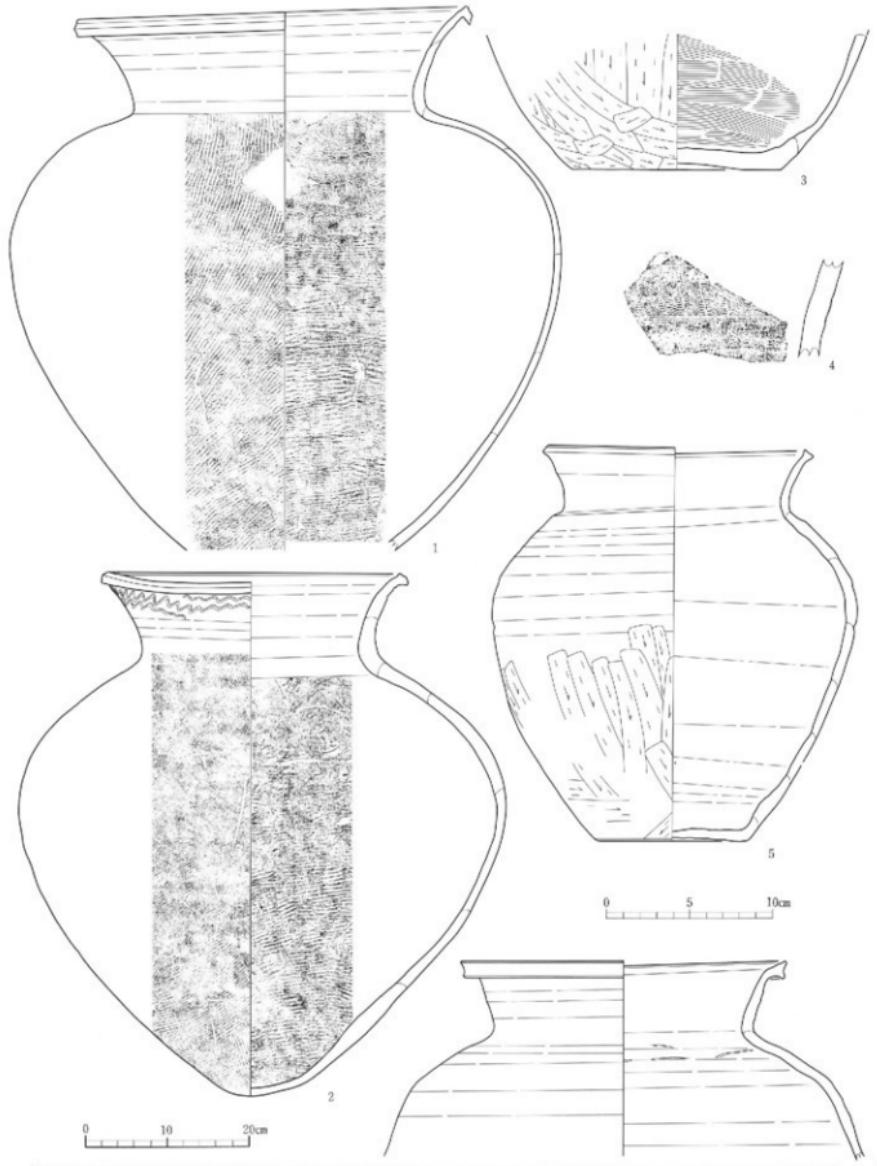
No.	發達年代	種類	附 位	外 図	内 容	底 部	備 考	写真図版
1	D-26	土師器	壺	2 壁	ロクロ彫刻→ハラケヅリ	ヘラミガキ	手持ちヘラケヅリ	15-18
2	D-27	土師器	壺	2 壁	ロクロ彫刻→ハラケヅリ	ヘラミガキ	ナ デ	16-1
3	D-33	土師器	壺	F-2 壁	ロクロ彫刻→ハラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	-	
4	D-25	土師器	壺	1 壁	ロクロ彫刻	ロクロナデ	同上	16-2
5	D-30	土師器	壺	カマド	ロクロ彫刻	ロクロナデ	静止止め切り無調整	
6	D-31	土師器	壺	カマド	ロクロ彫刻	ロクロナデ	同上	
7	D-32	土師器	壺	SK 6 粘土	ロクロ彫刻→ハラケヅリ	(不 明)	-	
8	D-31	土師器	壺	白	ロクロ彫刻→ハラケヅリ	ヘラケヅリ	ナ デ	16-3

第8図 SI-1 穴立住居跡出土物（3）



No.	登録番号	形	柄	施	縁	底	外	内	面	底	部	類	考	写真図版
1	C-4	土器	环	縦り力挽土	山縫部コナデ、体部ヘラケズリ	ハラミガキ・黒色処理								
2	C-5	土器	环	縦り力挽土	山縫部コナデ、体部ヘラケズリ	ハラミガキ・黒色処理								16-4
3	C-3	土器	环	P-29 増土	山縫部コナデ、体部ヘラケズリ	ハラミガキ・黒色処理								
4	C-6	土器	环		1 深	山縫部コナデ、体部ヘラケズリ	ハラミガキ・黒色処理							
5	C-1	土器	直	縦り力挽土		ハラミガキ・黒色処理								
6	D-28	土器	直	山縫部コナデ、体部ハクメ		ハケメ、ヘラニア								
7	D-29	土器	直	縦り力挽土	ロクロ調整	山縫部コナデとヘラニア								16-5
8	E-1	直底器	环	2 深	ロクロ調整	ロクロ四型								16-6
9	E-2	直底器	环	2 深	ロクロ調整	ロクロ四型								16-7
10	E-3	直底器	直	山縫部	ロクロ調整	ロクロ四型								
11	E-4	直底器	环	P-1 増土	ロクロ調整	ロクロ四型								
12	E-5	直底器	直	縦り力挽土	ロクロ調整・刮削ヘラケズリ	ロクロ四型								
13	E-10	直底器	直口	山縫部	P-11 増土	ロクロ調整								
14	E-9	直底器	直口	カマニ	ロクロ調整	ロクロ四型								16-8
15	E-8	直底器	直口	具脚盆 P-11 増土	ロクロ調整	ロクロ四型	ナデ	体部と頭底の境に突起					16-9	
16	E-7	直底器	直口	具脚盆	2 層	ロクロ調整	ロクロ四型	ナデ					16-10	
17	E-6	直底器	直口	具脚盆	2 層	ロクロ調整・刮削ヘラケズリ	ロクロ四型	ナデ					16-11	

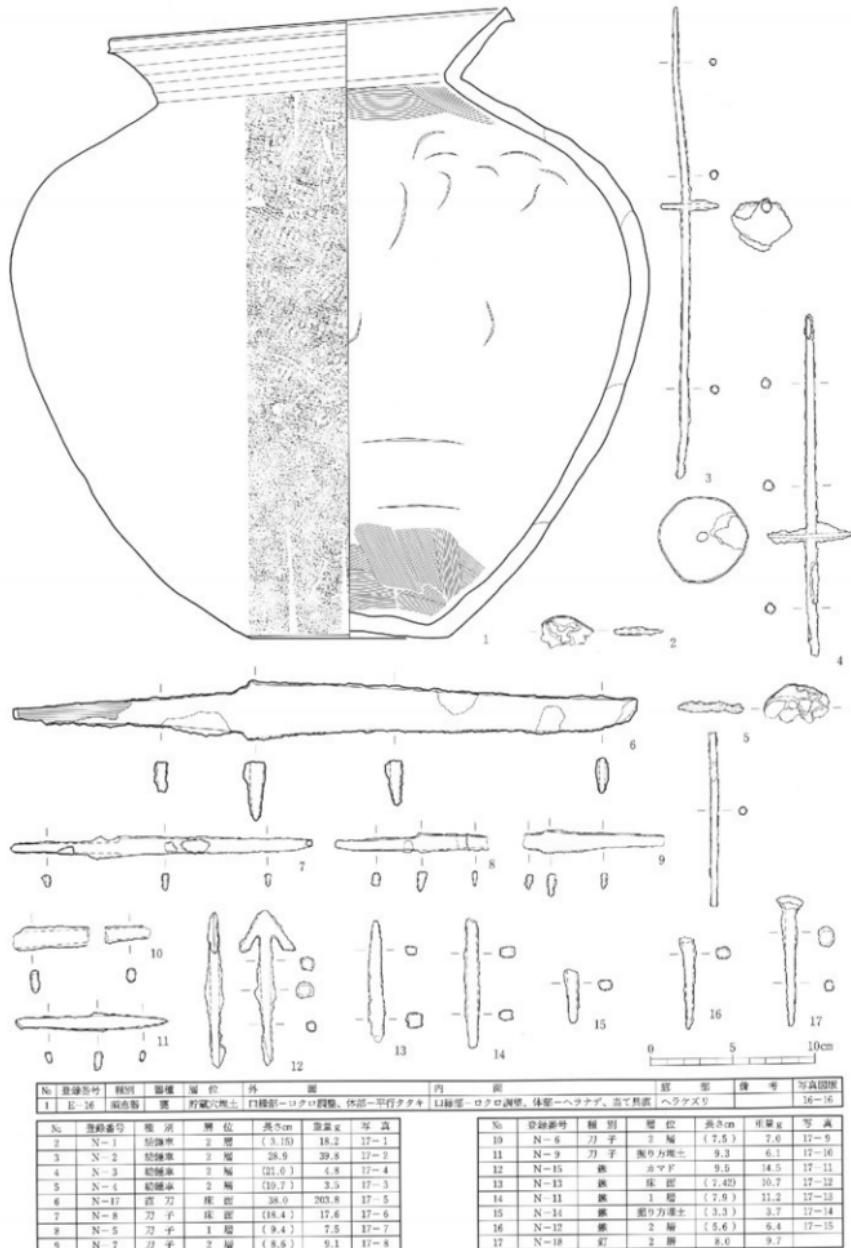
第9図 SI-1 積穴住居出土遺物（4）



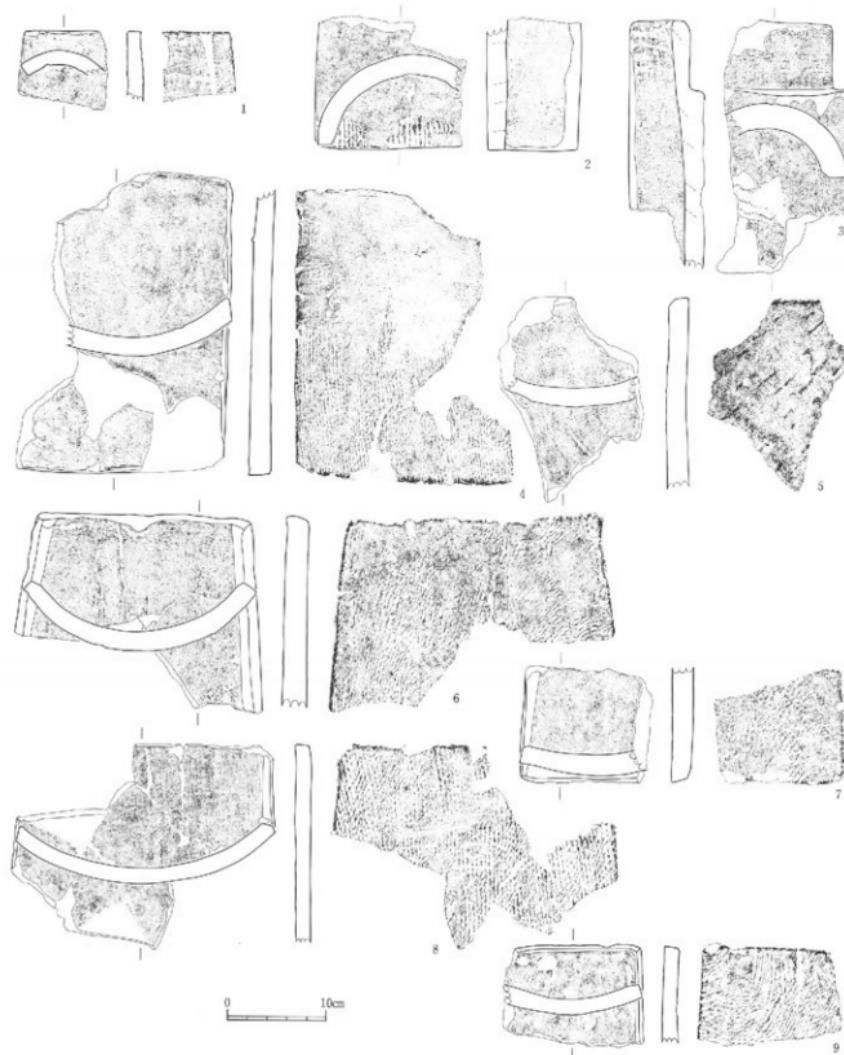
No.	登録番号	種別	圖 種	遺 位	外 観	内 観	式 形	保 務	写真用語
1	E-12	須恵器	甕	床 回	口縁部一ロクロ調整、体部一当て具板	口縁部一ロクロ調整、体部一当て具板	一	一	16-12
2	E-11	須恵器	甕	床 回	口縁部一ロクロ調整、体部一平行タタキ	口縁部一ロクロ調整、体部一当て具板	丸底	四面に波状沈文	16-13
3	E-15	須恵器	甕	突出部	ヘラケツリ	コクロ調整	ヘナダ	ヘナダ	
4	E-19	須恵器	甕	床端所付	頭部に複数沈文	ロクロ調整			
5	E-14	須恵器	甕	2 層	ロクロ調整、ヘラケツリ	ロクロ調整	ナア		16-14
6	E-13	須恵器	甕	2 層	ロクロ調整	ロクロ調整	一		16-15

第10図 SI-1 壺穴住居跡出土遺物（5）

1 陸奥国分尼寺跡（第8次調査）



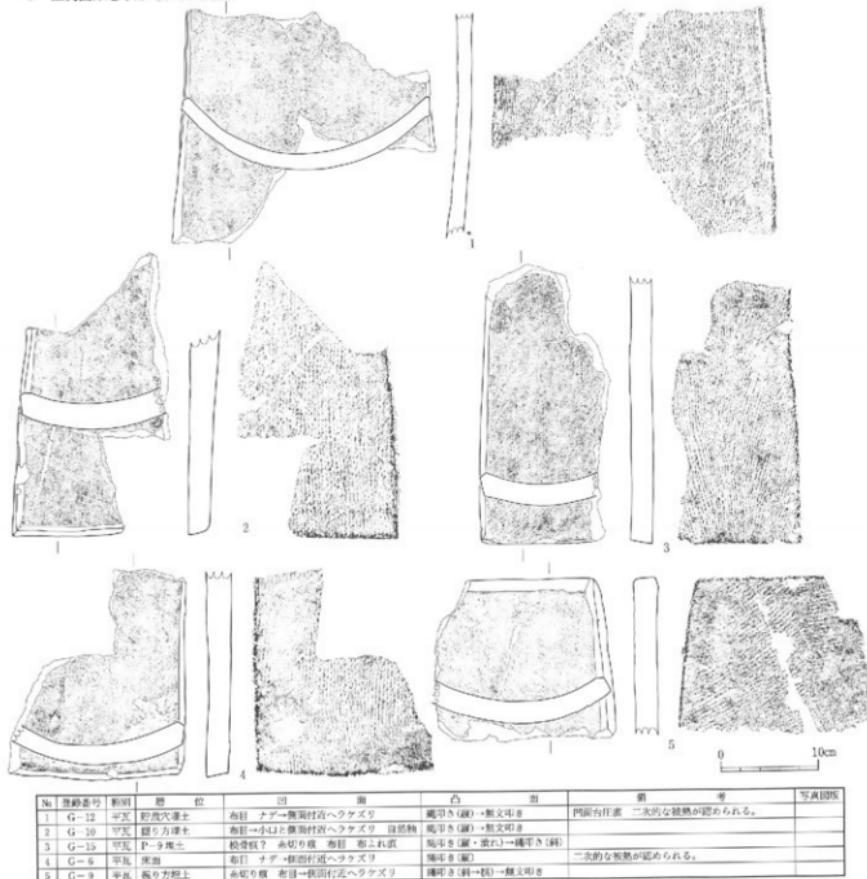
第11図 SI-1 積穴住居跡出土遺物(6)



No.	登録番号	判別	層位	三面	凸面	側面	写真回数
1	F-1	丸瓦	振り方埋土	粘土繊維 布目 斜鑓じ板	テグス自然縫		
2	F-2	丸瓦	振り方埋土	粘土繊維 布目 斜鑓じ板	側面付近へラケズリ	調印式(変)→テグス縫位の吹調	
3	F-3	丸瓦	振り方埋土	みけ	側面付近へラケズリ	調印式(変)→テグス縫位の吹調	
4	G-7	平瓦	米 砂	側面			17-16
5	G-8	平瓦	米 砂	側面	側面付近へラケズリ	調印式(変)→賦文印字	
6	G-5	平瓦	2 扇	側面	側面付近へラケズリ	側面付近へラケズリ	
7	G-14	平瓦	Pt埋土	側面	側面付近へラケズリ	側面付近へラケズリ	
8	G-13	平瓦	SK-4, S埋土	側面	側面付近へラケズリ	側面付近へラケズリ	
9	G-11	平瓦	カマド	側面?	(略)	側面?(手縫)	

第12図 SI-1 穴住居跡出土遺物 (7)

I 地奥国分尼寺跡（第8次調査）



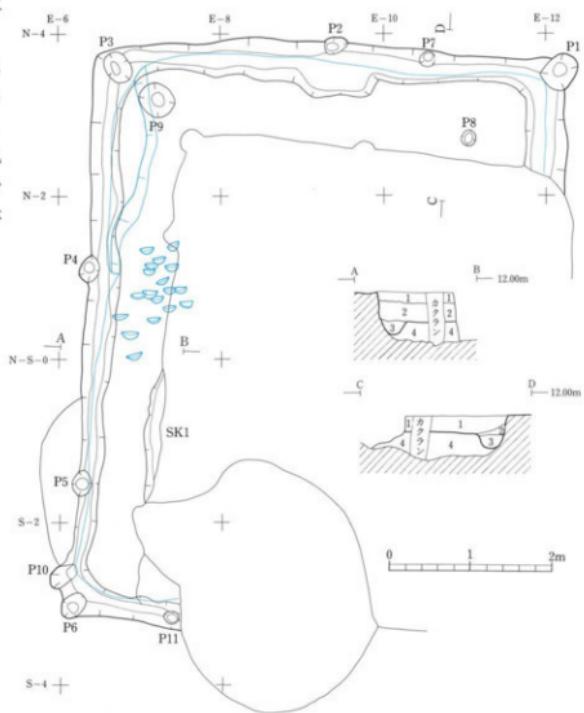
第13図 SI-1 積穴住居跡出土遺物（8）

SI-2 積穴住居跡 SI-1・4 積穴性居跡と重複関係にあり SI-1 積穴住居跡に切られ、SI-4 積穴住居跡を切っていることから、本住居跡が SI-1 積穴住居跡より古く SI-4 積穴性居跡より新しい。

SI-1 積穴住居跡及び後世の擾乱により住居跡南東側の大部分は削平されているが、北辺及び西辺が確認された。平面形は南北7.2m、東西5.85mの長方形を基調としたものであると思われる。西壁を基準とする主軸方向はN-14°-EでSI-1 積穴住居跡とほぼ同様である。堆積土は3層に分けられ、3層は周溝内の堆積土である。壁は最も保存の良い東壁の北側で57.5cmあり、床面から急角度で立ち上がる。床面は掘り方埋土の上面から成っている。ほぼ平坦であるが、若干南側へ傾斜している。周溝が検出され、住居跡残存部では全周している。幅は23~50cmと東側で幅が広くなっている。また、北側中央部では長さ1mにわたって幅が70cmと広くなっている部分がある。床面及び周溝内で11個のピットが検出されているがその全てに柱痕跡は確認されなかった。周溝内で検出されたP1・2・3・4・5・6・7・10・11は壁柱穴であると考えられる。また、SI-1 積穴住居跡掘り方底面検出ピットの

中で配置関係、深さなどからP-23・36・37が本住居跡の主柱穴、P-34・35・41が壁柱穴である可能性がある。カマドはSI-1竪穴住居跡による削平のため検出されなかった。貯蔵穴についても柱穴と同様にSI-1竪穴住居跡の掘り方底面検出のSK-6が可能性として考えられる。床面の南西部で土坑が1基検出された、SK-1はSI-1竪穴住居跡の削平により詳細は不明であるが、168cm×20cm以上で深さは11cm以上、平面形は不明である、堆積土は単層で、黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルトで粘性があり、黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト及び、炭化物を含んでいる。本住居跡の掘り方は床面残存部分では全体に確認されているが、SI-1竪穴住居跡の掘り方埋土の下層部分は本住居跡の掘り方埋土であると考えられ、底面のレベルに大きな差異はなさそうであるが、西壁際北半部で一段高くなっている部分が見られる。また、西側中央から北西隅付近の底面に1.5m×1mの範囲で長さ15cm～20cm、幅10cm、深さ数cmの半円形の工具痕が検出された。

出土遺物には土師器、須恵器、瓦、金属製品がある。このうち図示したものは土師器壺5点、須恵器壺、甕各1点、平瓦、丸瓦各1点、刀子、鐵鎌各1点である。土師器壺3点、須恵器壺1点に墨書が認められた。

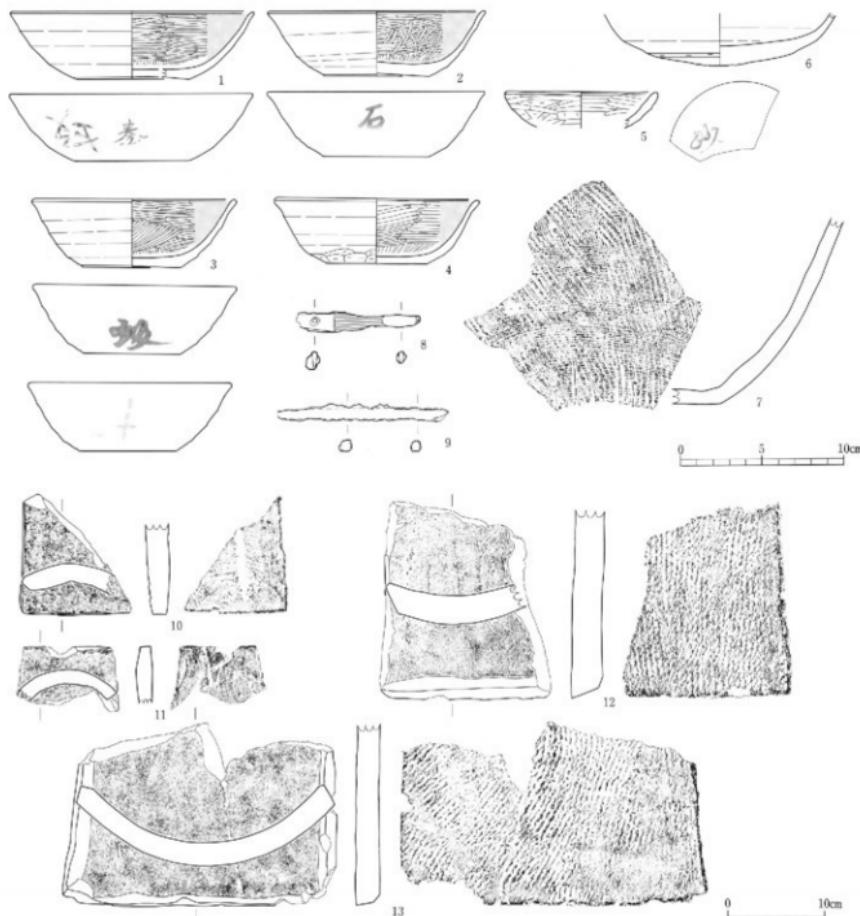


層位	No.	土色	土性	備考
住居跡	1	7.5YR4/4 黄褐色	シルト	10YR5/6 黏土質シルトを部分的に露出し状に含む。炭化物、小礫を含む。
堆積土	2	10YR3/4 明褐色	シルト	10YR5/6 黏土質シルトブロック、炭化物、小礫を含む。
貯蔵土	3	10YR4/3 にほい黄褐色	粘土質シルト	10YR5/6 黏土質シルトを露呈り状に含む。
掘り方埋土	4	10YR4/4 黄褐色	シルト	10YR5/4 シルトを露呈り状に含む。炭化物、鉄土、小礫を含む。

SI-2 ピット (cm)											
No.	P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8	P-9	P-10	P-11
深さ	79.5	32.5	59.5	43.5	33.7	45.0	23.5	30.6	16.5	23.8	49.5

第14図 SI-2 竪穴住居跡

1 陸奥国分尼寺跡（第8次調査）



No.	地點番号	種別	出 種	施 位	外 面	内 面	底 形	像 市	写真図
1	D-39	土器部	灰	縦丸型上	ロクイ調査	ヘラミガキ・黒色ぬれ	円柱赤切り無調査	体部に墨書き「板」「板」	17-18
2	D-37	土器部	灰	床 面	ロクイ調査	ヘラミガキ・黒色ぬれ	円柱赤切り無調査	体部に墨書き「石」	17-19
3	D-40	土器部	灰	墨書き土	ロクロ調査	ヘラミガキ・黒色ぬれ	円柱赤切り無調査	体部に墨書き「板」「十」	17-20
4	D-41	土器部	灰	(不明)	ロクロ調査	ヘラミガキ・黒色ぬれ	手持ちヘラケズリ		
5	C-7	土器部	灰	刷り方端土	ロクロ・ロコニア	ヘラミガキ・黒色ぬれ		印明里。口縁部分斜付着。	
6	E-12	土器部	灰	墨書き土	ロクロ調査	ロクロ調査	手持ちヘラケズリ	体部に墨書き「炒」	17-21
7	E-18	漆塗物	漆	周縁埋土	平行タタキ+ロクロ調査	ロクロ調査	—	内面に当て墨刷+ナデ	

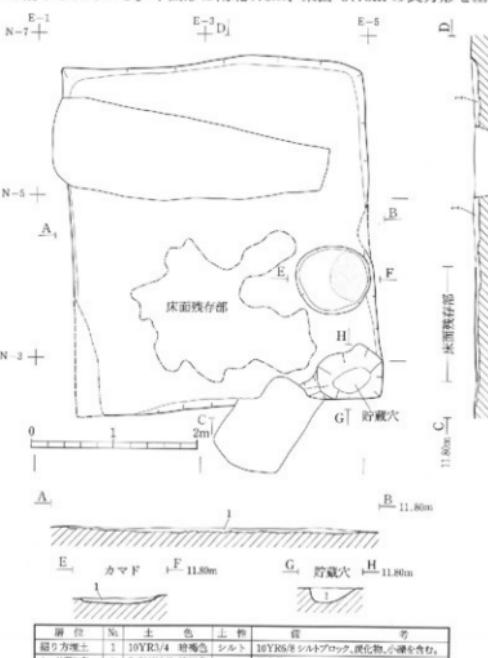
16	F-4	瓦	瓦	2 层	赤目 緑絞痕	小口付近ヘラケズリ	ナデ		
11	F-5	瓦	瓦		赤目 緑絞痕	小口付近ヘラケズリ	継印 8		
12	G-17	平 瓦	瓦	2 層	拂脊痕?	赤目 小口・側面付近ヘラケズリ	継印 8 (堅)→推文切跡	四面合瓦裏	18-7
13	G-16	平 瓦	瓦	1 層	赤目	側面付近ヘラケズリ	継印 8 (斜)→推文切跡		

No.	空鋌番号	種別	種 别	高 cm	重 量 g	写 真
8	N-30	漆器	刀子	(7.6)	7.1	17-22
9	N-36	漆器	漆瓶	(19.5)	11.9	17-23

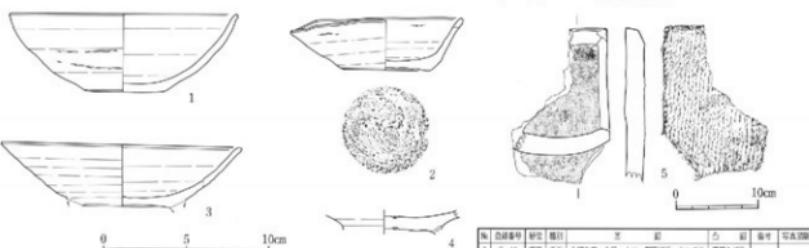
第15図 SI-2 穴室住居跡出土遺物

SI-3 穹穴住居跡 調査区北西部の2層上面で確認された。後世の耕作及び更地にする際の擾乱による削平をうけており、住居の掘り方及び床面の一部とカマドの掘り方、貯蔵穴のみが検出された。住居跡北寄りの西壁から東壁近くまでと南壁の東寄りで更に深い擾乱によって削平されている。平面形は南北4.3m、東西3.75mの長方形を基調としたものである。西壁を基準とする主軸方向はN-10°-Eである。床面は住居中央の南寄りに残存し、掘り方埋め土上面から成る。凸凹はなく平坦である。ピット、周溝は検出されなかった。東壁中央やや南寄りに上面が焼けている土坑が検出された。長さ92cm、幅82cm、深さ7cmの楕円形で上面に60cm×46cmの焼け面がみられ、カマドの上部構造は削平されて検出されなかったが、カマド底面の焼け面とカマドの掘り方であると考えられる。また、南東コーナーに長さ80cm、幅60cm、深さ20cmの不整な楕円形の土坑が検出され、貯蔵穴と考えられる。南壁際に溝が付いているが擾乱のため、どのようなものか不明である。本住居跡の掘り方は、下層の砂礫層の上面に底面が達している部分もありその部分では底面のレベルが変化している。

出土遺物には土器器、須恵器、瓦がある。このうち図示したものは土器器環1点、高台付环2点、平瓦1点である。



第16図 SI-3 穹穴住居跡

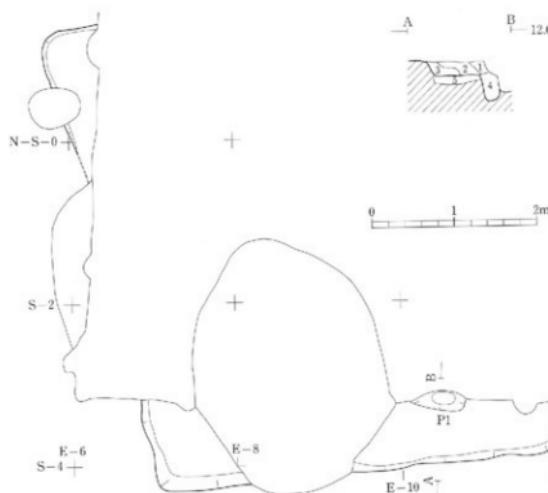


第17図 SI-3 出土遺物

No.	登録番号	種別	形態	裏面	外側	内面	表面	備考	写真図版
1	D-42	土器片	片	灰面	ロクロ彫型	ロクロ彫型	ロクロ彫型		
2	D-43	土器片	片	野面穴埋土	ロクロ彫型	ロクロ彫型	ロクロ彫型	内面全体と外側の一部に擦付有。	18-3
3	D-45	赤土上器	高台付环	灰面	ロクロ彫型	ロクロ彫型	ロクロ彫型		18-2
4	D-44	水洗土器	高台付环	灰面	ロクロ彫型	ロクロ彫型	ナメ模様	底部に空穴を中断した跡有。	18-1

I 陸奥国分尼寺跡（第8次調査）

SI-4 穫穴住居跡 SI-1・2 穫穴住居跡と重複関係にあり、いずれにも切られていることから、本住居跡が最も古



部位	No.	上色	土性	備考
住居跡 壁構土	1	10YR3/4 褐褐色 10YR4/6 黄褐色	シルト 粘土質シルト	炭化物、地面上を含む。
	2	7.5YR1/4 黄褐色	シルト	少量の炭化物を含む。
	3	10YR3/3 にぼい黄褐色	シルト	10YR3/6 黄土質シルトブロックを含む。
P1	4	10YR2/4 暗褐色	シルト	小礫を含む。
掘り方廻土	5	10YR3/6 黄褐色	粘土質シルト	小礫を含む。

SI-4 ピット (ca)

No.	P-1
面S	32.0

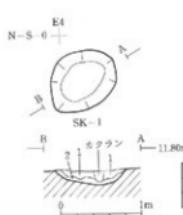
第18図 SI-4 穫穴住居跡

設が含まれている可能性がある。本住居跡の掘り方は床面残存部分では全体に確認されているが、住居跡南側が

深く、北西コーナー部ではやや浅くなっている。

出土遺物には土師器、須恵器、瓦があるが、小片のみであり、図示しなかった。

SK-1 土坑 調査区南西部中央付近の2層上面で確認された。平面形は長軸0.95m、単軸0.75mの楕円形で、深さは23cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分けられる。底面はほぼ平坦で、北東側にやや傾斜している。出土遺物には土師器、須恵器、瓦があるが、小片のみであり、図示しなかった。



No.	上色	土性	備考
1	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	炭化物、礫土を含む。10YR3/6 にぼい黄褐色小ブロックを含む。
2	10YR3/3 黄褐色	シルト質粘土	炭化物、礫土を含む。10YR3/6 黄土質シルトを間隔で柱状に含む。

第19図 SK-1 土坑

遺構外出土遺物 試掘トレンチ及び、表土、擾乱層からの出土遺物として、土師器、須恵器、瓦、鉄製品がある。そのうち図示したものは、土師器壺5点、軒平瓦4点、平瓦5点、丸瓦2点である。土師器壺3点に墨書き、丸瓦1点に刻印が認められた。

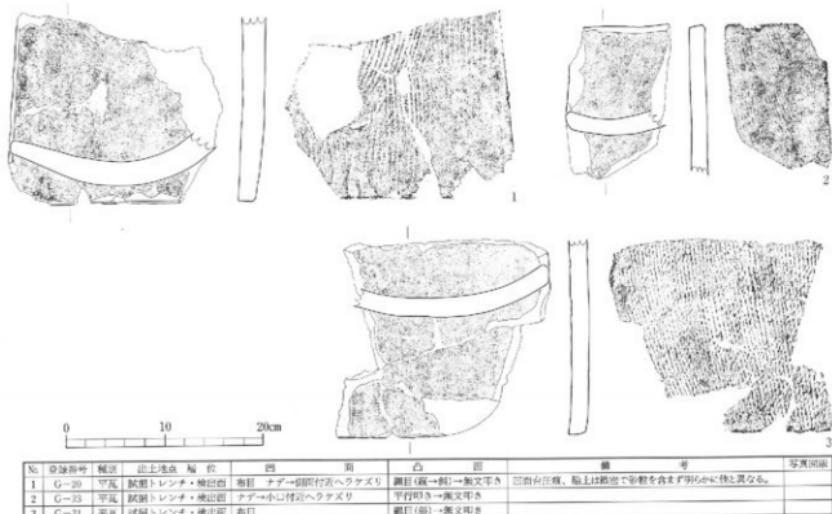


No.	登錄番号	種別	質	出土場所	層位	外観	内観	底部	備考	写真図版
1	D-45	土師器	泥	試掘トレンチ	椚山面	ロクロ調整	ヘミガキ・薄色灰胎	子鉢ちへラケズ		
2	D-46	土師器	泥	カクラン		ロクロ調整	ヘミガキ・薄色灰胎	子鉢余の無施釉	体底下部に浅削（3条）状のロクロ調整痕あり。	
3	D-48	土師器	泥	土師器		ロクロ調整	ヘミガキ・薄色灰胎	子鉢ちへラケズ	体底下部に墨書き（模様有り）、既次ロクロ調整痕あり。	
4	D-56	土師器	泥	試掘トレンチ	椚山面	ロクロ調整	ヘミガキ・薄色灰胎	半持ちへラケズ	体底に初期的墨書き有り（内容不明）	
5	D-47	土師器	泥	カクラン		ロクロ調整	ヘミガキ・薄色灰胎	回転糸切り無施釉	底面に墨書き（模様有り）、体底下部に初期的ロクロ調整痕あり。	13

No.	登録番号	種別	出土場所	層位	四面	凸	凹	備考	写真図版
6	F-7	刻印文瓦	表土	布目	布織じ痕	ナゲ「足」字細印			14-5
7	F-8	丸瓦	試掘トレンチ	椚山面	布目	布織じ痕、ナゲ一小口・側面付近へラケズリ、剥きき・ナゲ	剥きき・ナゲ		
8	G-4	神瓦瓦	表土	ナゲ・小口	側面付近へラケズリ	平行印字・ナゲ	側面付近へラケズリ	平行印字・ナゲ	14-6
9	G-1	神瓦瓦	試掘トレンチ	椚山面	ナゲ・小口	側面付近へラケズリ	平行印字・ナゲ	平行印字・ナゲ	14-7
10	G-3	神瓦瓦	表土	ナゲ	側面付近へラケズリ	平行印字・ナゲ	側面付近へラケズリ	平行印字・ナゲ	14-8
11	G-2	神瓦瓦	試掘トレンチ	椚山面	系脱り板・ナゲ・無出筋付近へラケズリ	平行印字・ナゲ	側面付近へラケズリ	平行印字・ナゲ	14-9
12	G-22	平瓦	試掘	椚山	椚山	椚山	椚山	椚山	14-10
13	G-19	平瓦	試掘トレンチ	椚山面	ナゲ	椚山	椚山	椚山	14-6

※瓦の分類は伊東復基編『鎌倉國分寺跡』1961による。

第20図 遠横出土遺物（1）



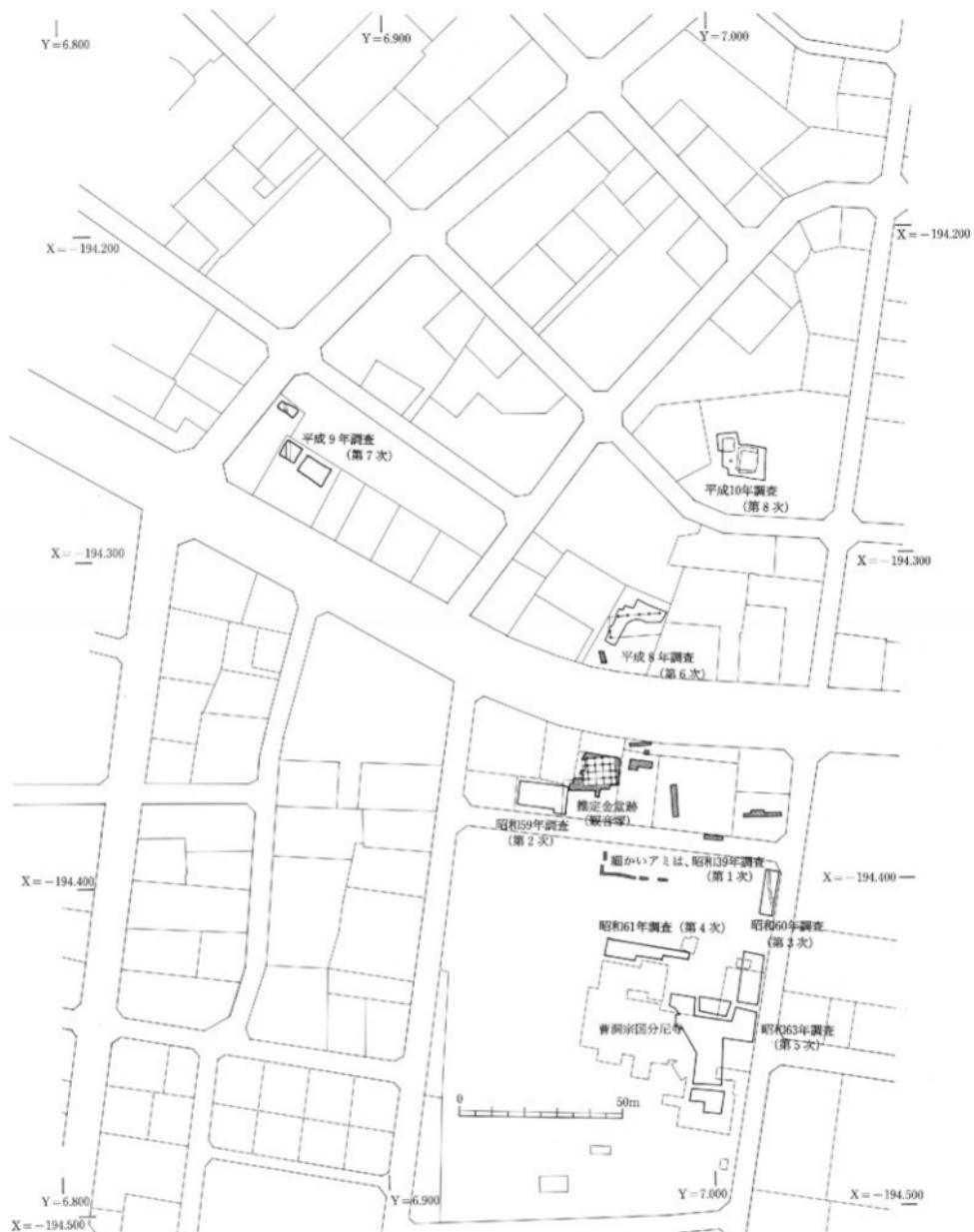
第21図 遺構外出土遺物（2）

4まとめ

1. 今回の調査は、陸奥国分尼寺の推定寺域の北東部で行われた。
2. 今回の調査で発見された遺構は竪穴住居跡4軒、土坑1基であり、陸奥国分尼寺に係わる施設と考えられるものは検出されなかった。このうち、SI-1 竪穴住居跡は堆積土中の焼土や炭化物の状況や、出土した遺物の多くが二次的に火熱を受けた痕跡が認められること、床面に炭化材が散見されることなどから火災住居であると思われる。また、極めて大型の須恵器の甕が3個体の他、鉄製品が直刀1点、刀子5点、鐵鎌5点、紡錘車4点の計10点出土しており、一般の集落の住居とは異なった性格を伺わせる。
3. 出土遺物は、土師器、須恵器、鉄製品、瓦など、整理用平箱で20箱程である。大部分がSI-1 竪穴住居跡の出土遺物である。土師器は成形の際にロクロを使用したものと使用しないものがある。ロクロ使用のもので、SI-1、2 竪穴住居跡出物のものは、壺、高台付壺において全て内面にミガキ調整、黒色処理が施されており、外面の体部下半にケズリ調整が施されているものがある。SI-3 竪穴住居出物のものは内、外面共にロクロ調整のみで、内面の黒色処理はない。SI-1、2 出物のものは平安時代でも前半の時期である9~10世紀初めの年代が考えられ、SI-3 出物のものは平安時代後半以降年代と考えられる。ロクロ不使用のものは主にSI-1、2 竪穴住居跡の掘り方埋土から出土しており9世紀頃のものであると考えられる。須恵器については土師器と同様の年代が考えられる。また、墨書きの土器が土師器7点、須恵器1点の計8点認められ、「佛」、「妙」など仏教との係わりを伺わせるものがあり興味深い。
4. これまでの調査では、陸奥国分尼寺の伽藍配置はもとより、寺域範囲についても明らかになっていない。これらを今後の課題として著しい都市化によって発掘調査の実施が困難になりつつある本遺跡周辺地区においては、計画的に調査を進めて行くことが急務であると考えられる。

参考文献 仙台市教育委員会(1969)：『史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書』仙台市文化財調査報告書第4集

根本光一(1998)：『III 陸奥国分尼寺跡（第7次調査）』『神明社宮跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第232集



第22図 陸奥国分尼寺跡調査地点と建物配置図



写真1 調査区実況全景（西→）

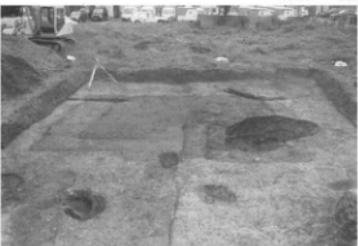


写真2 SI-1.2.4 検出状況（西→）



写真3 SI-1 床面の状況（西→）



写真4 SI-1 カマド付近（西→）

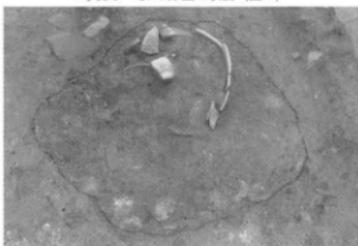


写真5 SI-1 貯蔵穴検出状況（北西→）



写真6 SI-1 貯蔵穴中の須恵器の状況（北西→）



写真7 SI-1 遺物出土状況（西→）

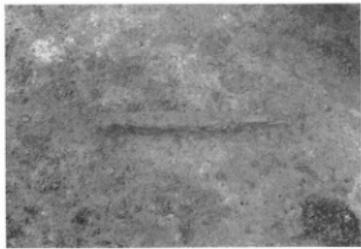


写真8 SI-1 直刀出土状況（南西→）

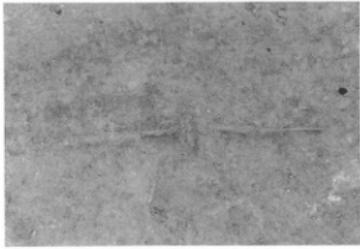


写真9 SI-1 紡錘車出土状況（南西→）

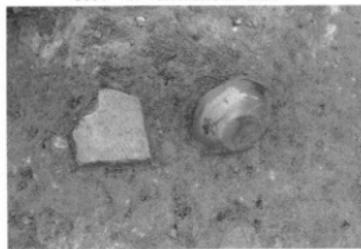


写真10 SI-2 遺物出土状況（西→）



写真11 SI-1 掘り方・SI-2 床面の状況（南→）

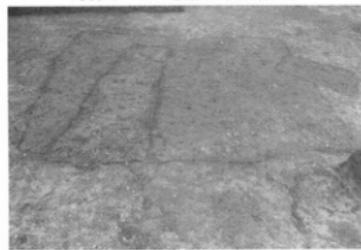


写真12 SI-3 検出（床面）状況（西→）

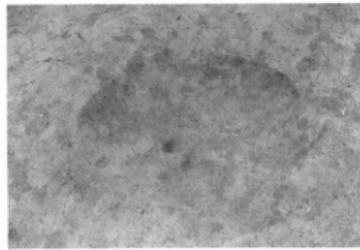


写真13 SK-1 完掘状況（北西→）



写真14 出土遺物（1）SI-1 壁穴住居跡出土土器

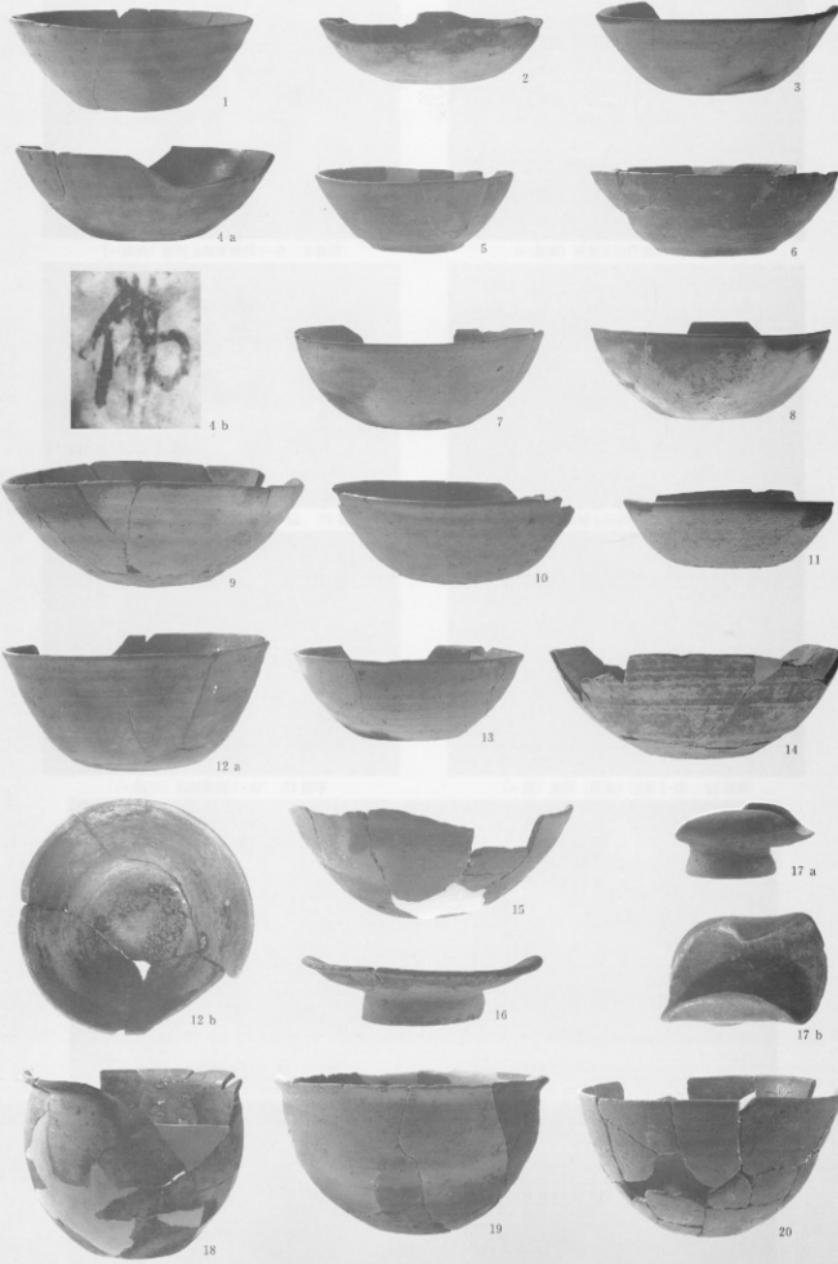


写真 15 出土遺物 (2)



写真16 出土遺物（3）

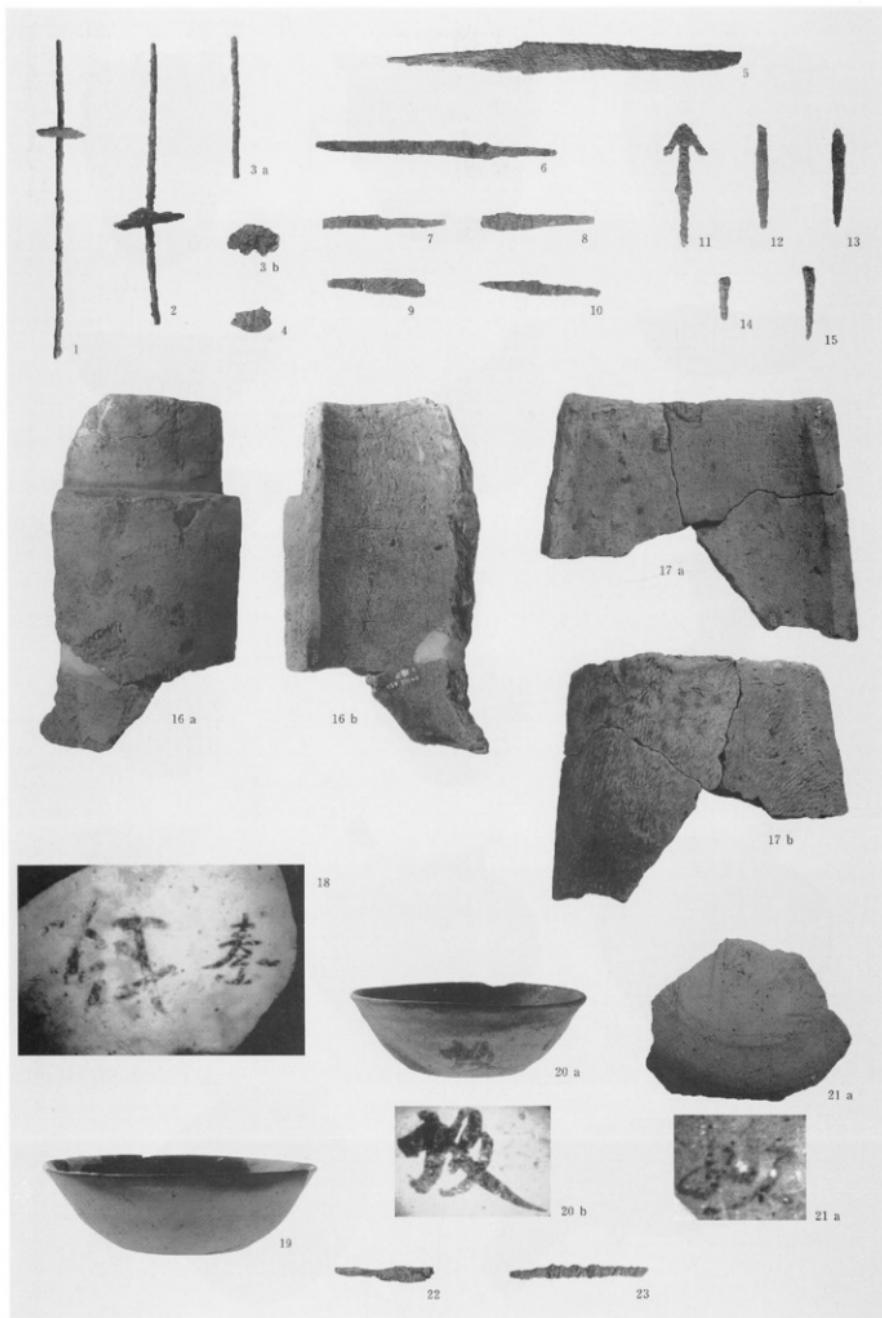


写真17 出土遺物 (4)

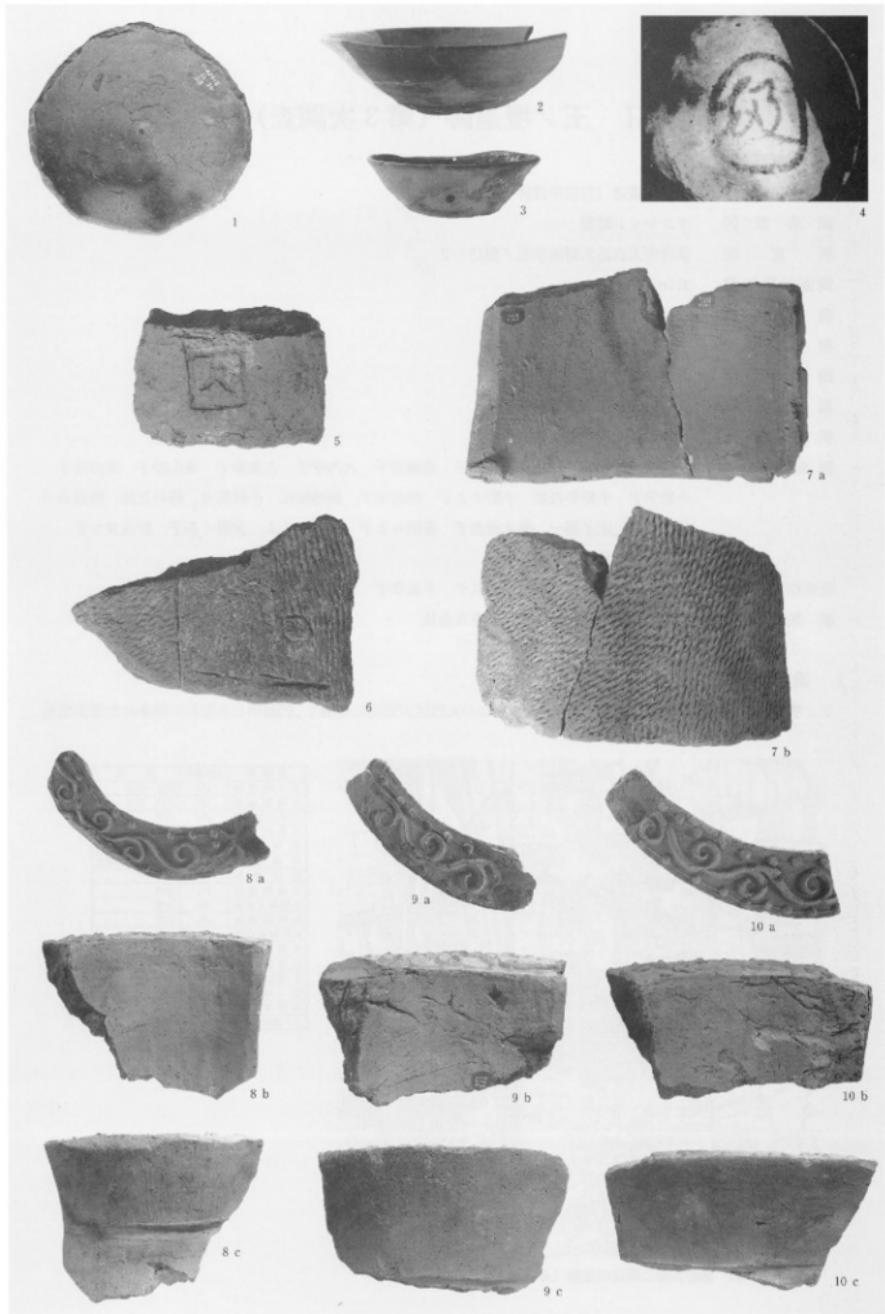


写真18 出土遺物(5)

II 王ノ壇遺跡（第3次調査）

I 調査要項

遺跡名	王ノ壇遺跡（宮城県遺跡番号 01428）
調査原因	マンション建設
所在地	仙台市太白区大野田字王ノ壇13-2
調査対象面積	317m ²
調査面積	約205m ²
調査期間	平成10年4月13日～6月9日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	佐藤 洋・五十嵐康洋
調査参加者	赤間淳子 飯塚 稔 伊東恵美子 遠藤清子 大内孝子 大友泰子 奥山妙子 岩山祐子 小野栄子 小野早央里 小野さよ子 布沼幸子 菊地和江 小林篤夫 酒井正雄 篠原良子 柴田徳郎 庄子進一 鈴木貴美子 曽根ちよ子 種田ふくよ 永野くみ子 針生せつ子 依田光子 米澤俊子
整理作業参加者	相沢美佐子 佐藤悦子 高橋弘子 小泉幸子 若生洋子
調査協力	福仙興業株式会社 住研工業株式会社

2 遺跡の位置と環境

王ノ壇遺跡は仙台市地下鉄富沢駅より東へ約0.8kmの太白区大野田に位置し、広瀬川と名取川に挟まれた郡山低地

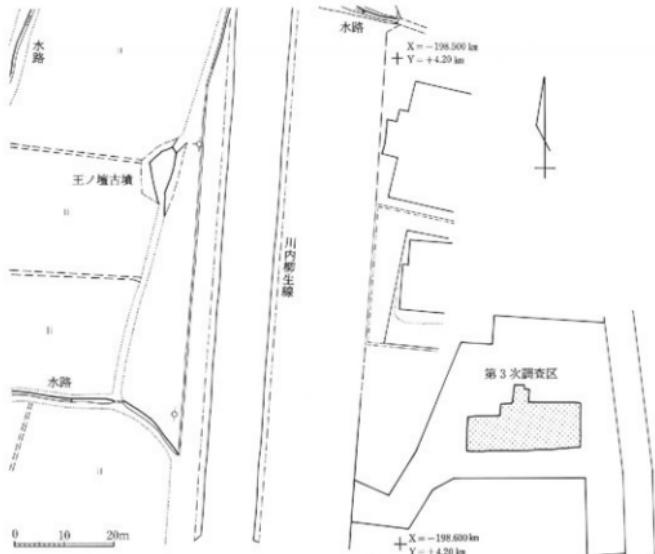


遺跡名	地図番号	時代
三ノ要遺跡	428	绳文～中世
日高聚落跡	429	古代・中世
大野田古墳群	361	古墳
大野田遺跡	94	绳文～古代
荒前遺跡	429	绳文・古代
元袋遺跡	179	弥生・古代～近世
新田遺跡	181	古代
三層廻遊跡	182	古代
長町塗水遺跡	183	古墳
長町南遺跡	414	古代
長町北河遺跡	449	弥生～古代
足神古跡	365	中世
三城古跡	428	中世
三ノ堀古跡	426	中世
三ノ堀古墳群	321	古墳
鳥居原古墳	322	古墳
王ノ壇古跡	415	中世

第1図 調査位置と周辺の遺跡（★は第3・4次調査地点）

と呼ばれる沖積地上にのる。この低地は扇状地性で、自然堤防や後背湿地等から成っている。遺跡は、低地を流れる荒川（名取川の支流）右岸の自然堤防に立地している。遺跡内や周辺では水田が広がっていたが、最近は急速に宅地化が進行している。遺跡は、東側（荒川方面）に下がる緩斜面となっており、標高は10~11mである。

本遺跡では、都市計画道路建設に伴って昭和63年度より平成5年度まで調査が行われ、縄文時代から中世にかけ複合遺跡であることが判明した。また、平成6年度より土地区画整理事業の一環として、遺跡の西辺部の調査（第2次）を行った。周辺には、多数の古墳や中世の道路跡が発見された大野田古墳群、多量の土器や土偶が出土した大野田遺跡、北には富沢遺跡、北東には郡山遺跡や北目城跡等がある。4次調査区は、北へ140mにある。



第2図 調査区配置図

3 調査に至る経過と調査方法

平成8年9月30日付で、仙台市太白区大野田字王ノ塙8-3 小林利男氏より仙台市太白区大野田字王ノ塙13-2にマンション建設の発掘届が提出された。この場所は、本遺跡中央部東辺に位置し、過去の調査では縄文時代から中世の遺構群が発見されている。このため、申請者と協議の上、建物部分について事前に発掘調査を行うこととした。平成10年4月13日より、建物予定地に約200m²の調査区を設定し、まず盛土を重機によって除去した。ちなみに、盛土以前は水田として利用されていた。その後は、人力による精査を行った。

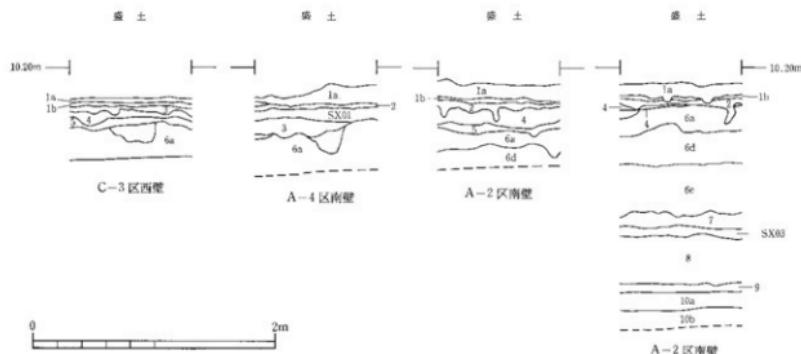
4 基本層序

今回の調査では、盛土（層厚1.2~1.5m）下に大別10層、細別では18層の層序を確認した（第4図）。1層は最近の盛土以前の水田耕作土、2~5層は粘土質シルト～シルト質粘土、6a~6f層は粘土層主体であるが、砂が混じるようになる。7層は粘土層であり、8~10層は砂層主体へ変化している。

II 工ノ塙遺跡（第3次調査）



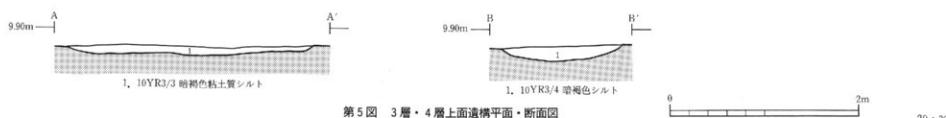
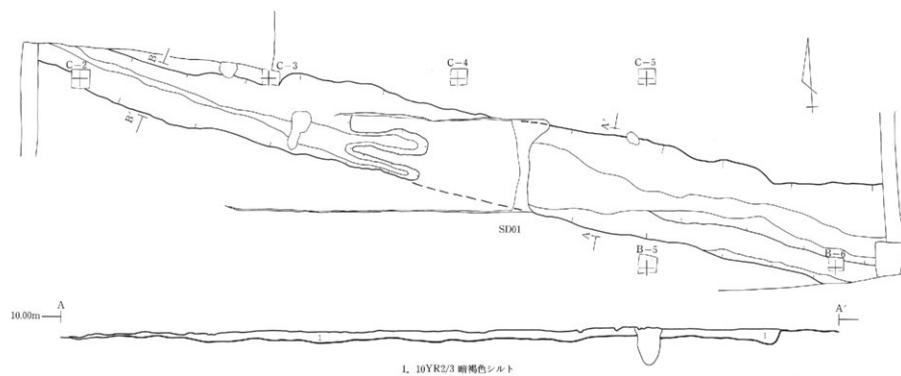
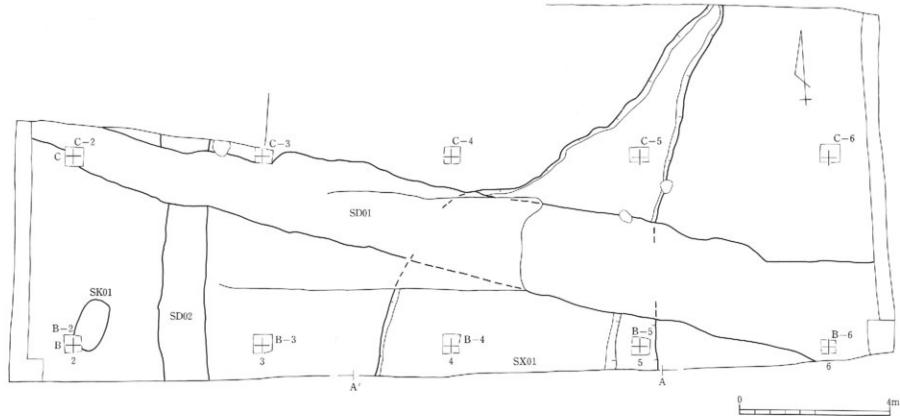
第3図 グリッド配置図（調査状況図）



第4図 基本土層図

このうち、3層は調査区中央から南東部にかけて、4・5層は主に調査区中央部に分布している。4層には、ブロック状の灰白色火山灰が認められる。6層は7層に細分したが、これらの層は凹地（SX06）を中心に分布してい

層名	特徴	層号	層名	特徴	層号
1a	2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト	田水田	6d	10YR 2/3 黄褐色粘土	炭化物含む
1b	7.5Y 3/4 暗褐色シルト質粘土	表生集積層	7	10YR 3/4 黄褐色粘土	明瞭な土層包含層
2	10YR 3/3 暗褐色粘土質シルト		8	10YR 4/4 灰色粘土シルト	
3	10YR 2/2 暗褐色粘土	マンガン粒含む	9	10YR 4/3 に bei 黄褐色沙質シルト	
4	10YR 3/2 暗褐色シルト質粘土	火山山ブロック含む	10a	2.5Y 3/3 灰オーラー褐色細砂	
5	10YR 3/4 暗褐色粘土質シルト	マンガン粒・白色粒含む	10b	10YR 4/3 に bei 黄褐色細砂	
6a	10YR 4/4 灰色粘土				
6b	10YR 4/4 灰色シルト	砂を含む	bc'	10YR 3/4 黄褐色シルト質粘土	砂含む
6c	10YR 4/4 灰色シルト		ア	2.5Y 5/4 黄褐色粘土	(樹木根か)
6d	10YR 3/4 暗褐色シルト	一部	イ	10YR 4/3 に bei 黄褐色粘土	砂多量に含む
6e	7.5Y 黑褐色シルト				



第5図 3層・4層上面遺構平面・断面図

る。7層は、調査区西部（SX06の西側）に限られるようで、縄文時代後期の遺物包含層である。第1次調査（都市計画道路）の8層に相当するものと予想される。8層以下は砂質となり、9層以下では無遺物層となる。

5 発見構造と出土遺物

（1）3層上面検出遺構（第5図）

3層上面で、溝跡1条、性格不明の落ち込み1基を検出した。なお、西部では4層上面となっている。

SD01（第5・6図）

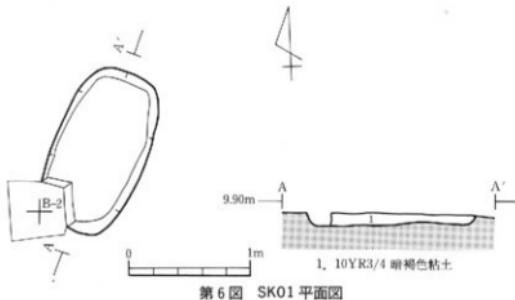
調査区南寄りに位置し、調査区を東西に横切る。規模は検出長22.96m、幅2.72m、深さ15cmで、方向はN-76°-Wで直線的である。SX01と重複するが、これより新しい。溝断面は皿に近いが、溝底中央が高い部分や、壁面に軽く段の付くところもある。出土遺物は、瓦質擂鉢（第11図2）、中世陶器甕（在地・第11図1）、壁土片がある。瓦質土器の出土から、戦国期以降の時期が推定できる。

SX01（第5図）

調査区中央部東寄りに位置し、SD01に切られ、小溝状遺構を切っている。形状は不定形で、北部は溝状になる落ち込みである。西辺の壁は直立するが、東辺の壁は立ち上がりが緩く不明瞭である。底面は、概ね平坦である。規模は長軸約13m、短軸最大約7.1m、深さ16cmで、方向はN-31.5°-Eである。出土遺物は、土師器細片が1点だけである。内部には黒い土が堆積しており、SD01や02と類似していることから、中世の時期が予想される。

（2）4層上面検出遺構（第5図）

4層上面で、土坑1基、溝跡1条を検出した。ただし、これらの遺構は、基本層3層の分布していない地点にあり、注意が必要である。



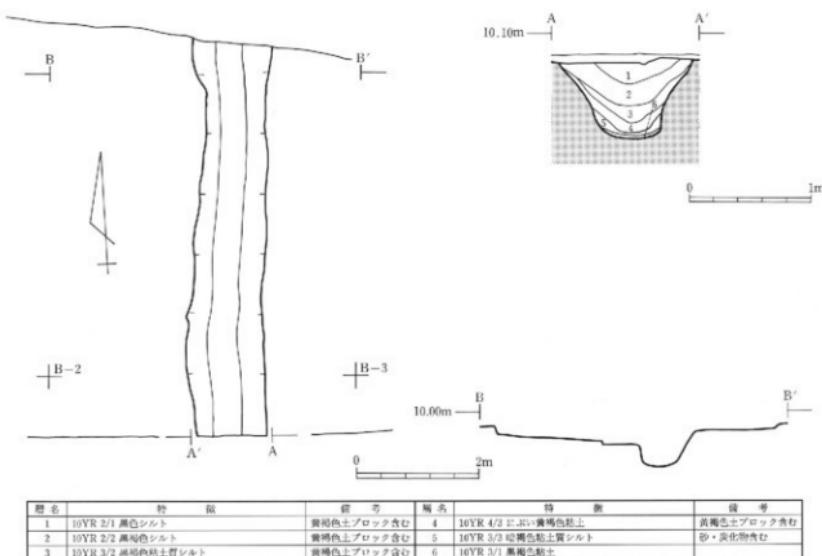
第6図 SK01 平面図

SK01（第6図）

調査区西部B-2区に位置し、他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、底面は平坦である。規模は、1.36m×0.76m、深さ11cmで、方向は長軸がN-26.5°-Eである。遺物は出土していない。（旧名称SK02）

SD02（第7図）

調査区西部B-2区を中心に位置する南北方向の溝跡である。規模は検出長6.52m、幅1.3m、深さ64cmで、断面形は逆台形に近い形である。方向はほぼ真北を示す。出土遺物は、僅かに2層より土師質土器皿とみられる細片が1点ある。中世の溝と考えられる。



第7図 SD02 平面・断面図

(3) 5層上面検出遺構

SX02 (第8図)

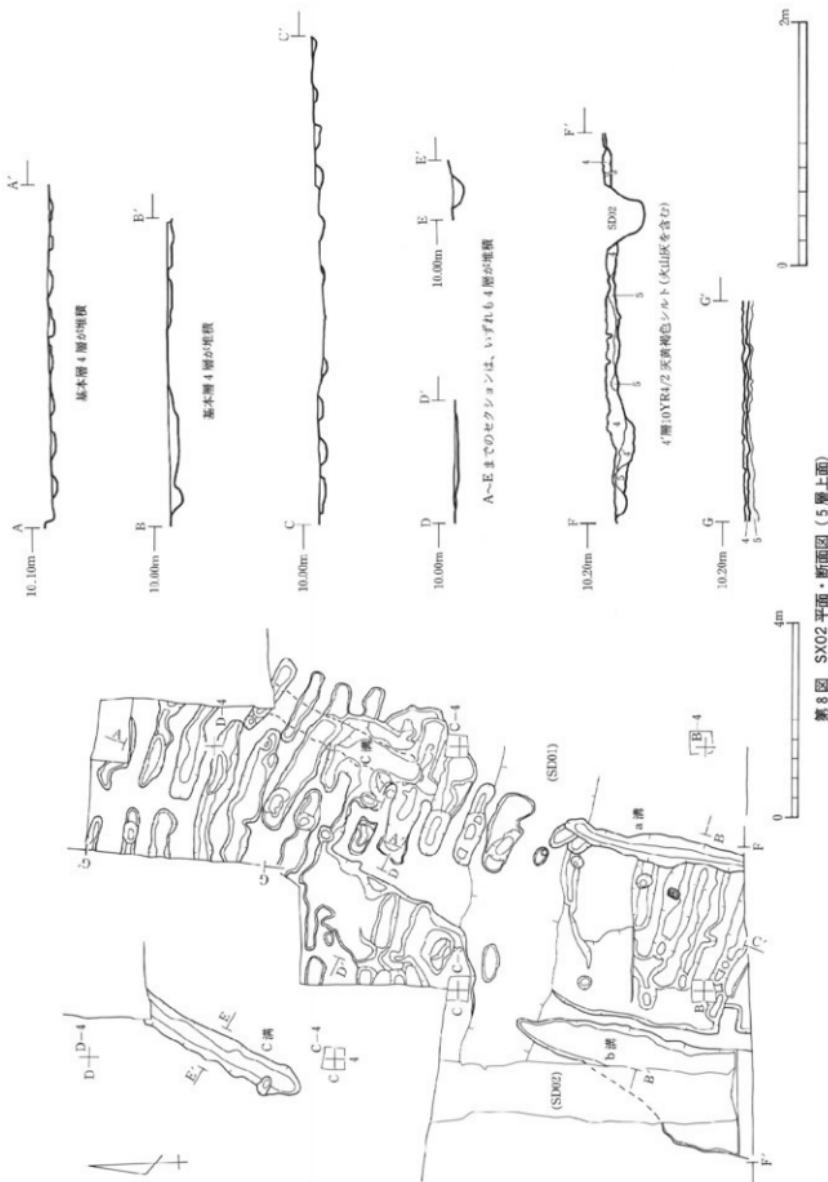
この遺構は、溝状、土坑状の落ち込みの集合体で、およそ南北に帯状に連なる。SD01・02に切られている。規模は、全体として長さ約14.8m、幅約3mである。深さは平均10cm前後であるが、土坑状に深くなる所では30cmを越す所もある。このような深い部分を主体に、この遺構を覆った上層中（4層）に火山灰ブロックが、多量に含まれる部分（中央～南部）がある。また、南半部と北半部では形状が少し異なっている。南半部は、東西方向の溝部の両サイドを南北方向の溝a・bが区切るような形状である。北半部は全体の幅が広がるようで、南北方向の溝の集合体が、東西に3～4列並列しているようにみえる。また、東辺部では、集合する溝群の直下で溝Cが検出された。この溝Cにも、火山灰ブロックが含まれている。こうした特徴から、北半部は2時期以上の変遷が予想される。溝bの東側には、畦状の高まりがある。また、溝の間の凸部に火山灰ブロックが乗っている所もある。基本層5層として扱った土層は、この遺構の範囲とおよそ重なる。遺構全体の方向は、およそN-19°-Eである。

遺物は、溝部より赤焼土器高台付壺、ロクロ使用土師器（壺・甕）、須恵器（壺・瓶類）などが出土している。また、基本層5層中では、土師器甕？、須恵器（壺・瓶類）が出土している。このうち、溝部と5層の瓶類どおしが接合し、長頸瓶（第11図6）であることが判明した。口頭部内面には、茶色の漆が付着している。

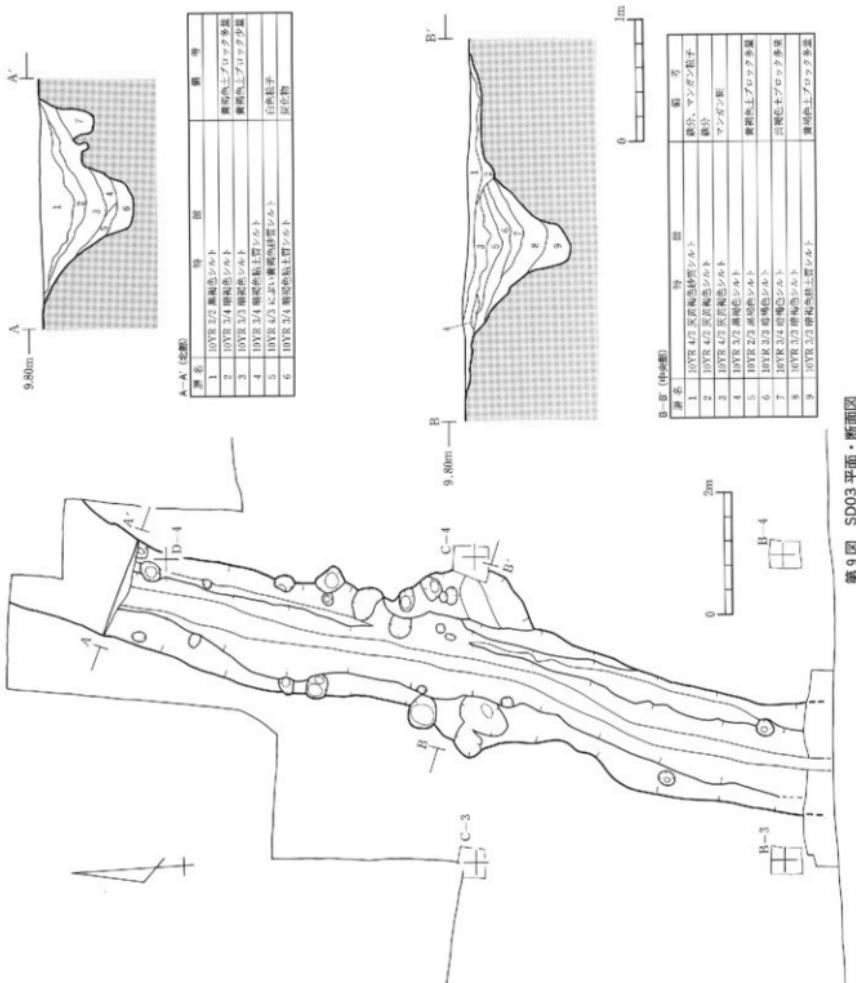
(4) 6a層上面検出遺構（第10図）

6a層上面で、溝1条、小溝状遺構群6基、ピット153個を検出した。

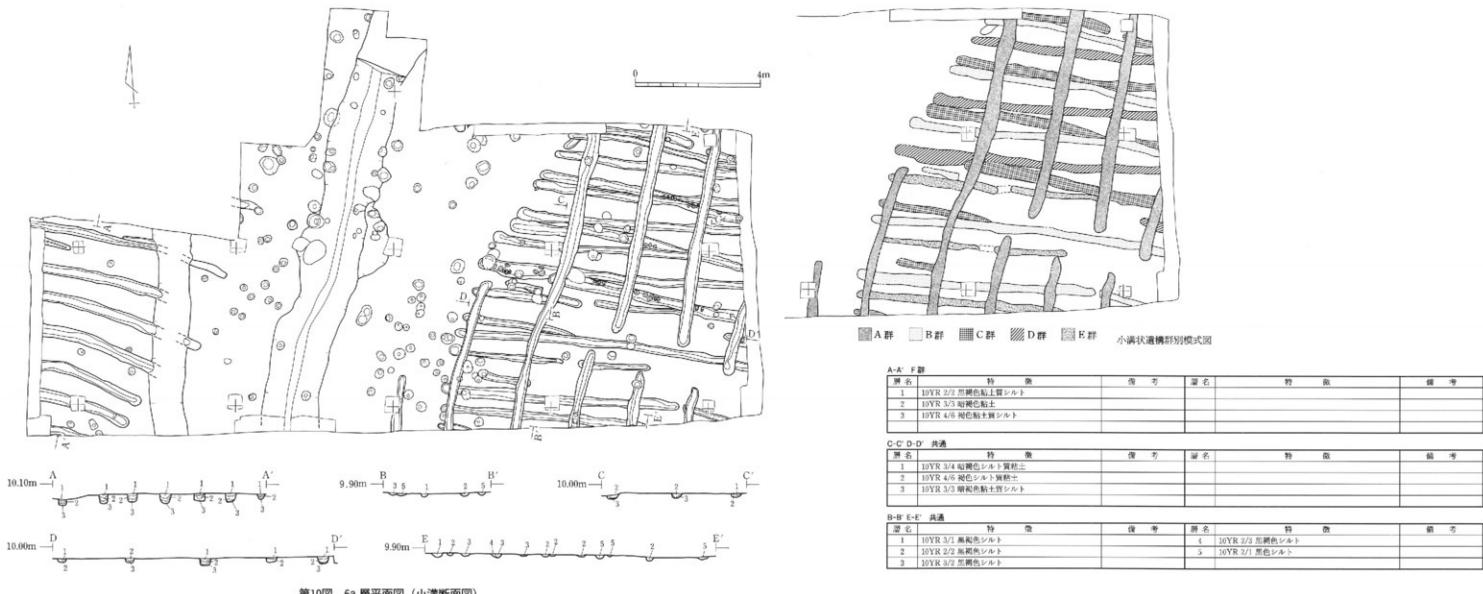
SD03 (第9図)



第8図 SX02平面・断面図（5層上面）



調査区中央部 B-D-3 区に位置するおよそ南北方向を示す溝跡である。規模は検出長13.68m、幅1.88m、深さ89cmで、断面は逆台形に近い形状である。方向は、N-15.5°-E である。溝中央部には、東側へ張り出るように落ち込みがある。多数のビットと重複しているが、溝より古いものと新しいものの両方が認められる。一方、後述する小溝状遺構群とは重複がない。位置関係をみると、むしろ重複しないように距離を保っているように見え、有機的関連があるかもしれない。出土遺物は、上層でロクロ土師器壺、非ロクロ土師器壺(底部木葉痕)、須恵器壺などの



第10図 5a 層平面図（小溝断面図）

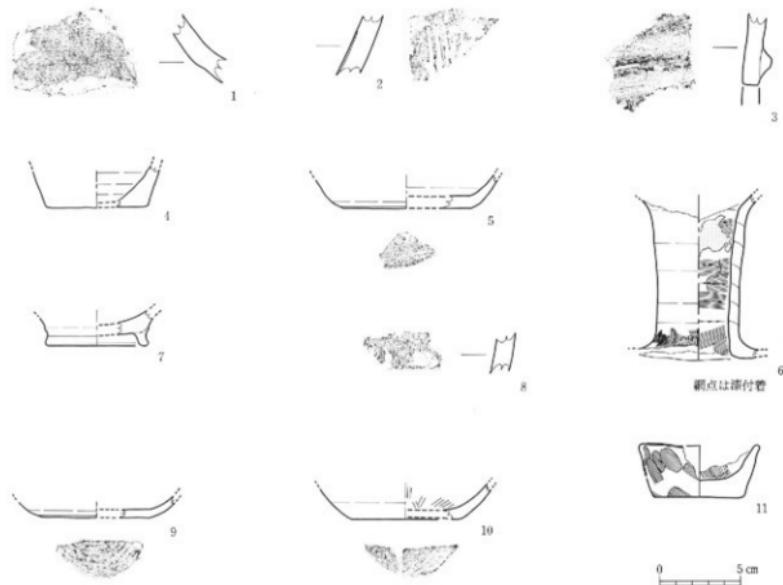
細片が、中層では埴輪片（第11図3）が1点ある。下層から底にかけては、遺物は出土していない。古墳時代より平安時代の遺物が出土しているが、数量も少なく時期決定が難しい。

小溝状遺構群（第10図）

小溝状遺構群は、SD03を介在させてその東西に位置している。このうち、東部のものは方向や重複関係から5つのグループに分けた。グルーピングに際しては、小溝の方向や形状の類似そして等間隔に近いもので選別した（第10図）。

＜A群＞調査区東部に位置し、南北方向の溝9条以上で構成される。ただし、溝が途切れた部分でグループ分けすることも可能だが、ここでは一連のものとして扱っておく。A群はB～E群を切りSD01・SX01に切られる。溝は上幅が20～50cm、深さ12～31cmで、溝間の間隔は1.8～1.9m（平均1.87m）である。方向はn-8.5°～16°-Eとやや不規則である。遺物は出土していない。

＜B群＞調査区東部に位置し、東西方向の溝6条以上で構成される。B群はA群・SD01・SX01に切れられ、C群を切る。溝は上幅18～42cm、深さ8～12cmで、溝の間隔は1.6～1.7m（平均1.66m）である。方向は、N-81°～86°-W



第10図 古代～中世出土遺物

番号	遺物名	地 区	区	種	埋位	解 釋	目 標	時 代	等 高
1	12	B 2 区		SD1	頂1層	中世初期	甕	竪持	17-1
2	15	B 6 区		SD1	頂1層	瓦質土器	縦持		17-2
3	61	A-3 区		SD03	塊	甕			17-3
4	1	中央部			2層	瓦質十字型	小型甕		17-4
5	44	B-5 区	SX02 上	4層	瓦質胎	环	甕割切り隠し不規則、底面へフタ残り、底径7.8cm、唇高2.1cm		17-6
6	36・24等	B-5 区	SX02 上	4層	瓦質胎	長脚瓶			17-8
7	29			SX02 上	4層	赤陶土器	ロクロ調査、底径6.3cm、唇高2.7cm		17-7
8	29	C-4 区			5層?	甕			17-9
9	48	B-4 区			5層	破壊器	ロクロ調査、底面2枚余切り、底径6.6cm、唇高1.4cm		17-11
10	48	B-4 区			5層	土持器	外側瓦面調査、内面1辺が土色処理、底径6.6cm、唇高2.2cm		17-10
11	63	C-5 区		Soit6 頂	1ニチュー	小甕鉢	手づくり、内外指ナメ、底径7.6cm、唇高3.3cm		17-12

である。遺物は出土していない。

<C群>調査区東部に位置し、東西方向の溝7条以上で構成される。C群はA群・B群・SD01・SX01に切られ、D群・E群を切っている。溝は上幅20~42cm、深さ8~12cmで、溝の間隔は1.7~1.8m（平均1.75m）である。方向は、N-79°~83°-Wである。遺物は出土していない。

<D群>調査区東部に位置し、東西方向の溝4条以上で構成される。D群はA~C群・SX01に切られる。溝は上幅20~50cm、深さ7~10cmで、溝間は約1.7mでほぼ揃っている。方向もN-84°~85°-Wで揃っている。遺物は出土していない。

<E群>調査区東部に位置し、東西方向の溝3条以上で構成される。E群はA~C群・SD01・SX01に切られる。溝は上幅14~32cm、深さ6~10cmで、溝間は1.8~1.9m（平均1.85m）である。方向はN-84°~85°-Wで、ほぼ揃っている。遺物は出土していない。

<F群>調査区西部に位置し、およそ東西方向を示す溝9条以上で構成される。F群はSD02に切られるが、小溝どうしの重複はみられない。溝は上幅24~40cm、深さ18~32cmで、溝間は狭く0.5~1.1m（平均0.9m）である。方向はN-68°~75°-Wである。遺物は、溝内より非クロコ土師器壺の細片が4点出土しているが、時期決定資料にはならないようである。

A~E群とF群の対応関係は不明だが、SD3と共に伴して、一つの生活面を構成していたものと考えている。また、これらの遺構付近には多数のビット（153個）が検出されたが、建物になる柱穴があるか明らかではない。さらに、小溝群やSD3と比較して古いものや新しいものの両者があつて、ビットも2~3時期の変遷が予想される。この6a層上面の遺構群は時期を特定できないが、およそ古墳時代~平安時代（火山灰降下以前）の間の所産と考えられる。

（5）8層上面検出遺構（第12図）

8層上面では、性格不明遺構5基検出した。

SX03（第13図）

調査区西部A-2区に位置し、他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。規模は、2.27m×0.85m以上、深さ8cmである。出土遺物は縄文土器があり、A-2区7層と接合した小型深鉢（第14図1）、SX05・07と基本層7層と接合した深鉢（第14図4）がある。時期は、縄文時代後期中葉であろう。

SX04（第13図）

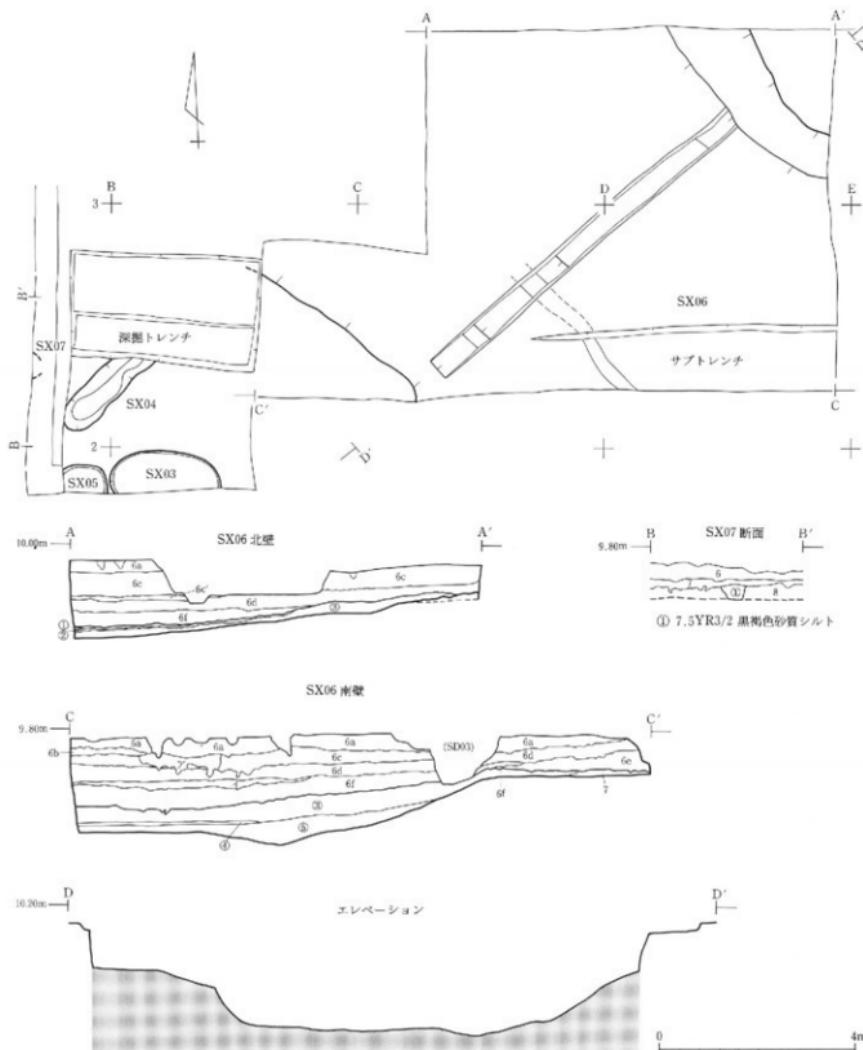
調査区西部B-1・2区に位置し、他の遺構とは重複していない。平面形は溝状に細長く、断面は「U」字形に近い。規模は2.25m以上×0.7m、深さ27cmで、長軸方向はN-47°-Eである。出土遺物は、SX07・B-1区7層と接合した深鉢（第14図7）と土製円板（第14図2）がある。時期は、縄文時代後期中葉であろう。

SX05（第13図）

調査区西部A-1区に位置し、他の遺構とは重複していない。平面形は円形とみられ、底面は平坦である。規模は、1.22m×0.55m以上、深さ9cmである。出土遺物は縄文土器片が少量あり、そのうちの1点がSX03・07などと接合している（第14図4）。縄文時代後期中葉であろう。

SX06（第12図）

調査区中央部で検出した、溝状の凹地である。他の遺構とは重複していない。規模は、長さ4.5m以上、幅約10m前後、深さ1.33mで、方向はおよそN-48°-W前後である。最深部は中央より西側にあり、底面で鉄分集積層がみられる。内部には6層が厚く堆積して細分が可能であるが、下部ではSX06独自の堆積層がある。堆積層は絶じて、西側が粘性が強く、東側は砂質である。明確な砂層の形成は希薄のようである。西壁寄りで縄文土器が少量、炭化物の集中個所が1ヶ所ある。東側では遺物は出土していない。第14図6はSX06内6f層出土の深鉢口縁部破片である。初期の段階では流路であったものが、やがて湿地帯に変化したものと予想している。時期は底部で遺物は出土

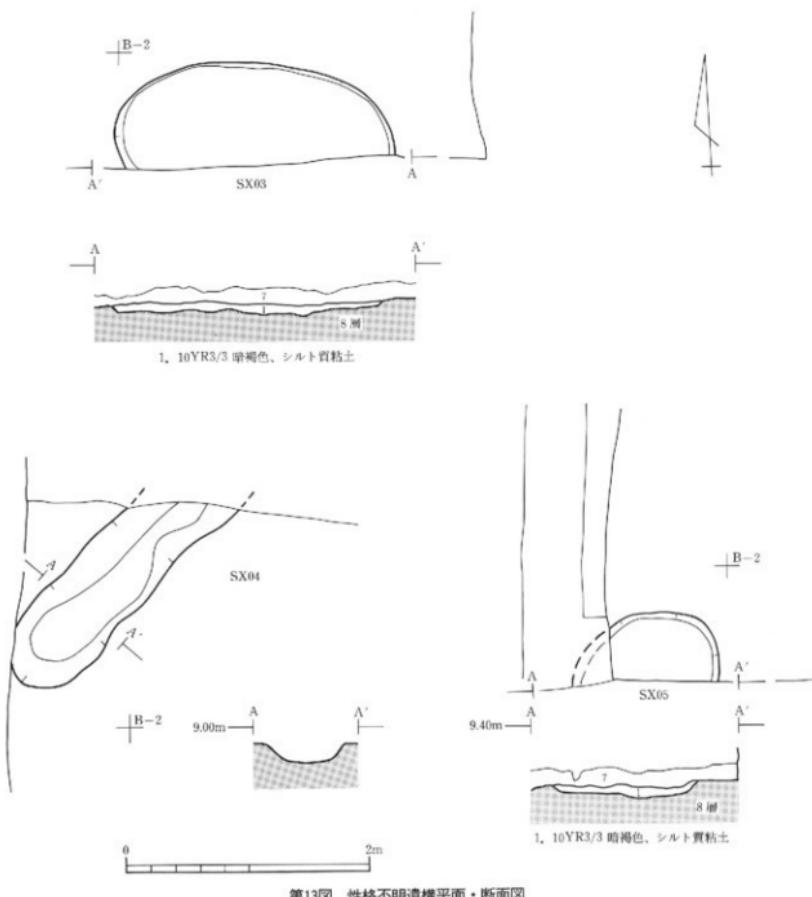


SX06 注記表

層名	特徴	参考	層名	特徴	参考
①	10YR 3/4 暗褐色シルト質粘土	北、砂を含む	④	10YR 2/4 暗褐色粘土	同
②	10YR 3/4 暗褐色粘土	北	⑤	10YR 3/4 にふい黄褐色粘土	同、炭化物
③	10YR 3/4 暗褐色粘土質シルト	南・北、砂を含む			

第12図 8層上面遺構図

II 王ノ塙遺跡（第3次調査）



第13図 性格不明遺構平面・断面図

していないが、他の遺構と同じ縄文時代後期頃のものであろう。

SX07（第12回）

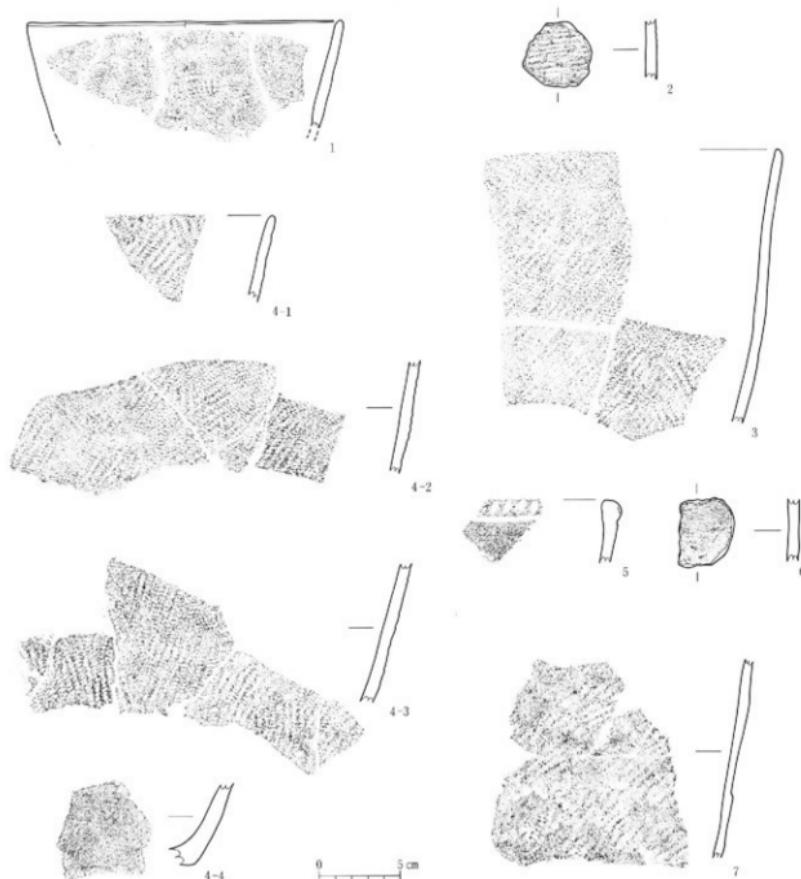
調査区西部 A-2 区に位置し、調査区西壁断面で確認した遺構である。規模は明確でないが、西壁面では上幅 53cm、深さ 28cm である。ピットあるいは土坑の可能性がある。出土遺物には縄文土器があり、SX03・05 などと接合する深鉢（第14図 4）がある。他に図示できたのは、第14図 7 の深鉢体部片がある。時期は、縄文時代後期中葉であろう。

（6）基本層出土遺物

ここでは遺構以外の基本層出土遺物について、層位別に述べる。

<2層>（第11図 4）

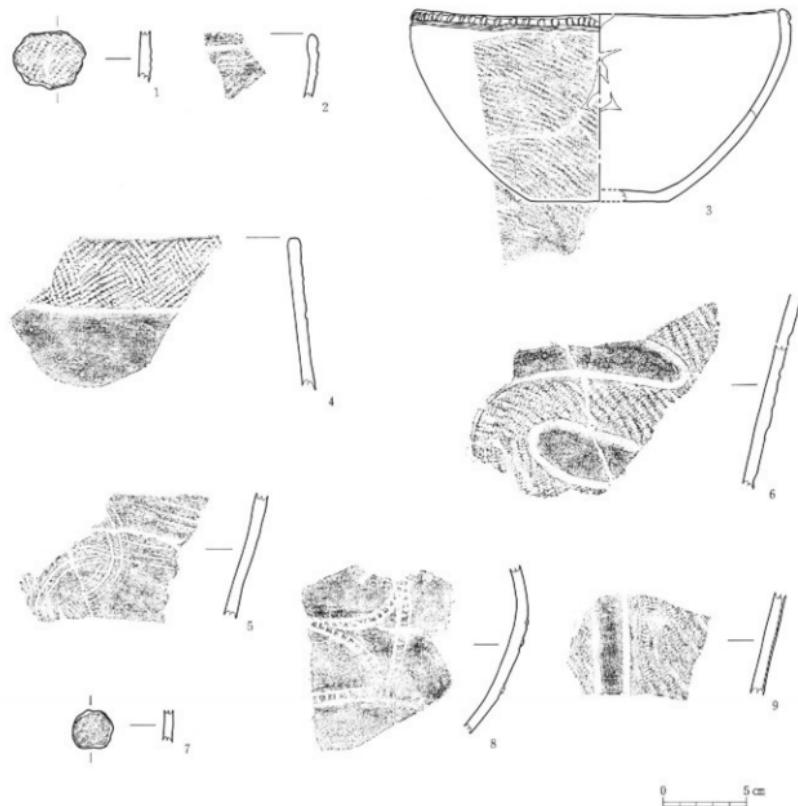
2 層では陶磁器・鉄片が出土している。陶器には、志野皿？、瀬戸・美濃灰釉端反皿（大窯期）、小野相馬窯の可



番号	発掘番号	地 区・遺 墓	性 性	種 類・器 形	特 徴	写 真	
1	90・92	SX03	埋 1 層	陶質土器	直縁 小形。LR 織文か。A-2区7号と漆合。口幅19.2cm、腹高6.6cm	18-4	
2	94	SX04	埋 1 層	土製品 円板状土製品	土器心用。無柄織文か、底さ14.7g	17-16	
3	66-93-100	B-1区	SX04	埋 1 層	陶質土器	RL 織文（0段多段）、東方向構造。SX07やB-1区（2層）と複合	18-9
4	92-94-100		SX03-05-07	埋 土	陶質土器	A 1区（64）・A 2区（96）とも複合、うちに第14区3号と同一個体上場	18-8
5	95	SX06	（復）	陶質土器	直縁 口縁割削面、沈縁、茎文織	18-7	
6	99	SX06 内	6号	土製品 円板状土製品	未完成？、無文每軸6mm、重さ12.5g	17-17	
7	100	SX07	埋 1 層	陶質土器	直縁 LR 織文か、漆面剥がれている	18-3	

第14図 織文時代出土遺物(1)

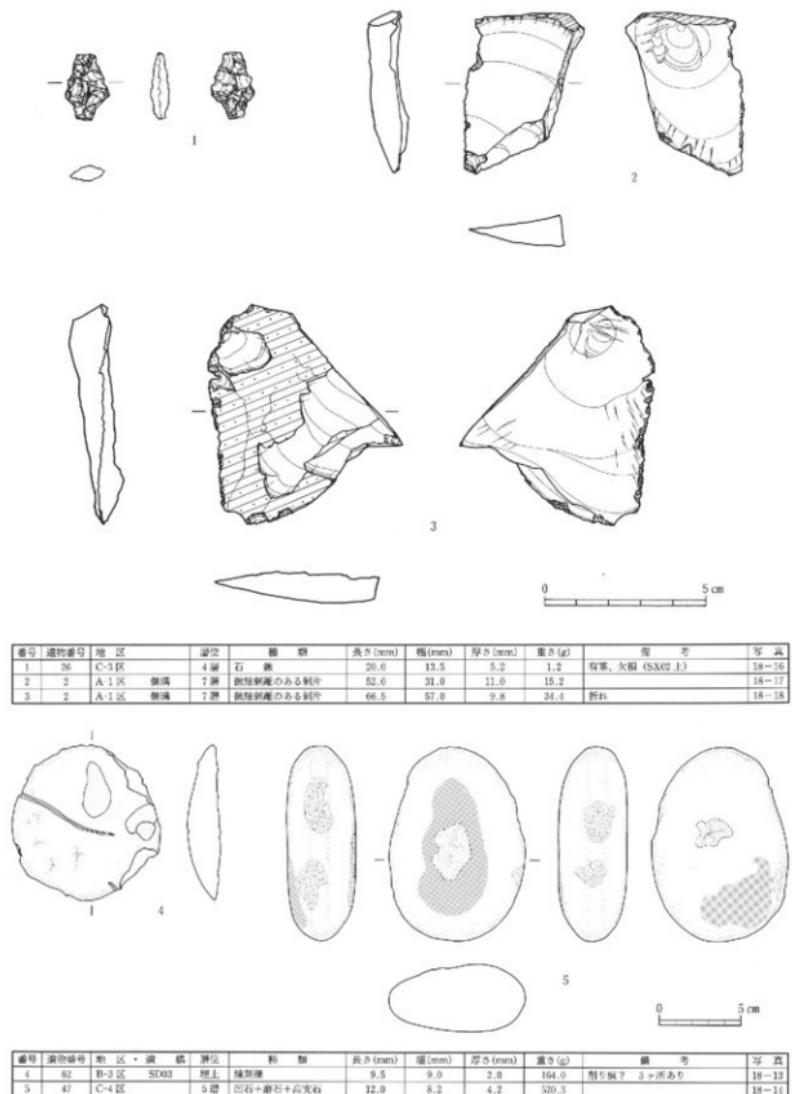
能性のある碗、产地不明の鉢（無軸？）などがある。磁器では、肥前の染付皿・中国青磁端反皿などが出土している。これらの陶磁器は、中世～近世の時期のものであるが、小片のため図示できない（写真17）。図示できたものは、第11図4の瓦質土器で小型鉢と考えられる。他に、少量の土師器、須恵器片がある。鉄製品は、鉄鋤？と角柱



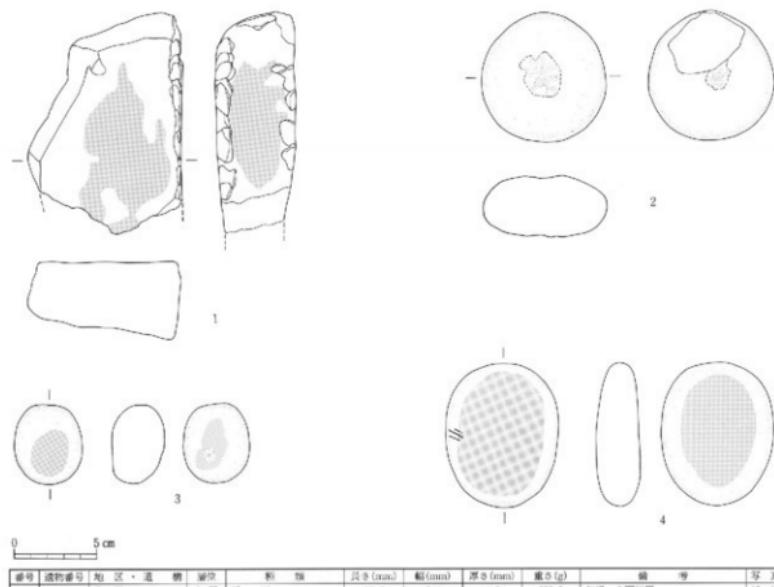
番号	遺物番号	地 区・遺 物	層位	形 索・器 形	特 徴	写 真
1	90	A 2 区	7層	土製品	円板状土製品	土部板用、重さ9.8g LR縄文
2	75	B-1 区	7層	圓文土器	深鉢	平行波継、單面縄文か
3	75	B-1 区	7層	圓文土器	浅鉢	口縁部に刻文帶、LR. 縄文(4段多条)、口径22.6cm、深さ11.8cm
4	66	B-1 区	7層	圓文土器	壺	RL. 縄文(油滴施文帶)、肩方向刻文
5	78	B-2 区	7層	圓文土器	深鉢	柳条狀文
6	78	B-2 区	7層	圓文土器	深鉢	入底文? LR. 光澤施文(4段多条)
7	80	B-2 区	7下層	土製品	円板状土製品	土部板用、小型、重さ4.3g 单面
8	82	B-2 区	8上層	圓文土器	深鉢	刻文帶、地文なし
9	98	B-3 区	8上層	圓文土器	深鉢	底下する刻文帶、LR. 縄文(4段多条)

第15図 縄文時代出土遺物(2)

状のもの（釘？）の2点がある。また、2層か3層か帰属が不明確の鉄製品（刀物類？）が1点ある。



第16図 縄文時代出土遺物(3)



第17図 繩文時代出土遺物(4)

<3層>

3層では、土師器片が少數出土したに過ぎない。

<4層> (第12図5~7)

4層では、土師器・須恵器・赤焼土器・石器が出土している。小片ばかりであるが、上下の層に比べ、遺物の量が多い。図示できたものは、第11図5の須恵器壺、同図6の須恵器長頸瓶(内面に茶色漆付着)、同図7の赤焼土器高台壺がある。前述の長頸瓶は、漆容器だった可能性がある。この他、有茎の石鐵が1点出土している(第12図1)。これらの遺物は、いずれもSX02上で出土したものである。

<5層> (第11図8~11)

5層では、土師器・須恵器・埴輪・石器が出土している。第11図8は埴輪片で、タテハケ調整が観察される。層の帰属が不明確だが、5層と思われる。同図9は須恵器壺、10は土師器壺でいずれも底部回転糸切りである。また、同図11はミニチュアの鉢(手づくね)であるが、5層か6a層か帰属が明確でない。

<6層> (第14図6・第17図1)

6層は7層に細分されるが、遺物が出土したのは6a層・6f層に限られる。6a層では微細刻離のある剝片1点、敲石1点、磁石1点、6f層では土製品1点が出土した。他に遺物は出土していない。第14図6は繩文土器の無文部を転用した円板状土製品であり、その未成品と考えられる(SX06内)。第17図1は板状の石を利用した砥石である。2面を使用している。

<7層>（第15図1～7）、（第16図2・3）

7層は明瞭な縄文時代後期の遺物包含層である。本層では縄文土器のほか、土製品2点、凹石1点、磨石2点、礫石1点、凹石+磨石+礫石1点、フレーク2点が出土している。これらは、いずれも調査区西端（SX06西側）より出土したものである。第15図1・7は円板状土製品である。同図2の深鉢は、不明瞭な平行沈線文がみられ、下半には縄文が施されている。3は、口縁部に刻目帯をもつ浅鉢である。4は、口縁部が内傾する壺と考えられる。地文は方向を変えて、羽状風の効果を持たせている。5は櫛齒状文の深鉢で、平行と弧状の組み合わせで文様を描いている。6は、入組文をもつ深鉢上器と考えられる。図示しなかったものは、地文のみの破片が多い。

<8層>（第15図8・9）

8層上面で、縄文土器が2点出土している。層中からは、遺物が出土していない。第15図8は壺の破片とみられ、体部には直線と曲線を組み合わせた刻目文様が巡ぐるようである。地文は見られない。同図9は、地文に垂下する無文帯がみられるものである。時期的に少し古いものかもしれない。

6 まとめ

- 3層上面（西部では4層上面）で検出したSD01・SD02・SX01は、内部に黒褐色土が堆積している点で共通し、SD01とSD02では少ないながら中世の遺物が出土している。したがって、これらの遺構は中世の時期と考えられる。最も新しいSD01に関しては、瓦質土器が出土していることから戦国期以降と予想される。
- 5層上面のSX02、6a層上面の小溝状遺構群は、畑の耕作と関連する遺構の可能性がある。SX02については平安時代で、灰白色火山灰降下以前の時期に比定できる。小溝状遺構とこれと関連するとみられるSD03については、出土遺物から古墳時代から平安時代の間の時期になるが、特定できない。
- 7層は、明確な縄文時代後期の遺物包含層であることが判明した。8層上面検出のSX03～07も包含層と同じ時期の遺構と考えられる。遺物の詳細な時期は7層の出土土器から考えると、入組文・刻目文様・異方向縄文・0段多条縄文等の特徴から後期中葉とみなすことができよう。近接する遺跡で後期中葉に属する遺跡には太白区伊古田遺跡があるが、文様に大きな特徴の差があつて本遺跡より古い（渡部紀：1995）。7層出土土器と類似した内容をもつ例として、気仙沼市田柄貝塚第III群土器（手塚他：1986年）が指摘できよう。また、後出の瘤の付く土器はみられないことから、單一時期とみられる。前述の田柄貝塚第三群土器は、宝ヶ峯式（伊東：1957）に属し、関東地方の加曾利B II式によそ併行すると考えられている。従って、7層出土土器や8層上面検出の遺構の時期も、同時期と考えてよいであろう。

引用・参考文献

- 伊東信雄：「古代史－縄文式文化の変遷」『宮城県史』1 宮城県史刊会 1957年
 手塚 均他：『山柄貝塚I 遺構・土器』宮城県教育委員会（宮文報第111集） 1986年
 渡部 紀他：『伊古田遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書III－』 仙台市教育委員会 1995年



写真1 SD01 全景（3層・4層上面）



写真2 SX01 全景

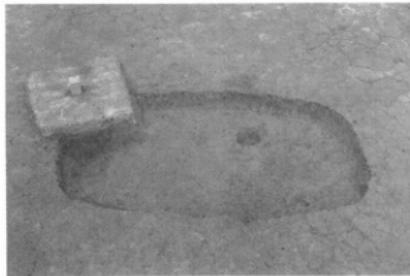


写真3 SK01 全景



写真4 SD02 全景

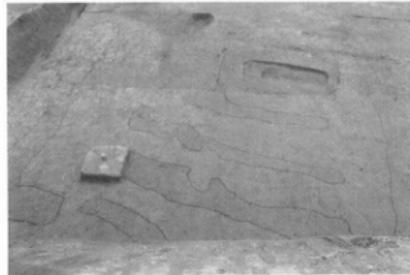


写真5 SX02 碓詰状況（南部）

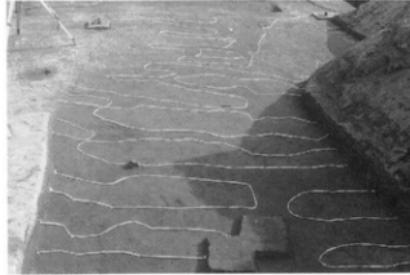


写真6 SX02 碓詰状況（北部）



写真7 SX02 全景



写真8 6a層上面の調査



写真9 SD03 全景



写真10 小溝状遺構（A群）



写真11 小溝状遺構（A～E群）



写真12 小溝状遺構（F群）



写真13 SX03～05 碑誌状況（8層上面）



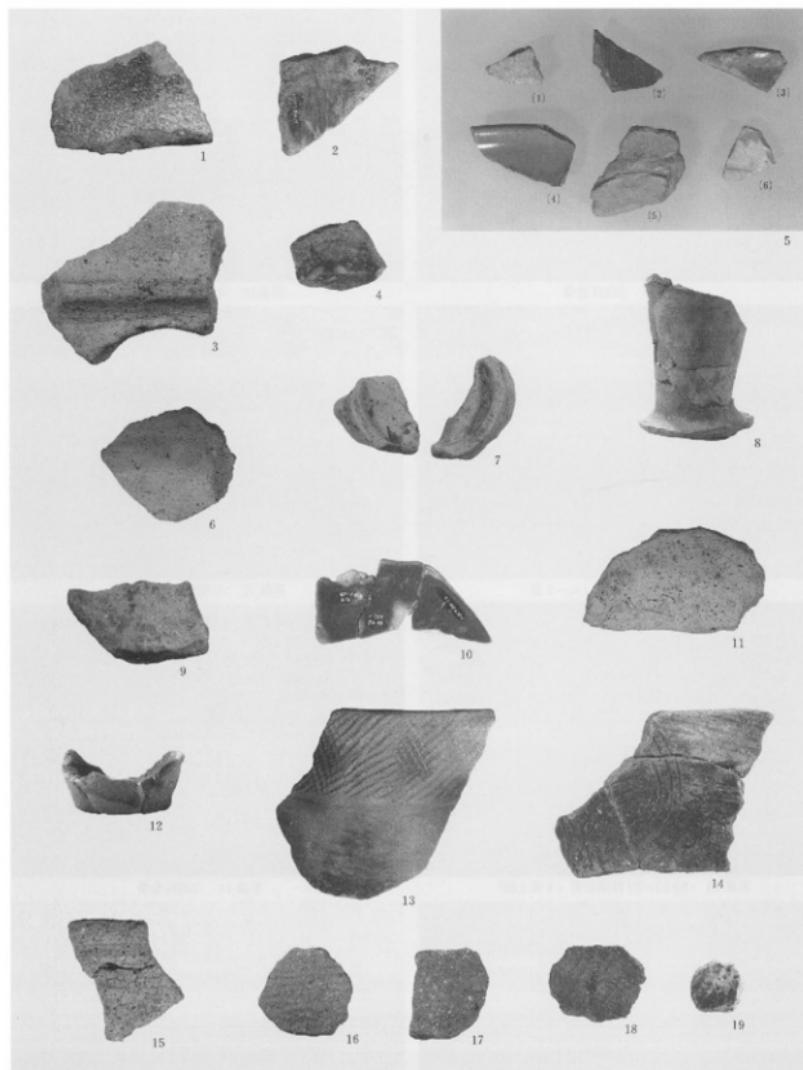
写真14 SX06 全景



写真15 深掘区南壁基本層とSX06



写真16 遺物包含（7層）・SX07 断面



出 土 地 点	遗 物 编 号	出 土 地 点	层 位	性 质	形 状	特 征	时 代
3-(1)	4	北庄	2号	陶器	器?	素面	新石器
5-(2)	6	北庄	2号	陶器	器?	不 明	新石器, 或1-2层?
5-(3)	5	北庄	2号	陶器	圆 反 弯	瓶口, 瓶身	新石器, 大罐?
5-(4)	6	北庄	2号	陶器	器?	中 圆	素面, 壁厚?
5-(5)	6	北庄	2号	陶器	器?	小 窄 相 等?	白色/白色带青色
5-(6)	5	北庄	2号	陶器	器?	肥 前	夹砂?

写真17 出土遺物 (1)

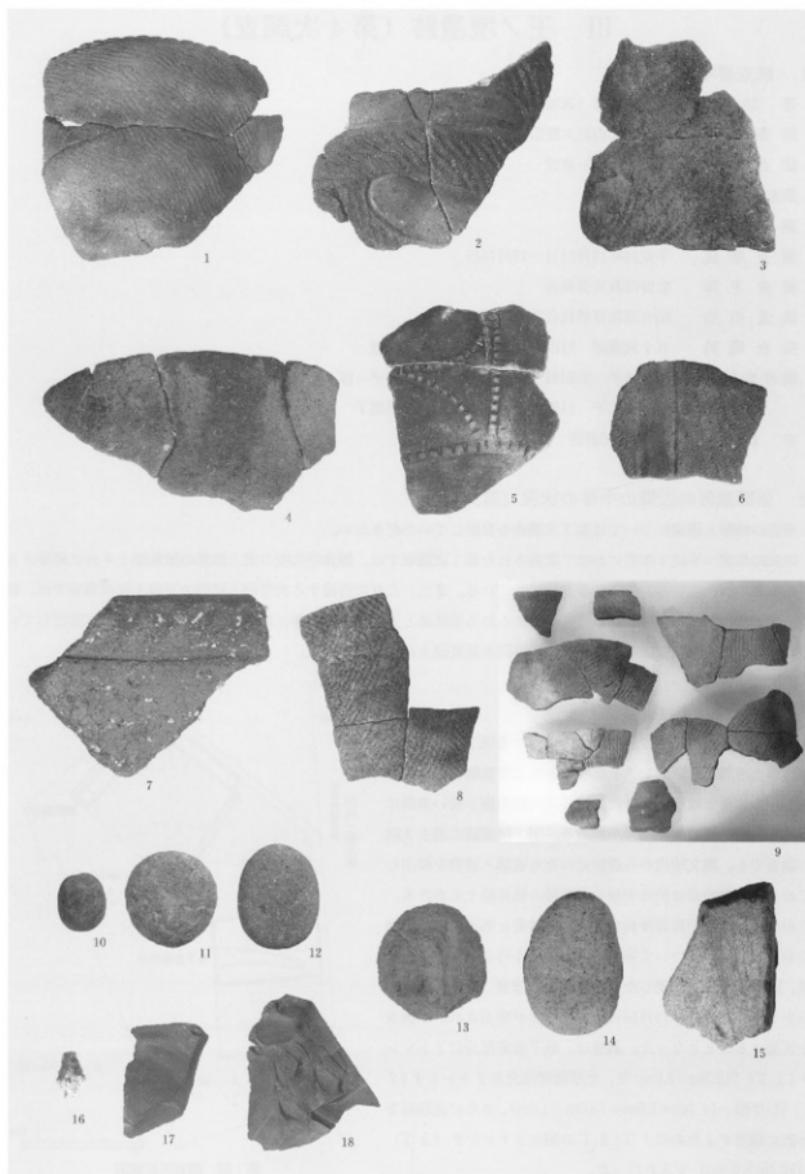


写真18 出土遺物（2）

III 王ノ壇遺跡（第4次調査）

I 調査要項

遺跡名	王ノ壇遺跡（宮城県遺跡番号 01428）
調査地点	仙台市太白区大野田字北星敷17-1, 18-1
調査原因	配送センター建設
調査対象面積	747m ²
調査面積	160m ²
調査期間	平成10年11月24日～12月16日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	五十嵐康洋 竹田幸司 篠原信彦 渡邊誠
調査参加者	阿部洋子 太田君子 小野辰夫 小林国子 佐々木志津子 苫井君子 鈴木みよ子 原田由美子 日野きみ子 本郷正 渡部麗子
申請者	(合)吉田酒店

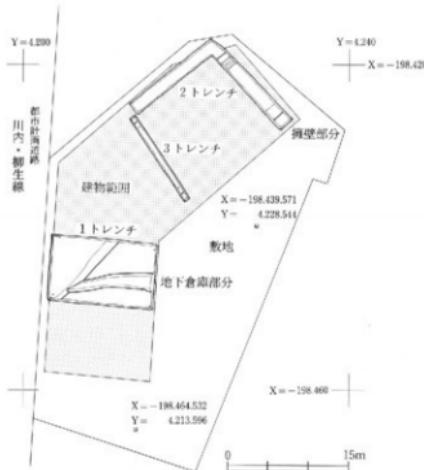
2 当調査区の近隣の中世の状況（第21図）

周辺の地形と環境については第3次調査を参照していただきたい。

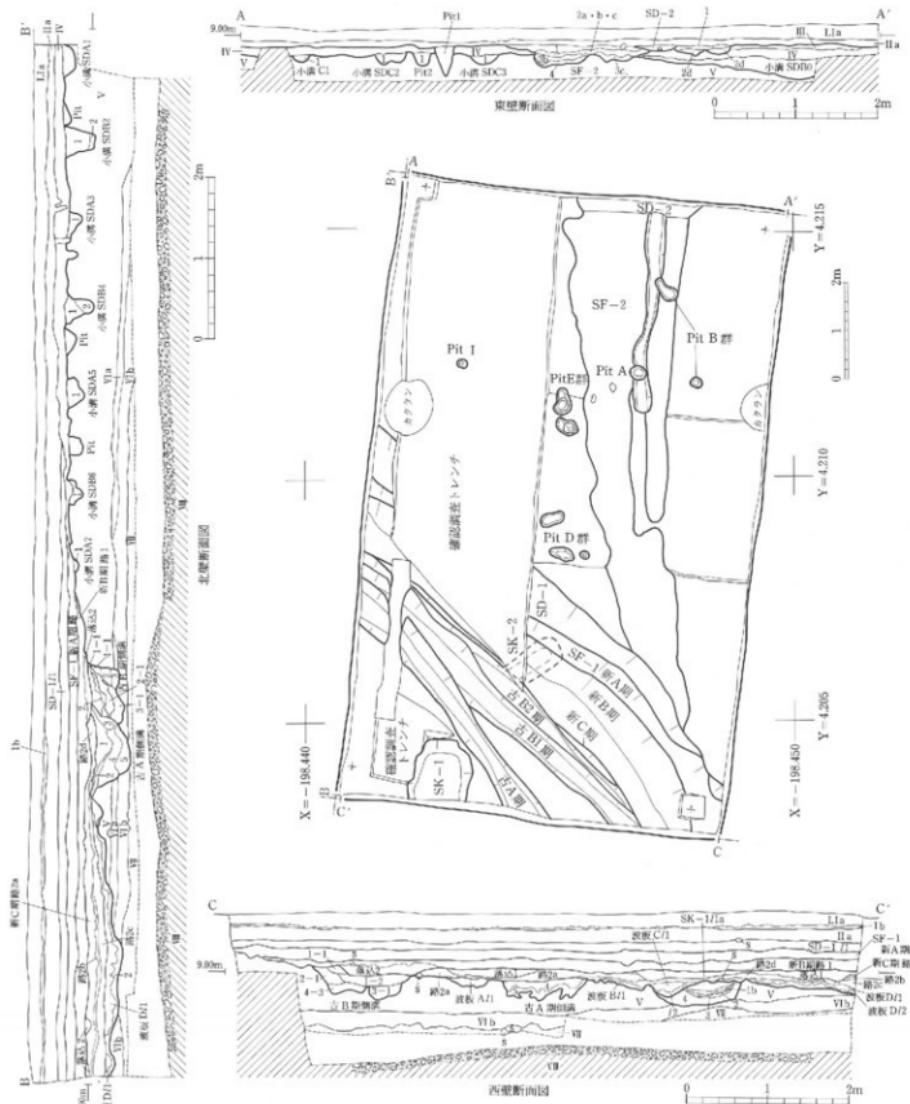
昭和63年度～平成3年度にかけて実施された第1次調査では、鎌倉時代頃の武士階級の屋敷跡とそれに隣接する宗教施設の跡、火葬墓、道路跡等を検出している。また、これに西接する大野田古墳群の平成9年度調査では、両側側溝と波板状凹凸をもつ幹線道路と考えられる道路跡と王ノ壇の屋敷跡に向かって延びる枝道を2本検出している。今回の第4次調査区は、この幹線道路跡の延長線上に位置している。

3 調査の方法（第1図）

平成10年7月1日付で、上記地内における地下1階地上2階建事務所酒類配送センター建設にともなう協議書が提出された。この場所は、都市計画道路「川内柳生線」沿い東側に位置し、王ノ壇遺跡の範囲内である。王ノ壇遺跡の過去3回の調査でも、縄文時代から近世にいたる遺構・遺物を検出しておらず、建設地点は特に中世の道路跡の延長線上にある。このため、仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、建物の地下倉庫部分について事前に確認調査を行なった。その結果、道路跡などを確認したので、再度申請者と協議した。それをうけ、平成10年10月16日付で発掘届が提出され、本調査を実施することとなった。調査は、地下倉庫部分に1トレンチ(1 T)(12.7m×8.0m)を、北部擁壁部分に2トレンチ(2 T)(L字形…14.0m×2.0m+12.6m×1.6m)、さらに道路跡を詳細に調査するために1 T・2 Tの間に3トレンチ(3 T)(12.2m×0.8m)を入れ行った。



第1図 調査区配置図



第2図 1T III層上面遺構配置図及び断面図

III 工ノ跡遺跡（第4次調査）

表1
1トレンチ 北・西・東壁 土層記述

地層	層位	土色	土性	箇	
				層	名
基	I a	SY4/2	灰褐色	粘土	成代の水田作土
	I b	SY4/2	灰褐色	粘土	成代の水田作土土厚 熟化度の差異
本	II b	SY5/1	灰色	シルト質粘土	熟化度の差異、マンガン粒、約1~2mmの小礫を含む 表面に酸化鉄の集塊 旧耕作土
	III	2.5Y5/2	湖青色	シルト質粘土	酸化鉄の斑文、マンガーラ化、約1~2mmの小礫を含む 表面に熟化度の差異 旧耕作土
	IV	10YR5/1	灰黄色	シルト質粘土	酸化鉄の斑文あり 11~12cm 厚さ 2.7SF-1-2 深掘跡などの堆出面
	V	10YR5/3	無色	シルト質粘土	酸化鉄の斑文あり 11~12cm 厚さ 2.7SF-1-2 深掘跡などの堆出面
	VI	10YR5/4	にほく黄灰色	粘土質シルト	マンガーラ化多く、下部は黄色地帯から2.5Y5/4にほく黃色になる 小量酸化鉄などの塊出現
	VII	10YR5/4	褐色	粘土質シルト	1~2木脚の根(或葉)の長さ約2倍に分かれ、VIIb層がやや色が暗い
	VIII	10YR5/4	褐色	砂	部分的に自然堆積あり 5Y5/1 黄色地帯となる
	SD-1	1	2.5Y5/2	湖青色	シルト質粘土
SD-2	2	2.5Y5/2	湖青色	粘土質シルト	II層を介して、約1~2mmの小礫を含む 表面段階の耕作に従わる上

SF-1 土層記述

時期	地塊	層位	土色	土性	箇	
新A期	路	2.5Y4/2	湖青色	シルト	にほく湖青色(新C期後2層と同じ) V層、約1~2mmの小礫を粒状に含む しまりあり 人為理構(地盤取扱)	
新B期	路	1	10YR4/2	灰褐色	砂質シルト	V層、にほく湖青色(新C期後2層と同じ) ブロック状に含む しまりあり 人為理構(地盤取扱)
新C期	東西W1	1	10YR5/2	灰褐色	砂土質シルト	にほく湖青色(新C期後2層と同じ) 1層純化あり しまりあり 人為理構(路筋の鋪修)
東	2	2.5Y4/2	湖青色	シルト	IV層+ゴマク+括2aの地を含む 路筋上あるいは耕作に留め土上	
路	3a	2.5Y5/2	にほく湖青色	砂	貴化地帯土質で、中央部の堅硬な2層を除いて軟弱な2層を含む しまりあり 路筋に酸化鉄の集塊 人為堆積(路筋部分)	
路	3b	10YR4/2	灰褐色	シルト質粘土	しまりあり 人為理構(路筋敷設?)	
路	3c	2.5Y5/2	湖青色	砂	酸化鉄地帯との境界附近で、強烈な風化により土壌化している 人為堆積(路筋含積)	
路	3d	2.5Y5/1	湖青色	砂	貴化地帯との境界附近の薄層で、強烈な風化により土壌化している 人為堆積(路筋含積)	
新D期	1	2.5Y5/2	にほく湖青色	砂	貴化地帯を除く、V層と並んで最も表面に酸化鉄・マンガーラ化傾向あり しまりめてあり 路筋は極めて硬い	
新D期	C	1	2.5Y5/2	湖青色	砂	貴化地帯を除く、V層と並んで最も表面に酸化鉄・マンガーラ化傾向あり しまりめてあり 路筋は極めて硬い
新D期	D	1	2.5Y5/2	湖青色	砂	貴化地帯を除く、V層と並んで最も表面に酸化鉄・マンガーラ化の集塊あり しまりあり 路筋は極めて硬い
3	10YR4/2	灰褐色	砂質シルト	IV層を介して、V層と並んで最も表面に酸化鉄・マンガーラ化傾向あり しまりめて硬い		
内A期	側溝	1	10YR5/2	灰褐色	砂	貴化地帯を除く、V層と並んで最も表面に酸化鉄・マンガーラ化の集塊あり しまりあり 路筋は極めて硬い
内A期	1	10YR4/1	湖青色	粘土	貴化地帯を除く、V層と並んで最も表面に酸化鉄・マンガーラ化の集塊あり しまりあり 路筋は極めて硬い	
内A期	2	2.5Y5/2	湖青色	粘土	貴化地帯を除く、V層と並んで最も表面に酸化鉄・マンガーラ化の集塊あり しまりあり 路筋は極めて硬い	
内A期	3	2.5Y5/2	湖青色	粘土	貴化地帯を除く、V層と並んで最も表面に酸化鉄・マンガーラ化の集塊あり しまりあり 路筋は極めて硬い	
内A期	4	2.5Y5/2	湖青色	シルト質粘土	貴化地帯を除く、V層と並んで最も表面に酸化鉄・マンガーラ化の集塊あり しまりあり 路筋は極めて硬い	
内A期	5	10YR4/1	湖青色	砂	IV層を介して、V層と並んで最も表面に酸化鉄・マンガーラ化の集塊あり しまりあり 路筋は極めて硬い	
古E期	波状A	1	2.5Y5/2	湖青色	砂質シルト	又見: 波状地帯、ヘアリーリー、にほく湖青色地帯を含む しまりめてあり 表面に酸化鉄・マンガーラ化の集塊あり
1周周	1	10YR4/2	湖青色	砂	にほく湖青色地帯を含む しまりあり 路筋あり	
1周周	2	10YR4/2	にほく湖青色	砂	にほく湖青色地帯を含む しまりあり 路筋あり	
2周周	1	10YR5/1	無色	シルト質粘土	IV層+ゴマク+V層に含む しまりあり 路筋あり	
3周周	1	2.5Y5/2	湖青色	砂	貴化地帯を含む しまりあり 路筋あり	
4周周	1	10YR4/1	湖青色	シルト質粘土	IV層+ゴマク+V層に含む しまりあり 路筋あり	
1周周	2	10YR4/2	湖青色	砂	貴化地帯を含む しまりあり 路筋あり	
1周周	3	10YR4/2	にほく湖青色	砂	IV層を介して、V層と並んで最も表面に酸化鉄・マンガーラ化の集塊あり しまりあり 路筋は極めて硬い	

4 基本層序（第2図）

I層は現代の耕作土、II層は旧耕作土、III層は道路跡等の遺構検出面、IV層は小溝状遺構群と一連のものとされる。V層は小溝状構造群等の遺構検出面、VI層は第1次調査の縄文後期中葉（宝ヶ峠期）の遺物包含層と対応する層、VII層は第1次調査の縄文時代の遺構検出面、VIII層は砂疊層である。II層より須恵器片（写真28-6・底部回転糸切りの壺他1点）、土師器片、埴輪片が、VI層より縄文土器（第18図-4）が出土している。

5 発見遺構と出土遺物（第2図）

主な検出遺構としては第1次調査及び大野田古墳群で検出した道路跡の延長部分（SF-1）とそれに取り付く枝道（SF-2）の他、溝跡2条（SD-1・2）、土坑2基（SK-1・2）、小溝状遺構群（SD-A・B・C群）、ピット等がある。この他古墳の周溝を確認しており、大野田古墳群の継ぎ番号で27号墳とした。

（1） III層上面検出遺構 近現代の盛土・耕作土（I～II層）を除去後検出

1 T

SD-1 溝跡（第3図）

調査区を南西から北東方向に延びる。SF-1新A期路面上で検出した。SF-2を切る。方向はN-53°Eで、SF-2を切る辺りで湾曲するように膨らむ。西側の立上がりが調査区外になるため全体の規模は分からないが深さ12cm~15cmを計る。底面はほぼ平坦で北に向かって傾斜している。断面形は皿形である。堆積土は、1層で自然堆積である。堆積土中に埴輪片・須恵器片（底部回転ヘラケズリ）・土師器片が出土している。

SD-2 溝跡（第3回）

東側で検出した溝跡で、長さ4.3m分を確認した。SF-2を切る。調査区を東から西へ延び調査区中央でとぎれる。方向はW-4°-Nである。上幅15cm~40cm・底面幅5cm~10cm・深さ5cm~15cmを計る。底面は凹凸がある。断面形は底面の丸いV字形である。堆積土は、基本層II層を主体にした單一層で底面に拳大の礫を含む。堆積状況からII層時耕作に伴うと考えられる。

SF-1 道路跡

第1次調査及び大野田古墳群で検出した道路跡と一連のものである。調査区を南西から

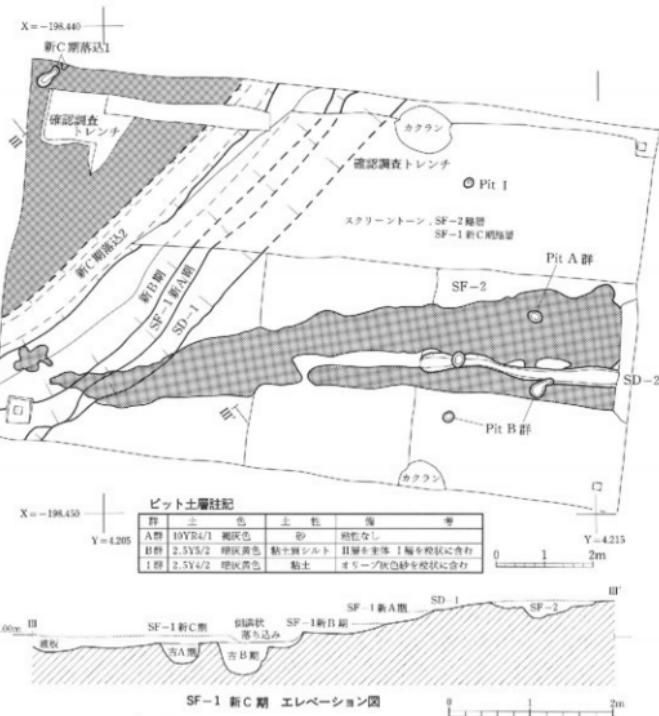
北東に延びる。SD-1の埋土に覆われて、SK-1・2・小溝状遺構群を切っている。大きく五時期の変遷がとらえられた。新しいほうから新A期・新B期・新C期・古A期・古B期とした。西側が調査区外になるため路面（註1）幅などが不明である。方向は古B4期がN-48°-Eで、古B3~1期がN-45°-Eで、それ以後はN-50°-Eである。ただし、SF-2との交点付近で新C~新A期段階は膨らむように湾曲し、古A期段階は内側に抉られるよう屈曲する。

（新A期段階）（第3回）

SD-1の下面で検出された。新B期の路面上に粘土質シルトを主体とした砂混じりの厚さ10cmの路層（盛土）を施している。路面は遺構検出面より15cm低く、標高約9.3mである。平坦であり、やや南から北への傾斜がある。路層より中世陶器（写真28-3）・青磁（写真28-1）・埴輪片・土師器片が出土している。

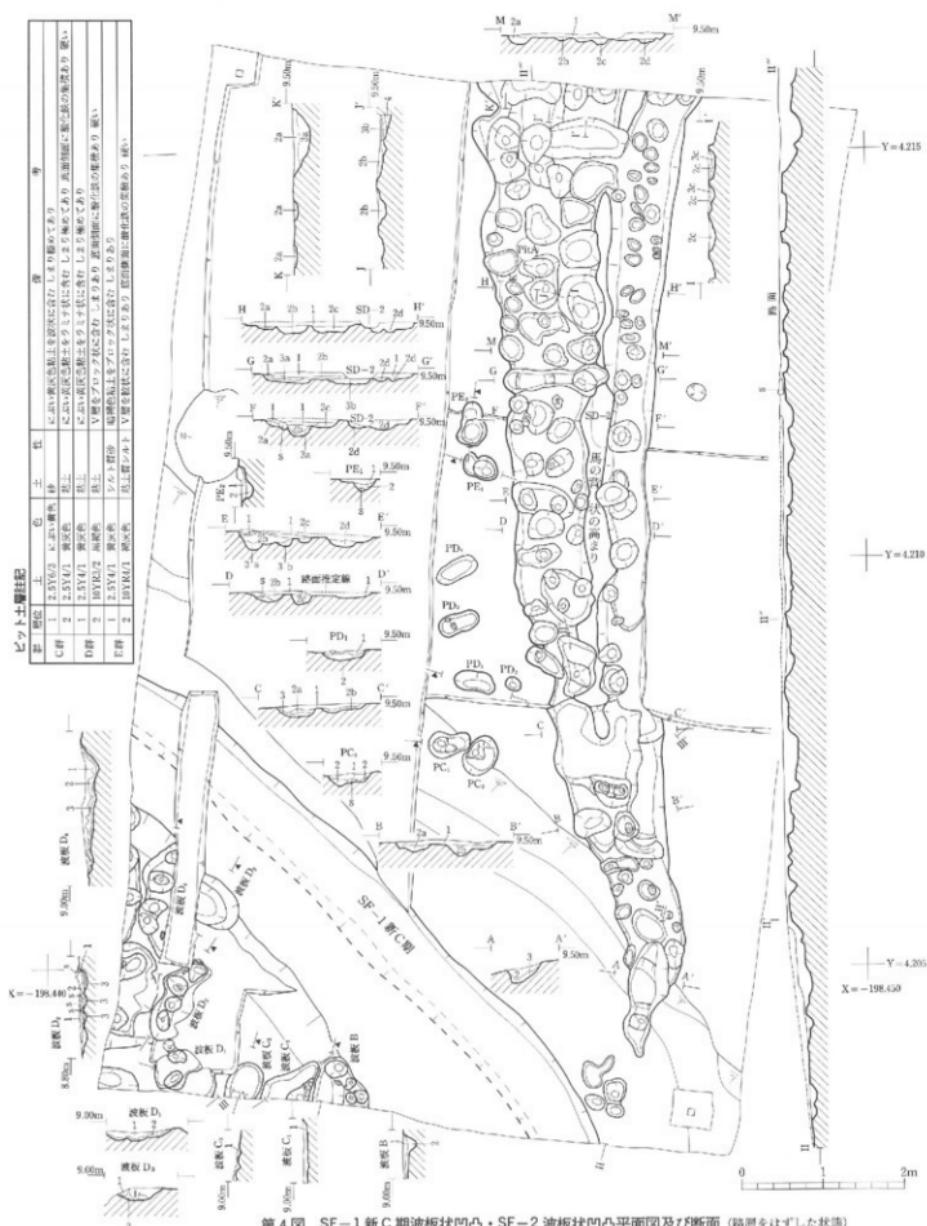
（新B期段階）（第3回）

新A期路層の下面で検出された。新C期の路面上に砂と基本層をブロック状にした厚さ10cmの路1層（盛土）を施してある。遺構検出面より30cm低く、標高約9.15mである。平坦であり、やや南から北への傾斜がある。路1層より土師器片が出土している。



第3図 SD-1・2・SF-1新A期～新C期平面図

図 王ノ瀬遺跡（第4次調査）



(新C期段階) (第3・4図)

新B期路1層の下面で検出された。基本層V層上面及び古A期側溝上面に凹凸(波板状凹凸B～D群)(註2)があり、凹部に砂混じりの粘土が貼ってありその上に砂が充填されている。さらにその上面に厚さ10～30cmに叩き締められた砂(路2層)が施してある。路2層の上面は遺構検出面より40cm低く、標高約9.05mである。東側に上幅70cm・下幅40cm・深さ13cmで逆台形を呈する側溝状の落ち込みを有する。堆積土は、ブロック状の崩落土あるいは埋め戻しの土(落込2)である。また、路面上に道路の補修の跡と思われる長梢円形のピット状の落ち込み(落込1)がある。波板状凹凸B～D群は平面形が70～200cm長梢円形で断面がU字形を呈し、底面に数個のピット状の落ち込みが並ぶ。底面及びピット状の落ち込み面は酸化鉄が集積し、硬く締まっている。石を横位に敷いているものもある。波板状凹凸埋土より埴輪片・土師器片が出土している。

SF-2道路跡(切り合い関係からSF-1古期よりも前に記述する) (第3・4図)

SF-1から東に伸びる砂敷の道路跡である。V層上面で検出され、SF-1古B2期側溝を切り、SF-1新B期の路1層に切られる。SF-1古B1期から新C期との関係は不明である。幅130cm～200cmの範囲に厚さ5～10cmの砂が非常に硬く締まった状態で堆積(1層)し、路面を形成している。路面は中央部がやや高く舗装状を呈する。その層を剥がすと中央よりやや南側が馬の背状の高まりとして残る。その馬の背の北側には波板状凹凸が、南側は工具痕とみられる小ピットが検出された。それぞれの凹部には砂を主体とする埋土が硬く締まった状態で充填されている。波板状凹凸の底面は酸化鉄の集積があり、硬く締まっている。一部拳大の石が横位で詰まっている。1層から土師器(第18図2)・埴輪片が出土している。道路の方向はW-E-Nである。

波板状凹凸は東側は進行方向に添ってピット列が3列(G～Kセクション)中央部は2列(D～Gセクション)並んでいる。西側(A～Cセクション)は小ピットや長梢円形ピットが不規則に並んでいる。

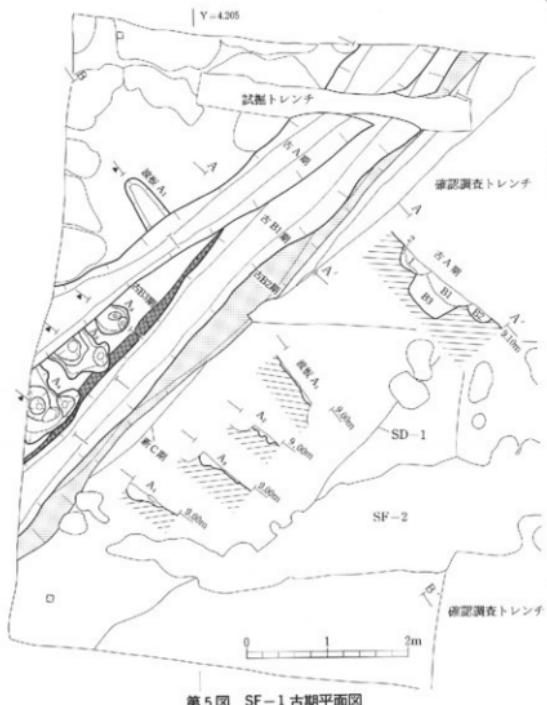
Pit A～E・I群(第3・4図)

C～E群はSF2に沿って並ぶ。形態・堆積土などSF2の路層下の波板状凹凸に類似する。ピットA・B・I群は基本層I・II層に伴うものである。ピットE群から土師器片・埴輪片が出土している。

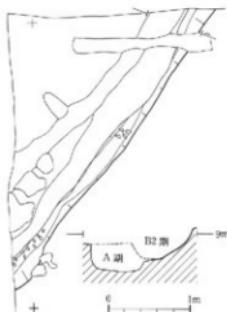
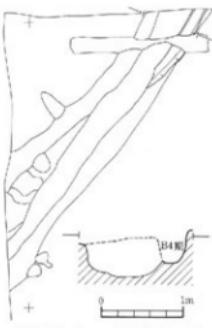
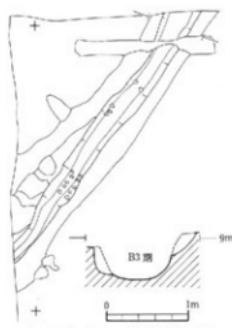
SF-2 土層記号

セクション	層位	上色	土性	下層
Aセク	1	2.5Y6/3 にぼい黄色	砂	高木隔V・VI層を粒状に含む マンガン粒・酸化鉄の粒を多量に含むし締めてあり 上面は硬い 酸化層
	2	2.5Y6/0 にぼい黄色	砂	しまりあり
	2.5Y3/1 (赤木隔IV層)	無色 砂土	ブロック状に盛じる マンガン粒・酸化鉄の粒を含む	
	2.5Y4/2 (赤木隔V層)	暗赤黄色 砂土		
B・Cセク	3	2.5Y4/3 にぼい黄色	砂上	V層を粒状に含む 断面に脚状の集積あり 1～3層 人為堆積
	2a	2.5Y5/2 にぼい黄色	シルト質砂	2.5Y3/3 黒褐色粘土(IV層)をうなぎ状に含む しまりあり
	2b	2.5Y5/3 黒褐色	砂	2.5Y3/3 暗褐色リーブ帶の粘土(IV層)をうなぎ状に含む しまりあり
	3	10YR2/2 灰黒褐色	砂上	2.5Y6/3 黑褐色(IV層)をうなぎ状に含む 断面は硬い
D・E F・Gセク	2a	2.5Y5/2 暗赤黄色	砂	マンガン粒を多く含む
	2b	2.5Y5/2 暗赤黄色	砂	にぼい黄色砂・IV層を粒状に含む にぼい黄色砂の回りに酸化鉄付着 しまり締めてあり
	2c	2.5Y5/2 暗赤黄色	砂	2.5Y6/0 にぼい黄色砂をリード入で含む
	2d	2.5Y5/1 黄褐色	砂	炭素濃度高い粘土の上に マンガン粒を含む
H・I J・Kセク	3a	10YR2/1 にぼい黄褐色	砂上	塊状化地盤をうなぎ状に含む EはH・I地盤
	3b	2.5Y4/2 暗赤黄色	砂土	にぼい黄色砂を粒状に含む 地質は固い
	2a	10YR4/3 にぼい黄褐色	砂質シルト	炭素濃度高い粘土の上 マンガン粒を多く含む しまりあり
	2b	2.5Y4/4 にぼい黄褐色	砂	にぼい黄色砂と粒状に含む しまりあり
	2c	2.5Y5/2 暗赤黄色	シルト質砂	にぼい黄色砂と粒状に含む しまりあり
	2d	2.5Y5/1 黄褐色	砂	供給物質の粘土の上 マンガン粒を含む
	3a	10YR2/3 暗褐色	砂土	暗赤褐色砂と粒状に含む しまりあり
	3b	2.5Y5/2 黄褐色	砂土	しまりあり 通路は固い
	3c	10YR4/1 暗褐色	シルト質砂	にぼい黄色砂・洋層と透灰に盛じる しまり締めてあり
	4	2.5Y4/1 黄褐色	砂土	V層を粒状に含む しまりあり

III 王ノ塙遺跡（第4次調査）



第6図 SF-1 古B1期平面図

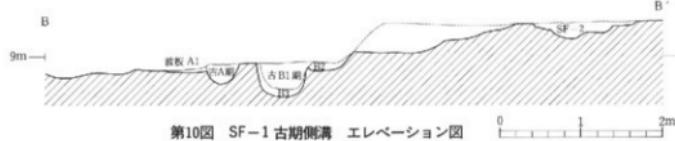


第7図 古B2期側溝平面図

SF-1 道路跡（古A期）(第5図)

新B期の下面・基本層V層上面で検出された。古B期側溝及び波板状凹凸A群を切る。この時期での路層は検出されず、側溝のみの検出である。側溝は上幅40~80cm・底面幅10~45cm・深さ15~40cmを計る。底面はほぼ平坦で北に向かって傾斜している。特に南端は検出面から10cmと浅くなっている。断面形は逆台形である。堆積土は、5層に分けられ下部は崩落土、中位は自然堆積、上

B⁺ 部は埋め戻しあるいは崩落土である。堆積土中から青磁（写真28-2）が出土している。



(古B期) (第6・7・8・9図)

新B期道路跡の下面・基本層V層上面で検出された。側溝の切り合いから4時期 (B1、B2、B3、B4) の変遷がとらえられた。路層は検出されなかつたが、波板状凹凸A群が検出されている。どの時期も北に向かって傾斜している。B1期側溝は、上幅40~90cm・底面幅20~50cm・深さ15~55cmを計る。底面は平坦である。断面形は偏平なU字形である。堆積土は、2層に分けられ下部は自然堆積、上部は人為堆積である。B2期側溝は、上幅推定40~60cm・底面幅15~35cm・深さ15~35cmを計る。底面には10~20cm間隔の工具痕が2列並んでいる。断面形は偏平なU字形である。堆積土は、1層で崩落土である。B3期側溝は、上幅推定50~70cm・底面幅20~50cm・深さ40~60cmを計る。断面形はU字形である。底面は、5~15cm間隔の工具痕が2列並んでいる。堆積土は、1層で埋め戻し土である。B4期側溝は、上幅推定30~40cm・底面幅15~20cm・深さ45~50cmを計る。底面はほぼ平坦である。断面形はU字形である。堆積土は、3層に分けられ下部は人為堆積で、中位は自然堆積、上部は崩落土である。堆積土中より埴輪片が出土している。

波板状凹凸A群 (第5図)

古A期側溝に切られた古B3期側溝を切る。古B1・2期側溝との切り合い関係は不明であるがB1期側溝が波板状凹凸Aを避けるように掘られており、B1期側溝より古いことが窺える。平面形が70~200cm長楕円形で断面が皿形を呈し、底面に数個のピット状の落ち込みが並ぶ。底面及びピット状の落ち込み面は硬く締まっている。堆積土は硬く締まった砂が波状に充填されている。堆積土より土師器片が出土している。

SK-1 土坑 (第11図)

調査区西端のSF-1新C期路層下面で検出した土坑である。長軸方向はE-10°-Nである。全体の規模西側が調査区外に伸びるため不明だが、長軸方向で5.5m以上、短軸方向で1.0m、深さ70cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は、大別4層細別7層に分けられる。下から4層は基本層ブロック及び砂・スサ入り粘土を含む埋め戻し土、3層は粘性の強い粘土、2層は炭化物の層、1層はブロック状に堆積した埋め戻しの土である。4層上面に20~30cmの石が並べてある。4層中から土師器片が1点、各層より炭化物に混じり魚類・鳥類などの動物の骨、イネ・コムギ等の植物の種子が炭化したもののが出土している。性格はゴミ穴・野外炉・祭祀施設等考えられるが不明である。

SK-2 土坑 (第12図)

SF-1古B4期側溝に切られるため全体の規模は不明だ

部位	土	色	土 性	備 考
1a	16YR3/2	暗褐色	砂土	約1~2mmの砂・V型のブロック・炭化物を多量に含む
1b	2.5Y2/1	暗褐色	粘土	粒状構造のあり
2	2.5Y2/1	灰色	粘土	炭化物
3	2.5Y3/1	暗褐色	シート状粘土	炭化物(2.5Y2/1)3層を隔てて合む
4a	10YR2/2	暗褐色	粘土	約1~2mmの砂・炭化物を含む
4b	10YR2/2	暗褐色	シート状粘土	粒状構造のあり
5	10YR4/2	暗褐色	シート状粘土	炭化物
6	10YR4/2	暗褐色	シート状粘土	砂質砂・V型を形成する合む 入口部(1m以下)

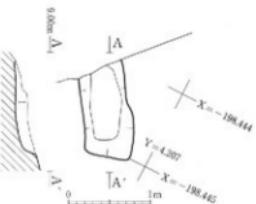
が、長軸方向で5.5m以上、短軸

方向で1.0m、深さ70cmを計る。長軸方向はE-10°-Nである。断面形は逆台形で、堆積土は1層で基本層ブロック及び砂のブロックを含む人為堆積である。出土遺物はない。性格は不明である。

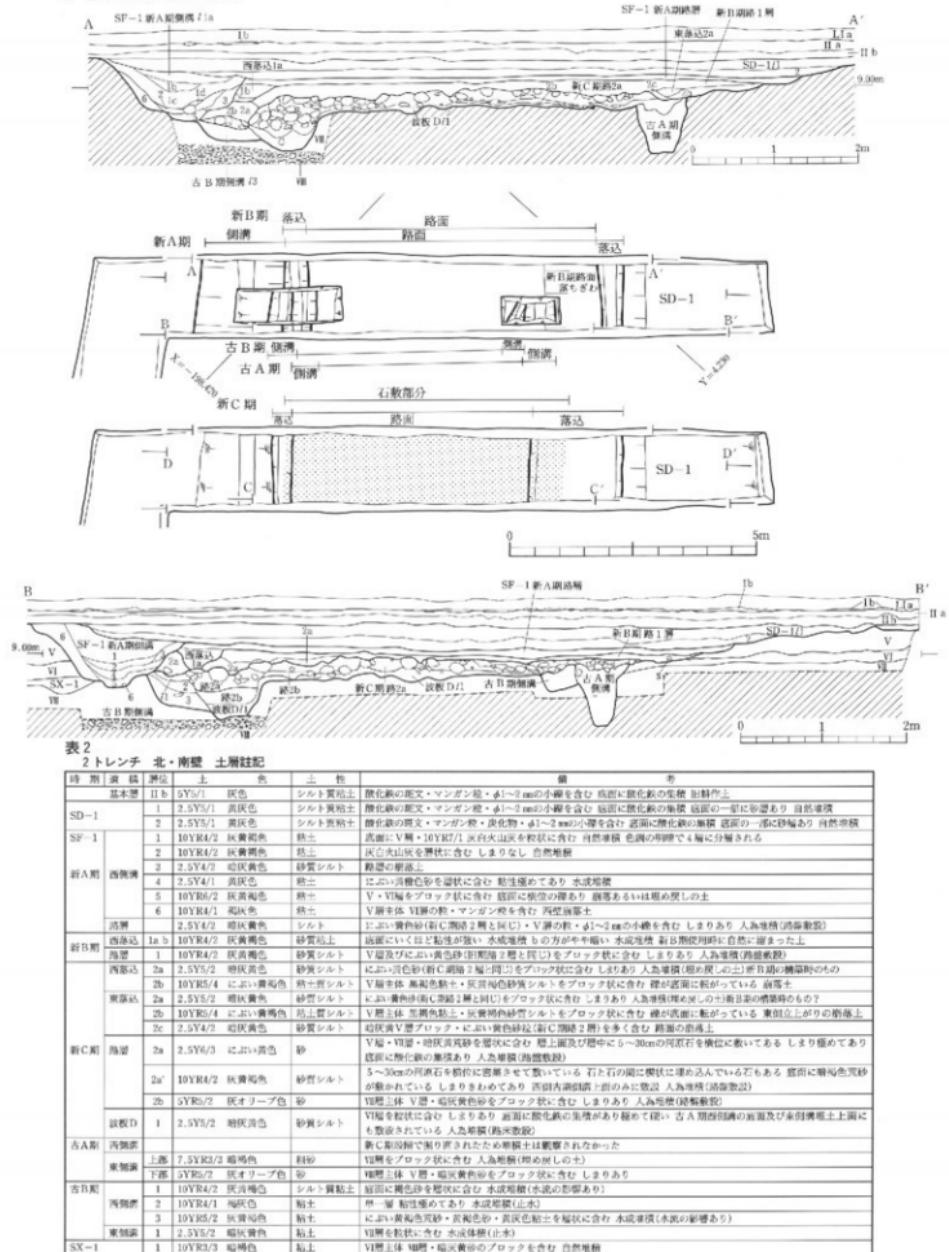
SK-1・2とも時期は限定できず古墳時代以降中世以前の時間幅としかとらえられない。

部位	土	色	土 性	備 考
1	16YR4/2	灰褐色	砂土	しまりあり
2.5Y3/3	黄褐色	粘土	基本層V型をブロック状に含む	
2.5Y4/1	灰褐色	粘土	(一部既次に堆積)	

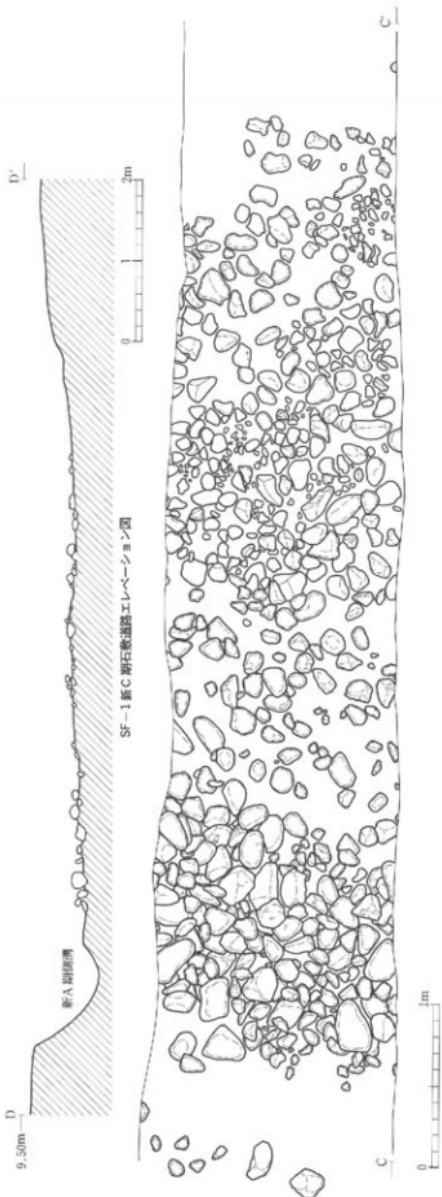
第12図 SK-2 平面・断面図



三 王ノ壇遺跡（第4次調査）



第13図 2TSF-1平面図・断面図



2 T・3 T

SD-1溝跡（第13図）

2 Tでは上幅12m・底面幅8.7m・深さ25~30cmを計る。底面標高は約9.1mである。3 Tでは上幅11m・底面幅9.8m・深さ13~20cmを計る。方向は1 Tから2 TまでN-54°-Eである。堆積土は、3 Tで1層2 Tで2層に分けられ自然堆積である。2 Tで分層によって立上がりが階段上になる。堆積土中より中世陶器（第18図1）、須恵器（写真28-4）・埴輪片・土師器片が出土している。

SF-1道路跡

道路の方向はどの時期も1 T北側の延長でおよそN-50°-Eであるが、古A期段階は3 Tで幅を狭める。

(新A期)（第13図）

路面幅は2 Tで7m、3 Tで7.2mを計る。路面は遺構検出面より30~35cm低く標高約9.1mで、厚さ10cmの路層である。西側で側溝を検出した。2 Tで上幅180cm・下幅30cm・深さ70cm、3 Tで上幅100cmを計る。底面はほぼ平坦である。断面形はU字形である。堆積土は、3 Tで3層、2 Tで6層に分けられ、下部は石混じりの自然堆積、中位の東側は路面の崩落土、上位は自然堆積である。路層・側溝埋土より埴輪片・土師器片・須恵器片が出土している。

(新B期)（第13図）

路面幅は2 Tで5.9m、3 Tで6.5mを計る。路面は遺構検出面より30~40cm低く、標高約9.0mで、厚さ10cmの路層である。2 Tでは路面の両側に側溝状の落ち込みを検出した。西側で上幅60cm・下幅30cm・深さ10cm、東側は上幅40cm・下幅30cm・深さ10cmを計る。底面はほぼ平坦である。断面形は皿形である。堆積土は、両側とも単層でブロック状の崩落土あるいは埋め戻しの土である。路1層より埴輪片が出土している。

(新C期)（第13・14図）

III 王ノ堀遺跡（第4次調査）

石敷の道路跡である。5~30cmの丸みのある偏平な石が横位に敷かれ、石と石の間に砂（路2層）が堅く詰められている。特に、古A期西側溝の部分は石が厚く密に施してあり、楔状に埋め込んでいる石もある。路2層の下面から1T同様波板状凹凸が確認された。路面幅は2Tで4.8m、3Tで4.2mを計る。遺構検出面より50cm低く、標高約8.9mである。また、路面中央部が高く蒲鉾状を呈し、両側に側溝状の落ち込みを有する。西側の落ち込みは上幅40cm・下幅30cm・深さ13cmで逆台形を呈する。東側は上幅70~200cm・下幅40~160cm・深さ13cmで逆台形を呈する。堆積土は、下部がブロック状の崩落土あるいは埋め戻しの土、上部が水成堆積である。路層・側溝埋土より埴輪片の出土の他、敷石のなかに砾石器（図18-5・6・7）等の縄文時代の遺物や板状に加工された安山岩質の石材（写真28-11）が含まれている（註4）。

（古A期）（第13図）

東側溝は上幅65cm・底面幅15cm・深さ60cmを計る。断面形は壁が急角度で立ち上がる逆台形である。堆積土は、3Tが3層、2Tが1層で、下部は自然堆積で上部は人為堆積である。西側溝は上幅40cm・底面幅35cm・深さ45cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は、2Tで2層に分けられ下部は新C期の波板状凹凸の2層で上部は砂で人為堆積である。3Tでは、1層で自然堆積である。側溝間は3.8mで、心心間は4.5mである。出土遺物はない。

（古B期）（第13図）

東側溝は上幅50cm・底面幅40cm・深さ25cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は、3Tで3層、2Tで1層で、自然堆積である。西側溝は上幅推定100cm・底面幅70cm・深さ35cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は、2Tで1層、3Tで3層に分けられる。すべて自然堆積である。側溝間は推定3.7mで、心心間は4.5mである。出土遺物はない。

（2）V層上面検出遺構

小溝状遺構群（第16・17図）

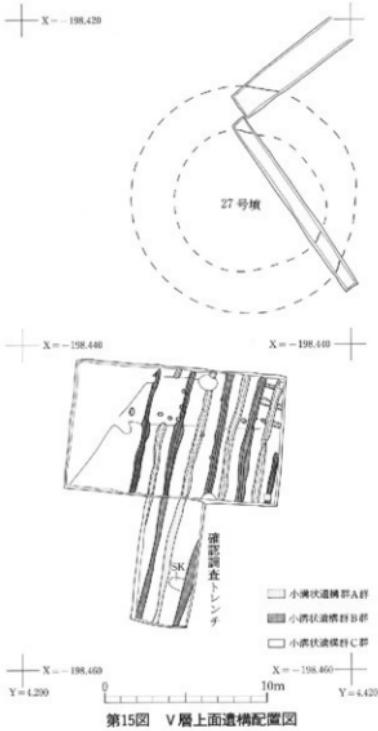
東西方向と南北方向がある。南北方向が東西方向を切る。南北方向は浅い溝と深い溝に分けられる。切り合は不明であるので、便宜的に浅い方をA群・深い方をB群とした。東西方向はC群とした。

A群

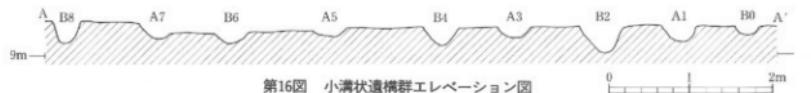
上幅30~50cm・底面幅7~18cm・深さ14~21cmを計る。底面には幅10~20cm間隔の工具痕があり、北に向かって傾斜している。断面形はU字形である。堆積土は、2層に分けられ下部は基本層V層をブロック状に多量に含み、上部は基本層V層を粒状に少量含む。A群同士の溝間は154~190cm（心心間200~230cm）であり、B群との溝間は27~105cm（心心間70~140cm）である。A7の1層から須恵器（写真28-5）A5の1層から埴輪片が出土している。方向はN-10~12°Eである。

B群

上幅20~58cm・底面幅8~25cm・深さ5.5~37cmを計る。底面には幅10~15cm間隔の工具痕があり北に向かって傾斜している。断面形はU字形である。堆積土は2層に分けられ下部は基



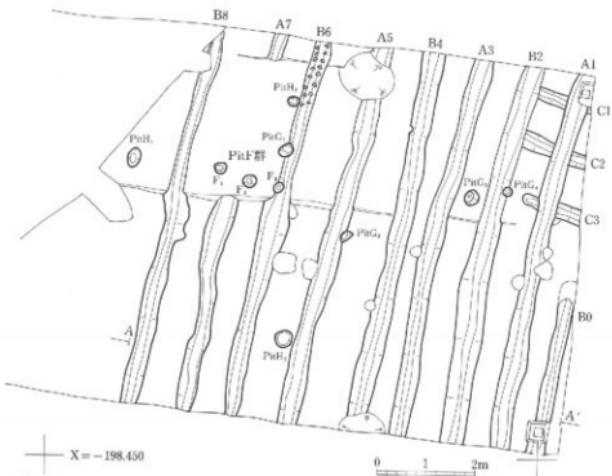
第15図 V層上面遺構配置図



第16図 小溝状遺構群エレベーション図

Y=4.215

X=-198.440



第17図 小溝状遺構群平面図

埋土がIV層を主体としたものをG群とし、埋土がV層を主体としたものをH群とした。両群とも小溝に切られる。柱穴は検出されず性格は不明である。

大野田27号墳（第15図）

3 Tで周溝を部分的に確認した。直徑が推定で周溝の内径8.7m・外径14mであると考えられる。周溝確認面から埴輪（図18-3）が出土している。

他に調査区内から埴輪片が出土している。およそ図18-3と同じ調整をしている。

土師器片は磨滅が激しく調整がわからないものが多い。調整のわかるものは、ロクロ調整されている。

本層V層をブロック状に多量に含み、上部は基本層V層を粒状に少量含む。B群同士の溝間は、124~227cm（心間180~260cm）である。B4の1層から埴輪片が出土している。方向はN-11~14°-Eである。

C群

上幅15~31cm・底面幅4~15cm・深さ2.6~14cmを計る。底面はほぼ平坦で東に向かって傾斜している。断面形は皿形である。堆積土は、1層で基本層VI層を粒状に少量含む。溝間は70~80cmである。出土遺物なし。方向はW-17~19°-Nである。

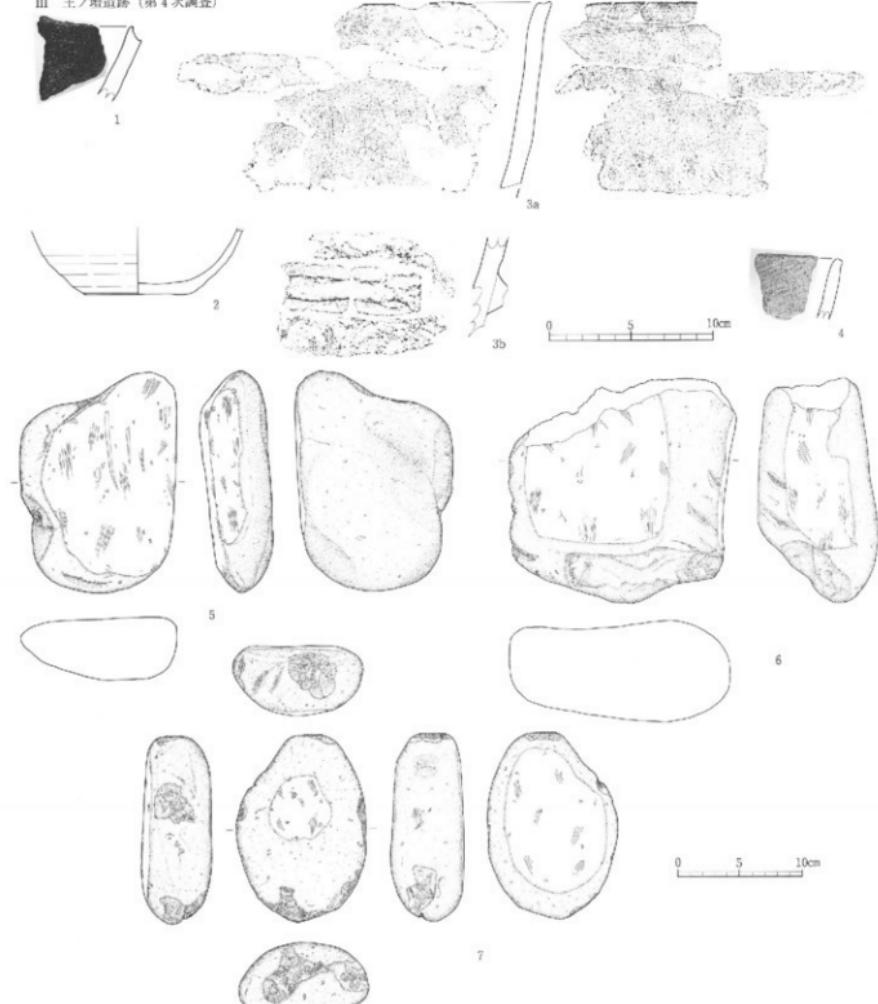
Pit F・G・H（第17図）

埋土に灰白色火山灰を含むF群は一列に並ぶ。角度はN-72°-Wでピット間は50cmである。灰白色火山灰から平安時代以降中世以前の年代を考えられる。

遺構	位置	上	中	下	性	考
小溝A群	1	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	IV層主体	透面付近にV層をブロック状に含む
小溝B群	1	10YR3/3	灰褐色	シルト質粘土	IV層主体	透面付近にV層を粒状に含む
	2	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	IV層主体	V層をブロック状に多量に含む
小溝C群	1	10YR3/2	暗褐色	シルト質粘土	IV層主体	透面付近にV層をブロック状に含む

ピット土層記述						
形	上	中	下	地	層	考
F群	10YR3/4	にかい黄褐色	粘土		V層主体	灰白色火山灰をブロック状に含む
G群	10YR3/2	無色	シルト質粘土		IV層主体	V層をブロック状に含む
H群	10YR3/3	にかい黄褐色	シルト質粘土		V層主体	V層を板状に含む

III 王ノ堀遺跡(第4次調査)



区	号	質	種類	性	測	積	層	位	地	時	期	圖	考
28-	2	青磁	瓶	直	1TSF1	古八重周1層	中四			12c 後半~13c	無文? 動は付葉色(SYB3オリーブ色)		
28-	1	青磁	瓶	直	1TSF1	古八重周1層	誰參系			12c 後半	片切口? 斧形文 動は泥色(7.5YR7/0)灰ミーツ		
28-	3	陶器	壺	直	1TSF1	古八重周1層	白石窯			13c 後半~14c 桜手	船上(7.5YR4/4に近い水槽)に糞石を含み、焼成良好		
18-	1	陶器	片口鉢	直	2TSD1	1層	宝塚			13~14c	口縁部端部が突出している 細密網目が施される		
28-	4	漆器器	?	直	2TSD1	1層				古代	外面-平行クオタキ直角 内面-コロのち同心円のアテ具状 鉛土は、白っぽい無機物でである 各所以外のもの?		
28-	5	漆器器	?	直	1T	古	A7	層		古代(古渡後湖6呂む)	外面-平行クオタキ 内面-同心円状のアテ具状		
28-	6	漆器器	?	直	1T	木屋本	II层			古代	外壁に自然軸		
18-	2	土器器	环	直	1TSP2	路溝1層					埋設が吸い?		
18-	3	25-7	漆器	円筒	3T27	林遺溝上				5c 末~6c 扇	外ケラハメのひじ輪付舌コナギ 内コハメのち縫内方のアテ 口縁は直角コナギ 白漆 M字形上・側・下部ともアテ 白縫部はシャープにつくりだし埋設が吸い?		
18-	4	陶文土器	鉢	直	2T	基本層	V1層			純文後湖中審	LR 横口 白漆丸くなる		
18-	5	25-9	漆石器	直	2TSP1	赤C	過溝2層			純文	底1面 純条紋		
18-	6	25-8	漆石器	直	2TSP1	赤C	過溝2層			純文	底2面 純条紋		
18-	7	25-10	漆石器	直	2TSP1	赤C	過溝2層			純文	最浅部・側面 前2面 純条紋		
28-	11	板状の石材			2TSP1	赤C	過溝2層				安山岩 板状に加工されている 古墳の石碑の石片?		

第18図 出土遺物実測図



第19図 道路跡全体図

6 調査のまとめと考察

(1) 道路跡について

①以前の調査区との関係

前の調査と合わせて、全長350mに渡って確認したことになる。南から現代の通路に沿って湾曲しながら北に進み、大野田古墳群3D区からN-30°-Eの方向で直線的に進み、4TでN-50°-Eに屈曲して当調査区に至る。さらに延長すると旧荒川へ向かう。路面は南から北へ傾斜している。道路全体でみると旧荒川への排水を考慮していることが窺える。構造は当遺跡第1次調査とほぼ同じであるが、第1次調査では新A期段階の側溝は検出されていない。大野田古墳群とも検出面と路面との高低差の違いを除けば類似している。SF-2の先には現代の水路が存在する。屋敷跡全体の区画溝の延長線上にあたり、屋敷跡の存在が想定される。屋敷跡に向かう枝道が前の調査からも発見されており、SF-2の性格も屋敷跡に向かう枝道ととらえることができる。(註5)

②道路跡の年代

遺物はSF 1古A期側溝の1層から12世紀後半～13世紀の中国産の青磁、新A期路層から12世紀後半の龍泉窯系の青磁と13世紀後半～14世紀前半の白石窯系の壺？、SD-1の1層から13世紀～14世紀の常滑窯の片口鉢が出土している。また、これまでの調査から道路跡の年代は13世紀～14世紀前半を中心とらえている(渡邊誠1997他)。遺物が少ないため、今回も同様の年代幅でとらえたい。ただ、新B・C期は側溝状の落ち込みを作り出すという点で違いが見られ、時期差がある可能性もある。それぞれの時期の細かい年代については周辺の屋敷跡の年代や前の調査での道路跡からの遺物を検討してとらえたい。(註5)

③波板状凹凸について

波板状凹凸は古代から近世までの道路跡でみられるもので、道路の基礎事業の跡とする説(註6)、重量物を運搬した際にもちいられたコロやテコあるいは枕木として丸太の路面に残された圧痕とする説(註7)、そのことをふまえて迅速に物資を輸送するために道路面に作った踏張足場・梃子(テコ)穴の痕跡とする説(註8)、それらの説を総合的にとらえ同じ道路でも場所によってその般歴理由が違うという説(註9)などがある。今回SF-2で検出した波板状凹凸は、凹部に充填されている砂とその上面の路層の砂が類似し、南側の路盤では工具痕が検出されている。また、中央部の馬の背状の高まりが、現代の道路などにも見られる轍の凸部にも類似しており使用頻度が少ない部分ととらえられ、砂敷道路以前に使用されていたことが示唆される。以上のことから、砂敷道路以前に道路としての機能があり、その時の路面の荒れを改修し路床・路盤の強化のために波板状凹凸を施したととらえたい(註2)。一方、丸太やコロの跡とするには深さや形態的に無理があるが、規則的に並ぶこと、SF-1側の斜面部分が深いこと、道路の延長上に屋敷跡の存在が想定されることから、重量物を運搬した際にできたテコやテコ穴の痕跡と

もとれる。しかし、テコの跡・テコ穴の痕跡とすると長軸方向が進行方向と一致したり、断面形がレ字形になると思われる。よって、この場合でも砂敷道路構築の際、テコの跡・テコ穴をさらに掘り埋めて波板状凹凸にして底面を突き固め路盤の強化・補強しているととらえられる（註10）。Pit C・D・E群及び全体像はつかめなかつたがSF-1の波板状凹凸B・C・D群も同様のものと考えたい。波板状凹凸A群は、道路の進行方向に直交する長楕円形のピットが等間隔に並ぶものでコロや丸太の痕跡とも考えられる。しかし、ここでは、凹部の堆積状況や底面の硬さなどから、道路の荒れを改修した痕跡あるいは構築時の基礎事業の跡ととらえておきたい。

④ 2 T の石敷道路跡について

大野田古墳群の道路跡を含めて2 Tの路面の標高が一番低くなり、水の影響を受けやすかったと推定される。このことが、新C期の路面が1・3 Tでは砂敷で、2 Tでは石敷になる理由なのかもしれない。また、屋敷跡との関連で2 T付近が重要であるために、特に強固に丁寧に作つたとも考えられる。

西側の石がぎっしり詰まっている部分の下面は古A期側溝を掘り直して波板状凹凸と同じような工法で埋め戻している。このようにした理由は部分的な検出のため不明である。だが、暗渠的な働きをもたすためのものとか（註11）、ただ単に側溝にたまたま土を浚い波板状凹凸と一連の工事をしたもの等の理由があげられる。

⑤ SF-1とSF-2の関係について

切り合ひ関係から古B2期～新C期段階にSF-2道路跡が設置されたことが分かる。その中で、SF-1の古A期段階の側溝がSF-2に規制されるよう作られており、古B1期段階にSF-2は道路として機能していたととらえられる。波板状凹凸A群もこの時のものと考えられる。そして、③の見解から、この時SF-2はまだ砂敷の道路ではなかつたと考えられ、SF-2と新C期段階の道路構築方法が類似することと合わせて考えると、新C期段階構築時にSF-2も改修し砂敷の道路にしたととらえられる。後の段階はSF-2を意識するよう湾曲するようにSF-1は構築されており、SF-2も機能していたことが想定される。

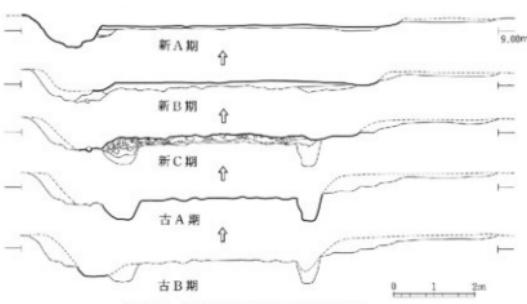
以上のことから、古期段階を経て、新C期段階で大規模に道路を改修し、その後は新C期段階の路層を路床にして凹凸をなくすように路層を敷くだけの改修となることが想定される。

(2) まとめ

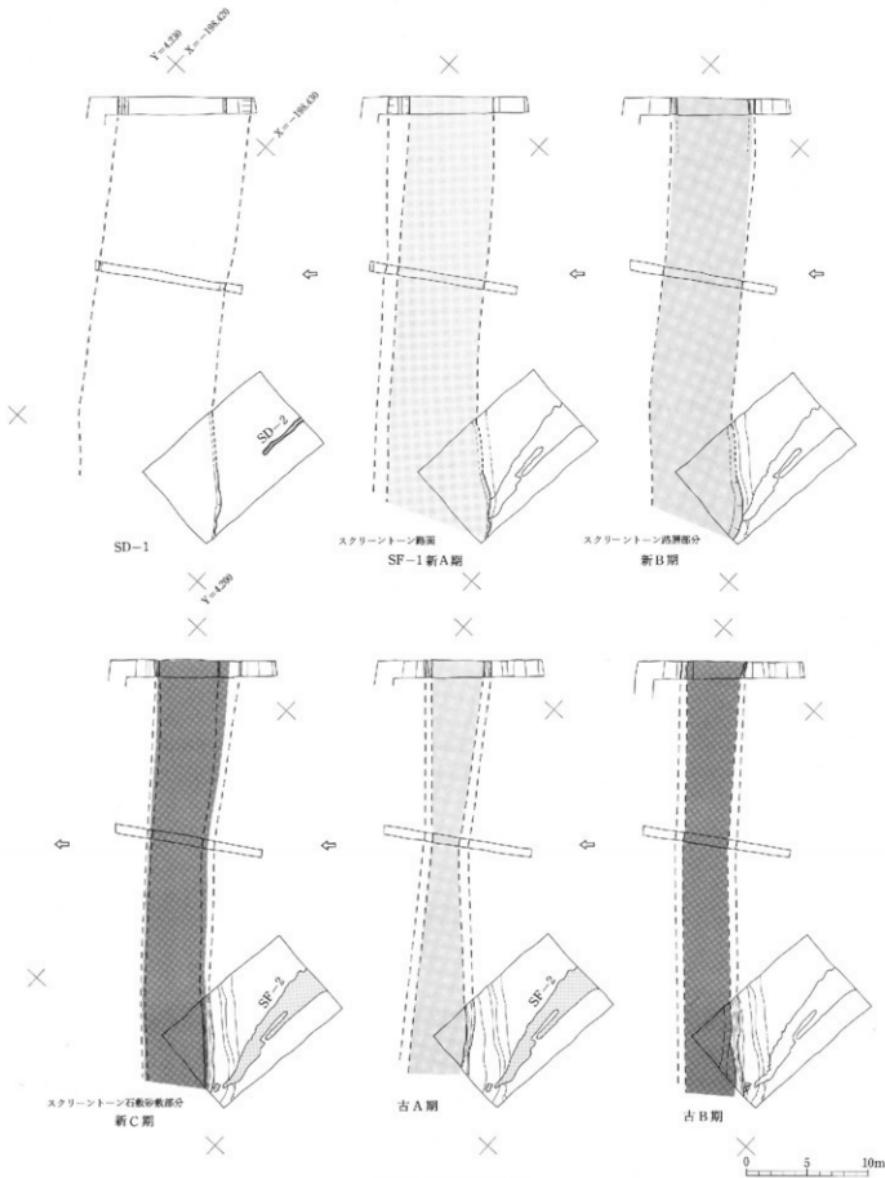
- ・第1次調査検出の道路跡の延長部分とそこから派生する枝道を検出した。道路跡は5時期ある。特に新C期段階の路面は石敷・砂敷であり下部構造に波板状凹凸を伴うなど、丁寧な造りになっている。
- ・炭化物・骨・スサ入り粘土を堆積土中に含む土坑を検出した。
- ・3時期の小溝状遺構群が発見された。時期は須恵器の年代とこれまでの調査から古墳時代から奈良時代にかけてととらえられる。
- ・大野田27号墳が確認された。

（註1）検出された上面を路面としたが、次の段階の道路構築のために壊されて本来の路面でない可能性はある。

（註2）道路塗拂に伴つて検出される道橋で、波板状凹凸・波板状圧痕などと呼ばれているもので第1次調査・大野田古墳群の道路跡でも検出されている。大野田古墳群の調査では、路床・路盤の強化および排水を目的とした、凹部の埋土も含めて道路構築時の痕



第20図 道路跡変遷図(2T北壁断面)



第21図 道路跡変遷図

III 王ノ壇遺跡（第4次調査）

跡あるいは改修工事の痕跡と考え、波板状凹凸としないで波板状凹凸とした。今回もこの見解を踏襲した。（渡邊誠：1997 竹田・渡邊：1998 田中他：1998）

（註3）路2層は4層に細分される。その各層の上面及び波板状凹凸の上面それぞれが路面として使用された可能性もある。しかし、今は路2a層の上面から落ち込みや使用痕跡が検出され、他の層の上面からは検出されなかったことから、波板状凹凸も含めて一連の道路構築事業ととらえた。

（註4）第1次調査及び当調査区から300m北の大野田遺跡で縄文時代の配石遺構が発見されている（仙台市教育委員会1996他）。

（註5）第1次調査・及び大野田古墳群については、現在整理作業中であり、全体的なことはその報告を持ちたい。

（註6）飯田充所1993「道路整備方法について—埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして—」

『古代交通研究第2号』古代交通研究会

板橋正幸1998「下野国那須郡衙発見の道路遺構」「古代交通研究第8号」古代交通研究会

（註7）早川泉1997「古代道路遺構の虚像と実像—東山道武藏路の調査を通して—」「古代交通研究第6号」古代交通研究会

（註8）宮田太郎1998「考察・鎌倉街道の輸送工法跡跡一路床に刻まれた踏張足場穴・梃子穴—」

『多摩のあゆみ Vol92』財團法人たましん地域文化財団

（註9）近江俊秀1995「道路遺構の構造－波板状凹凸を中心として－」「古代文化」第47巻第4号

（註10）波板状凹凸を作り中世の道路跡は宮城県では他に検出例はないが、古代の多賀城跡の城外の方形地割の道路跡にみられる（千葉他：1997）。また、路面下の基礎事業として、9世紀代であるが、丸太材を密接して敷き並べた例もある（菅原：1997）。古代以来、道路構築方法として路面の下に何らかの事業をする場合があることがわかる。

（註11）時代・場所は離れているが筑後國府周辺の西海道で路面下で晴略と考えられる溝が検出されている。（久留米市教育委員会：1987）

引用・参考文献

小川淳一 1998 「武士の屋敷跡にみる銅・鉄製品の生産—仙台市王ノ壇遺跡」「季刊 考古学第62号」

久留米市教育委員会 1987 「筑後國府78次調査」「筑後國府」昭和62年度調査概報

主浜光朗 1995 「縄文時代 王ノ壇遺跡」「仙台市史 特別編2考古資料」仙台市史編さん委員会

菅原弘樹 1997 「上代遺跡」「舟場遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第173集

仙台市教育委員会 1996 「縄文人のハート大野田遺跡」仙台市文化財パンフレット第38集

仙台市教育委員会 1992 「仙台市王ノ壇遺跡現地説明会資料」

竹田幸司・渡邊 誠 1998 「仙台市大野田古墳群中世道路跡」「考古学ジャーナル NO430」ニュー・サイエンス社

田中・渡邊・竹田 1998 「仙台市王ノ壇・南小泉遺跡の道路跡」「発掘された中世古道 Part 1」 中世みらいの研究会

千葉・鈴木・菊池 1997 「山王遺跡I—仙塙道路建設に係る発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第45集

渡邊 誠 1997 「大野田古墳群」「宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」宮城県史跡整備市町村協議会

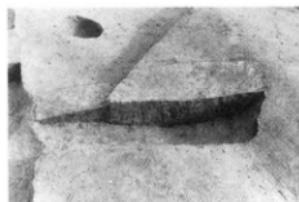


写真1 SK-2 土坑断面

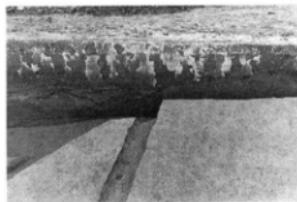


写真2 1T 北壁断面

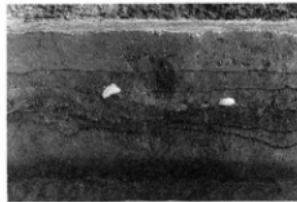
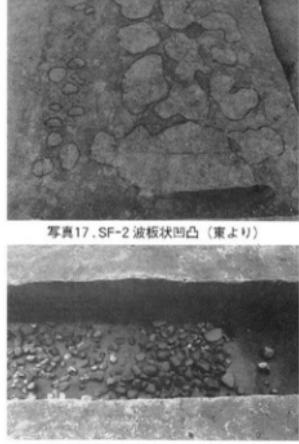
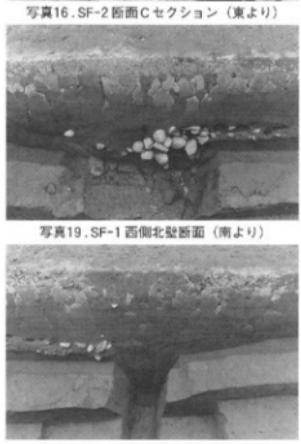
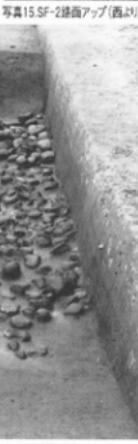
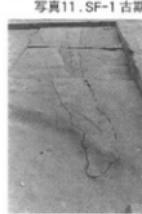
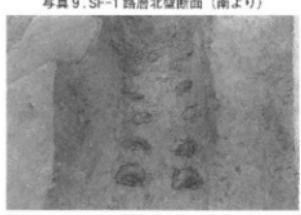
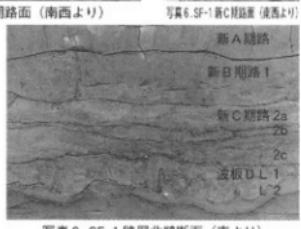


写真3 1T 東壁断面



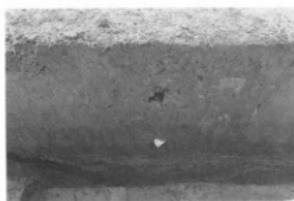


写真22. 3T 東側南壁断面 (北より)



写真23. SK-1 数石検出状況 (西より)



写真24. 1T 西壁断面 SK-1付近 (東より)



写真25. 小溝状造模群 完掘状況 (東より)

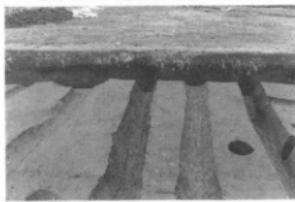


写真26. 小溝状造模群アップ



写真27. 27号墳周溝確認 (南西より)

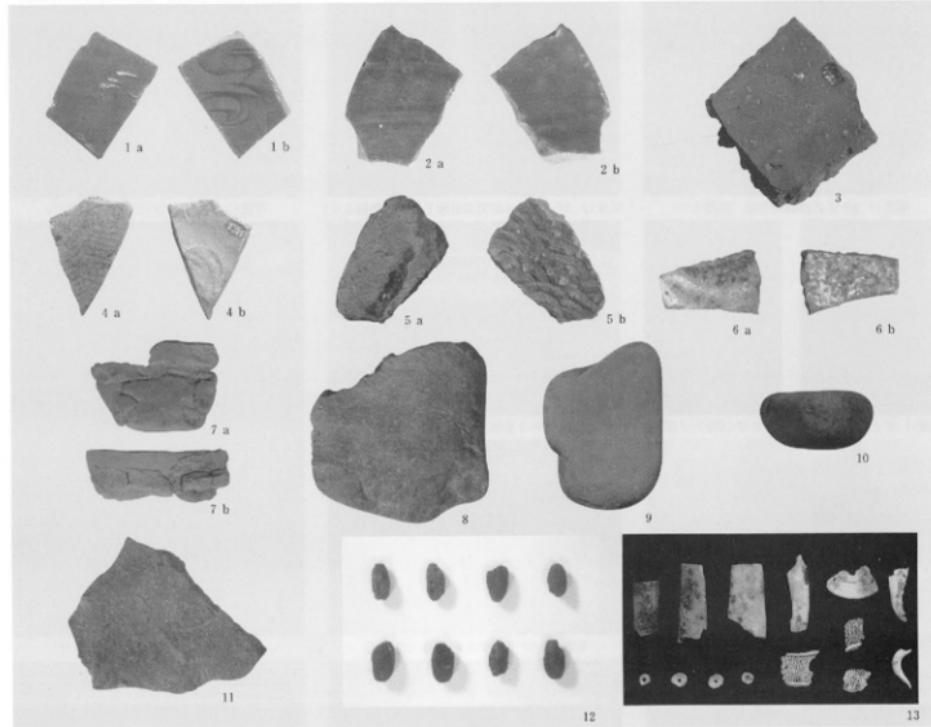
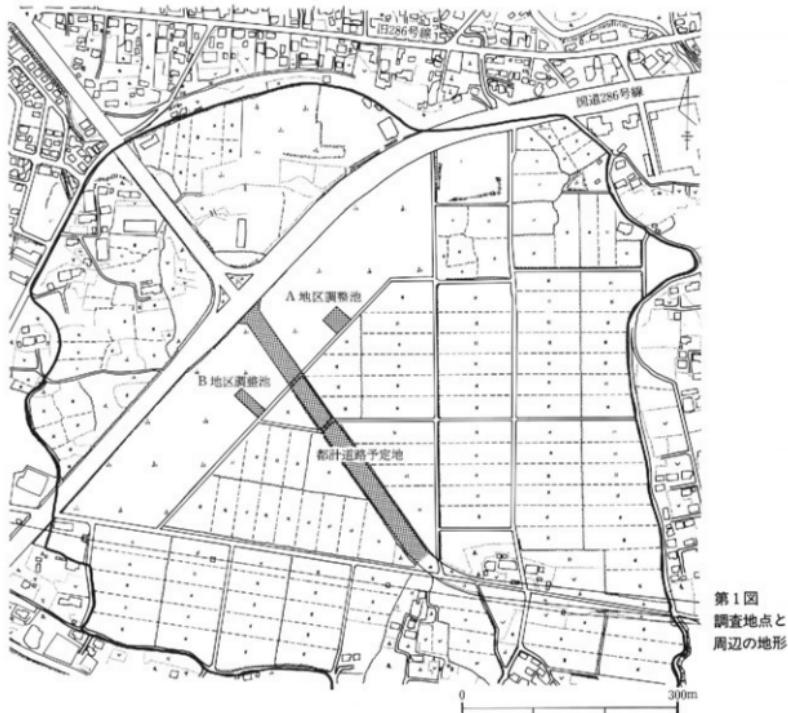


写真 28

IV 山田条里遺跡（第2次・3次調査）

I 調査要項

- 遺 踪 名 山田条里遺跡（宮城県遺跡番号01367、仙台市文化財登録番号C-294）
- 調 査 地 点 仙台市太白区山田字田中前、谷地田外
- 調 査 原 因 仙台市山田鈎取土地区画整理事業（2次調査）
仙台市市道「富田富沢線」建設（3次調査）
- 調査対象面積 2次 6,000m²、3次 20,800m²
- 調 査 面 積 2次 450m²、3次 1,835m²
- 調 査 期 間 2次 平成10年4月14日～6月12日、3次 平成10年4月14日～7月14日
- 調 査 主 体 仙台市教育委員会
- 調 査 担 当 仙台市教育委員会文化財課
- 担 当 職 員 主浜光朗 松本知彦
- 調 査 参 加 者 (2・3次) 遠藤いな子 小川良子 金沢沙知子 熊沢とも 小林斎美 佐野たみえ
島崎なつ子 庄子かつえ 関谷栄子 高橋たづよ 三浦たか子 三浦つよの 森 ミヨノ
(3次) 阿部八重子 伊藤清子 内田節子 小野紀美子 加嶋みえ子 狩野吉則 菊地富子
佐藤順子 佐藤清治 庄子弘子 菅原 弘 鈴木きぬ子 高橋弘子 渡辺まき子
(3次・整理) 小山つるよ 佐藤洋子 佐藤優子 森谷愛子



(整理) 石川カツ子 及川のり子 熊谷さぬ子 斎藤喜恵子

申 請 者 2次 仙台市山田鈎取土地地区画整理組合 理事長 小島養治

3次 仙台市長 藤井 黎

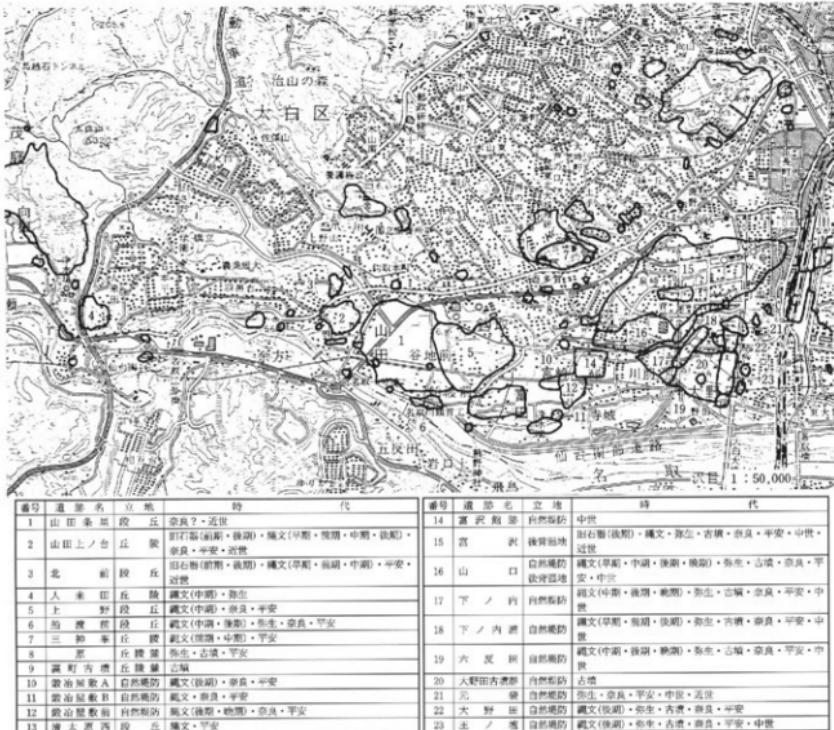
調 査 協 力 株式会社オオバ東北支店

2 遺跡の位置と環境

山田条里遺跡は仙台市の南西部、JR長町駅の西方約4kmの地点、太白区山田・鈎取地区に所在する。遺跡の北方には青葉山丘陵が西から東へ向かって延び、南方には名取川を挟んで高館丘陵が位置している。本遺跡はこの青葉山丘陵と高館丘陵の間に広がる標高24~40mの「名取台地（山田面）」と称される河岸段丘の東端部、名取川に流入する小河川の形成した平坦な扇状地上（標高30~38m）に位置している。基盤となる段丘疊層には粘土まじりの砂、シルトが厚く堆積している。遺跡の範囲は約66万m²にも及び、現在は水田地帯となっている。

本遺跡周辺には旧石器、繩文、弥生、古墳、奈良平安の各時代から、中・近世にかけての遺跡が数多く存在しており、仙台市内でも遺跡の密度の高い地域となっている。

本遺跡については、平成元年～平成3年度に実施した発掘調査（第1次調査）終了後の農業基盤総合整備事業によって、以前には良好に見られていた「条里型」の土地割が失われてしまい、景観的に全く見ることが出来なくなってしまった。



第2図 山田条里遺跡と周辺の遺跡

3・2 次調査

(1) 調査方法

平成10年3月30日付で、仙台市山田鈎取土地地区画整理組合理事長より、仙台市太白区山田字田中前外に区画整理事業に伴う発掘届が提出された。この場所は山田条里遺跡のほぼ中央に位置し、1次調査で水路部分を中心とした調査が行われ、水田跡、堀跡を主とした屋敷跡、土坑、石組炉等の遺構や遺物が発見されている。仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、工事において掘削を伴う部分について事前に発掘調査を実施することとした。

周辺道路部分については、既に農業基盤整備後に農道として使用されており、今回の区画整理地内の盛土との間が水路として機能している部分もあることから、調整池部分の調査結果から道路部分の調査の実施を検討することとし、当初は調整池部分に調査区を設定した。

1号、2号調整池予定地を、それぞれ区画整理A区、B区とし、建設予定地内の1.5~2mに及ぶ盛土を除去した後、A区については6m×44.5m、B区については6m×27mの調査区を設定し、重機による掘り下げを行い、人力によって精査を行った。下層の調査は調査区を縮小しながら掘り下げを行い、土層の確認のみを行った。

測量基準については、A区、B区共に調整池建設地の4隅に杭を設置し、北西隅の杭を基準としてグリットを設定した。

調整池部分の調査結果から、周辺道路部分に調査区を設定して確認が必要な遺構はなく、道路及び水路として機能しており、削平も考えられることから、周辺道路部分の調査は行わないこととした。

(2) 基本層序

調査区が2ヶ所に離れているため、土性、色調等に違いは見られるが、I~V層まで5枚の層位が確認された。

I層はA区では5層に細分され、近~現代の水田作土であると考えられる。1層は盛土直前の水田作土である。

II層は2層に細分される。上部に灰白色火山灰を小ブロック状、あるいは斑に含んでいる。

III層は3層に細分される砂質の土壌である。

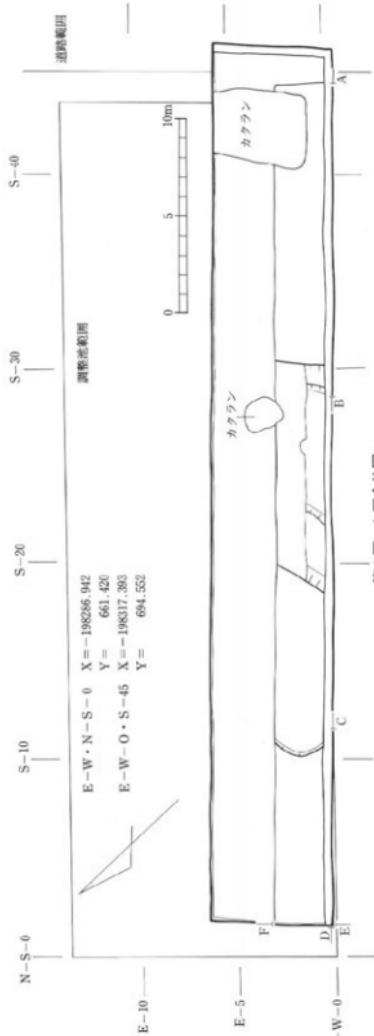
IV層は黒色系の土壌で、A区では2層に細分される粘土層、B区では砂質シルト層である。B区ではII層、III層が水田耕作のため削平で既に失われている。IV層も大部分削平されており、分布が途切れる部分がある。層厚も概ね数cm程度である。

V層はA区で6層に細分され、粘土質土と砂質土の互層状態になっており、下層では縦まりが増大する。B区では6層に細分され、上部の砂質シルトから下部に向かって徐々に粘土質土に変わり、粘性、縦まりが増す。最下層では漸移的に砂層に移行している。

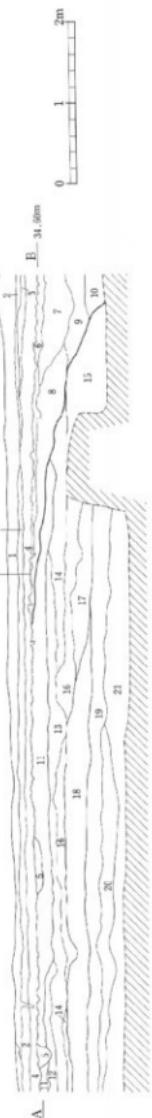
これらの層の1次調査の基本層との対応関係は、I層が1次調査の1層、II層が3層、IV層が4層、V層が5層に対応するものと考えられ、各層の時期についても同様の対応関係が考えられる。1次調査の2層については、水田耕作のために削平されたものと考えられる。また、今回の調査でのIII層は、今回の調査区が1次調査時より北西に外れて、標高も高い部分にあることから、確認されたものであると思われる。最下層のV層の下層の状況にも相違が見られ、今回は下層に砂疊~疊層は確認されなかった。

(3) 発見遺構と出土遺物

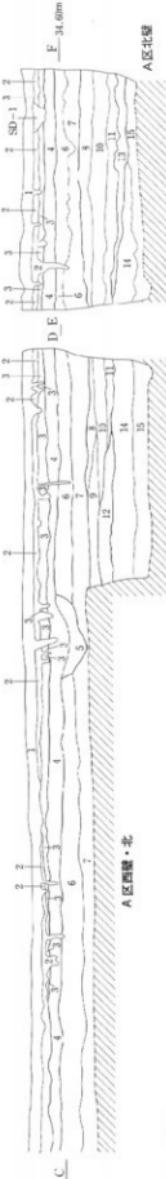
A区 盛土の影響か、全体にグライ化の傾向が見られる。I層上面及び層中で検出された遺構については、極めて新しいものと考えられたため記述から除いた。II層上面で小河川が検出された。また、II層上部は1次調査の成果から水田跡と考えられた。IV層は調査区中央部では確認されず、南半部と北端部にのみ確認され、縄文時代の遺物は南半部のS-33以南からのみ出土した。



第3図 A区全体図



A区西壁・南



A区西壁・東



第4図 A区土壌断面図

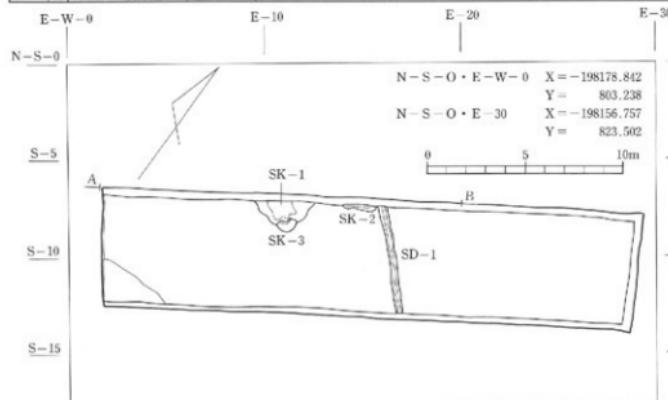
II層検出遺構

II層水田跡 I層がII層を擾拌しており、畦畔等の遺構は検出されなかつたが、S-10ライン付近で弧状の段を検出した。比高差は5cm前後である。II層上面の標高は34.5m~34.8mで北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。下面の凸凹は頗者ではない。遺物は少量の土器片がある。

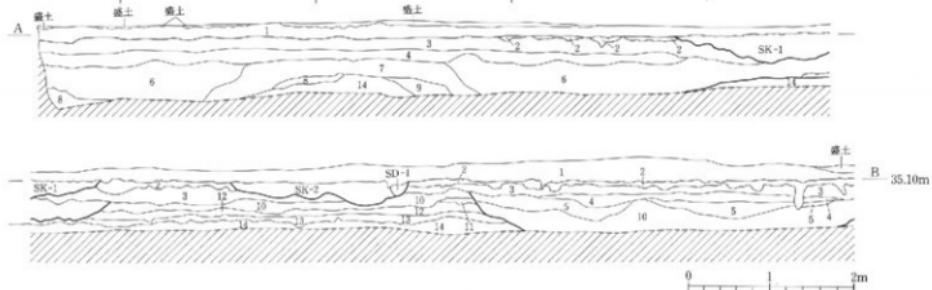
小河川跡 調査区中央部S-17~33に位置する。断片的なもので詳細は不明であるが、上幅約11m、東西方向を指

A区西壁北・北壁土層記

層位	No.	土色	土性	層	
				号	名
I	1	2.SY4/1	オーブ風色	シルト	地盤には18GJ/Lの部分があり。現地作土。
	2	2.SY4/4	灰褐色	シルト	砂質的、マンゴン色。
	3	2.SY4/2	暗灰褐色	砂質シルト	砂質的、マンゴン色。
II	4	SY5/2	灰オーブ風色	シルト	砂質的、マンゴン、7.5Y4/1動土小ブロックを含む。本作土。
	5	10YR5/2	オリーブ風色	シルト	層面上に礫化跡発現。
	6	2.SV4/2	暗灰褐色	シルト質砂	砂質的、マンゴン色。
III	7	5Y5/2	オリーブ風色	シルト質砂	砂質的、マンゴン色。
	8	5GY4/4	灰褐色	シルト	砂質的、礫化土。小ブロックを若干含む。
	9	5Y4/1	暗オーブ風色	粘土	砂質的、含む物小量のみ。
IV	10	10YR5/1	暗褐色	砂質シルト	砂質的、10YR5/1の部分。
	11	5GY4/4	暗オーブ風色	砂質シルト	7.5Y4/1の部分。
	12	10YR5/1	暗褐色	粘土	砂質的、含む物小量。
V	13	7.5Y4/1	オーブ風色	粘土	木炭、植物体を多量に含む。
	14	5G3/1	暗褐色	粘土質シルト	グリーンした粘土層。深木(木)を含む。
	15	5G4/1	暗褐色	粘土	5H5/1 砂質小ブロックを含む。



第5図
B区全体図



層位	No.	土色	土性	層	層位	土色	土性	層	
I	1	2.SG4/1	黒色	シルト	地盤内に10YR5/1の部分あり。ワーベーの部分。	8	10Y4/1	灰色	細砂
II	2	10YR5/2	黒褐色	砂質シルト	砂質的、10YR5/1の部分。	9	5GY4/1	オリーブ風色	細砂
III	3	2.SV5/3	暗褐色	砂質シルト	砂質的、10YR5/1の部分。	10	2.SV4/4	オリーブ風色	粘土質シルト
小河川	4	SY6/2	灰オーブ風色	シルト質粘土	マンゴン、風化軽度を少量含む。	11	10Y4/2	暗オーブ風色	じし土質砂
	5	SY5/2	灰オーブ風色	細砂	マンゴン。	12	5Y5/2	灰オーブ風色	粘土
	6	2.AY4/3	オーブ風色	細砂	風化軽度を含む。	13	5L5/2	黑色	風化軽度。
	7	2.SV4/1	黄褐色	粘土	層子は風化へりり、マンゴンを含むが、風化軽度。	14	5G4/1	褐灰色	粘土

第6図 B区土層断面図

している。堆積土中に灰白色火山灰をブロック状に大量に含んでおり、砂礫層と腐植土層が互層になっている。遺物には土師器片、須恵器片があり、須恵器の中には墨書きが認められるものがある。平安時代以降のものであると思われる。

B区 I層直下でIV層が確認され、IV層上面で土坑3基、溝跡1条が検出された。IV層は遺存状況が悪く、鳥状に途切れる部分もあるが、繩文土器、石器が出土している。V層上面でピット、倒木痕が検出された。ピットは人工的なものとは考えられなかった。V層下部で蛇行する小河川跡が確認されている。なお、I層直下で焼夷弾3本を検出している。

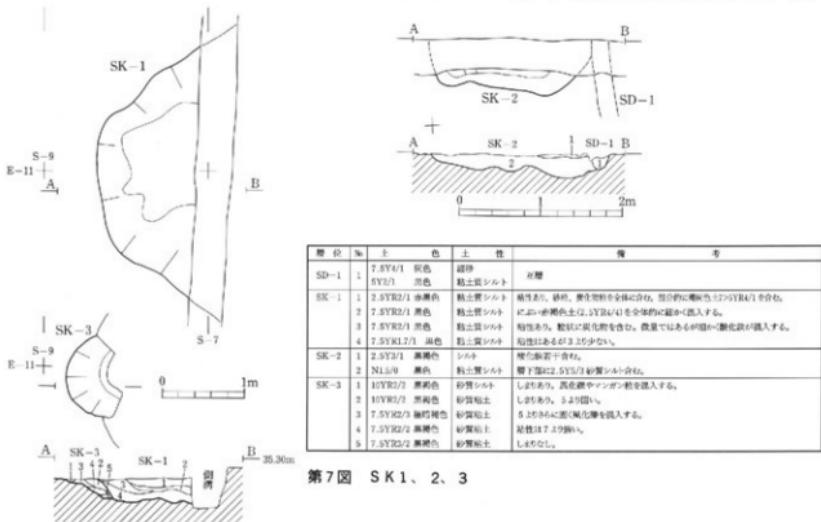
IV層検出遺構

SK-1 土坑 調査区西寄り、E-11・S-7付近に位置している。SK-3と重複関係にあり、SK-3を切っている。調査区外へ延びており、正確な規模、平面形は不明であるが、直径3m前後の不整な円形を基調とした平面形と考えられる。壁高は21~28cmあり、底面から緩やかに立ち上がる。底面は小さな凹凸はあるがほぼ平坦である。堆積土は4層に分けられる。遺物は土師器の小破片が出土している。

SK-2 土坑 調査区中央、E-15・S-7付近に位置している。SD-1と重複関係にあり、SD-1に切られている。調査区外へ延びており、正確な規模、平面形は不明であるが、長軸2m以上、短軸0.7m以上の不整な梢円形を基調とした平面形と考えられる。壁高は7~16cmで遺存状況は良くない。底面から緩やかに立ち上がる。底面には凸凹があり、西側が一段高くなっている。堆積土は2層に分けられる。遺物はない。

SK-3 土坑 調査区西寄り、E-11・S-8付近に位置している。SK-1と重複関係にあり、SK-1に切られており、正確な規模、平面形は不明であるが、直径1m以上の円形あるいは梢円形を基調とした平面形と考えられる。壁高は22~24cmあり、底面から緩やかに立ち上がる。底面は削平のため、ほとんど遺存せず不明である。堆積土は5層に分けられる。遺物はない。

SD-1 溝跡 調査区中央部に位置し、調査区を斜めに横切るように延びている。調査区外へ延びており、検出されたのはその一部である。SK-2と重複関係にあり、SK-2を切っている。調査区内での方向は、およそW-35°-Nである。上幅は20~30cm、底面幅は10~15cmである。断面形は「U」字状を呈している。深さは確認面から底面まで20cm前後である。底面にはゆるやかな凹凸が見られ、底面レベルは一定せず、比高差5cm程度でうねっている。

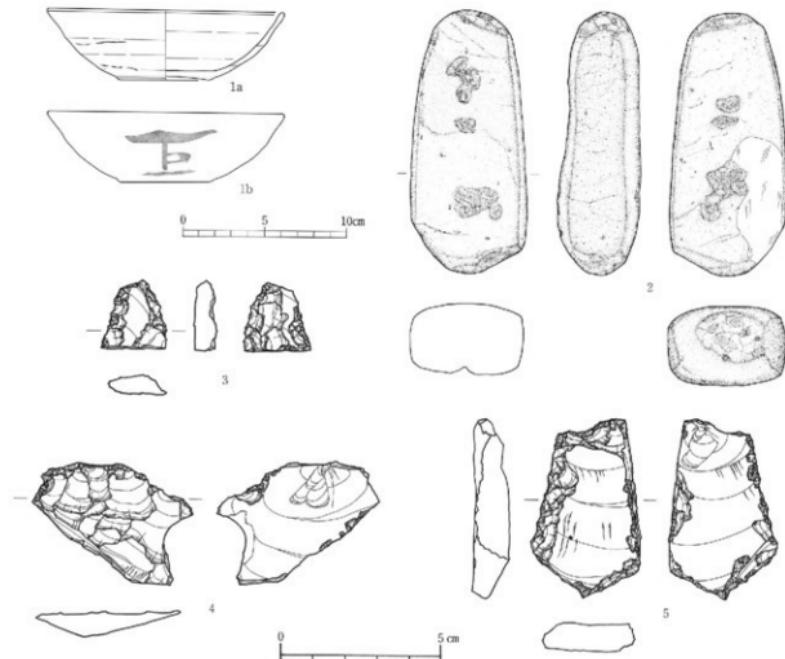


第7図 SK 1、2、3

堆積土は単層であるが、砂と粘土の互層になっており、自然堆積であると思われる。遺物はない。

(4)まとめ

1. 今回の調査区は遺跡中央部のやや西寄りに位置しており、標高はA区で35m前後、B区で35.3m前後である。
2. A区のII層が水田跡と考えられ、遺跡西部まで水田域が遺存することが確認されたが、畦畔等の遺構は検出されず、下層の巻き上げも顕著ではなく、古代の水田跡については水田範囲の確認にとどまった。また、「条里跡」に関する痕跡も認められなかった。
3. その他の遺構として、土坑、溝跡、小河川跡がある。出土遺物は少量である。中でも遺構内出土の遺物は極めて少ない。陶磁器、土師器、須恵器、繩文土器、石器がある。墨書銘須恵器を除いて時期の判明するものはなかった。
4. 遺構の年代は、A区の水田跡、小河川跡は、灰白色火山灰の状況と出土遺物から、平安時代あるいはそれ以前と考えられる。B区では土坑、溝跡があり、出土遺物が極めて少ないので詳細は不明であるが、A区検出遺構と同様の年代が考えられる。



No.	登録番号	推測	器種	出土地点	層位	外 面	内 面	底 部	側 面	考	写真回数
1	925	須	環	A区	河川底	コクロ調整	コクロ調整	圓弧形切り斜切削	体部外面に墨書き「目」カ	35-1	
No.	登録番号	推測	器種	出土地点	層位	長×幅×厚cm	重 量g	石 器	側	考	写真回数
2	955	礫	石	B区	II層	15.7×7.2×4.8	899.4	安山岩		35-5	
3	955	不定形石器	石	B区	II層	2.15×2.05×0.6	2.8	頁	岩		35-2
4	946	礫	石	B区	II層	(37.6)×5.0×0.82	12.0	頁	岩		35-3
5	930	不定形石器	石	B区	II層	5.6×3.3×0.94	22.9	頁	岩		35-4

第8図 第2次調査出土遺物

4 3次調査

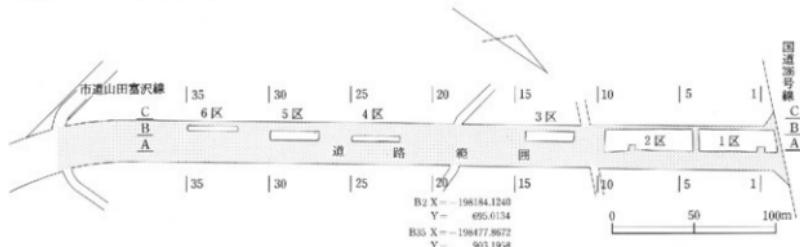
(1) 調査方法

平成10年3月19日付で、仙台市長より仙台市太白区山田字田中前地内における市道「富田富沢線」（富沢～山田地内）建設工事の発掘通知が提出された。この道路は山田条里遺跡中央を北西から南東に貫いており、第1次調査で、中央以南の水路部分の調査が市道予定地の両側で行われており、水田跡、堀跡、土坑、石組炉等の遺構と遺物が発見されている。仙台市教育委員会では、事業主体者と協議の上、事前に発掘調査を実施することとした。当初は区画整理地内の国道286号線から約100mまでを調査の対象範囲とし、北西側から1区、2区と2ヶ所の調査区を設定して調査する予定で調査に着手した。5月に入り、調査の進捗状況と遺構の検出状況から、更に南側の市道「山田富沢線」ととの間の区間を調査の対象範囲に拡大することとした。

区画整理地内では、排土を考慮に入れ、1区は13m×48m、2区は13m×54mの範囲で重機を用いて盛土を除去したが、1区では盛土はほとんど見られず、盛土と表土を同時に除去した。その後人力で6m×45mの範囲を掘り下げて精査し、更に範囲を縮小しながら掘り下げ、下層の確認を行った。2区では1区同様盛土と表土を除去したが、北西から1/3付近で盛土以前の水路が検出され、水路以南では設定した調査区中央に湧水を処理するための溝が掘削され、更に大部分の範囲で砂疊層上面まで擾乱が及んでいた。そのため水路以北では人力で6m×20mの範囲を精査し、水路以南では擾乱を免れた部分の遺構確認を行い、更に下層の確認のための側溝の掘り下げを調査区の東壁沿いで行った。

南側に拡大した部分では、北西から南東に向かって3～6区までの4ヶ所の調査区を、第1次調査時に遺構を検出した部分の近接地で、既存の道路及び湧水処理のために掘削された部分と水田の作業用の通路を除いた場所に設定した。3区、5区は6m×30m、4区、6区は3m×30mの調査区を設定し、重機による掘り下げを行い、人力によって精査を行った。下層の精査については側溝を掘り下げ、砂疊層の確認を行った。

測量については、道路の中心杭No122～No104を基準として10m×10mのグリッドを設定した。



第9図 調査区配図

(2) 基本層序

調査区が細長い範囲にわたるため、土性、土色などに違いは見られるが、I～VI層まで6枚の層が確認された。

I層は、3層に細分される。削平及び擾乱によって確認されない部分、1あるいは2層のみが確認される部分もある。近現代の水田作土であると考えられる。

II層は、灰色系の土壤である。2区南半から4区北端部までは削平のため確認されず、遺存状況の良い部分でも島状に分布しているのみである。

III層は、3層に細分される。上層からの削平で確認されない部分も見られるが、灰白色火山灰を小ブロック状あるいは斑に含んでいる。

IV層は、砂質土壤であり調査区北部の1区から2区北端部にかけてのみ確認された。

V層は、黒色系の土壤で、1区南半から4区北半にかけて確認された。2区南半では削平及び擾乱によってほとんど確認されなかった。弥生土器、縄文土器、石器を含んでいる。

VI層は、概ね砂礫層であるが、2区の中央部には、上部のシルトから細砂を挟んで粘土質土に変わり、粘性、しりとりとも増す部分がある。その他では、下部につれて砂礫となり、特に南側の4区南半から5区にかけては、最下層で疊層となっている。

これらの層の1次調査との対応関係は、I層が1次調査の1層、II層が2層、III層が3層、V層が4層、VI層が5層に対応するものと考えられ、各層の時期についても同様の対応関係が考えられる。IV層については、1次調査の調査区より標高の高い位置でのみ確認されているため、1次調査では検出されなかつたものと思われる。

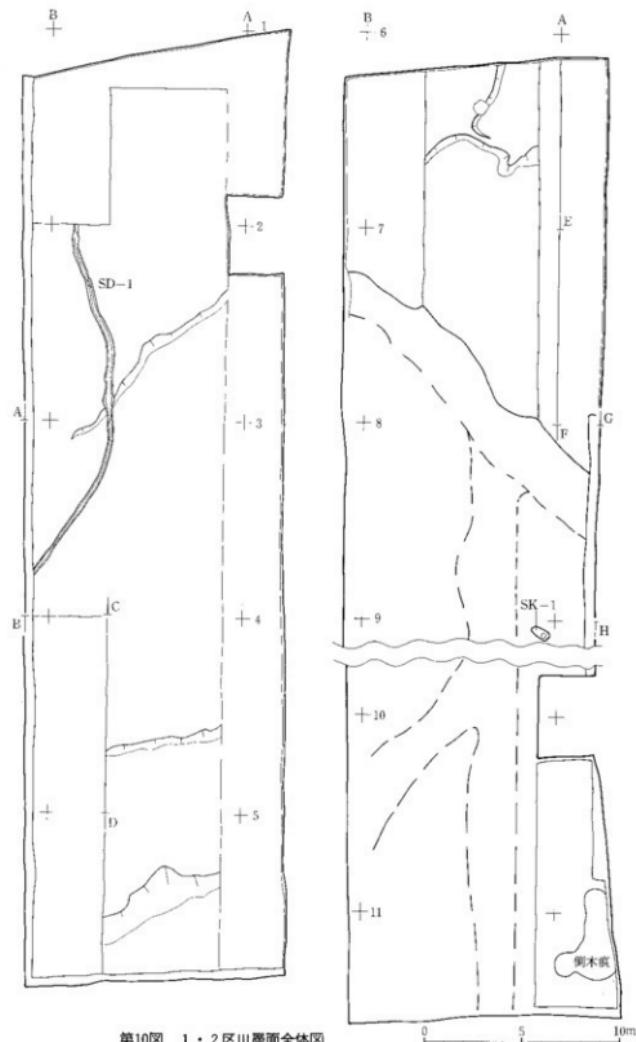
(3) 発見構造と出土遺物

1・2区 1区のII層上面で溝跡1条が検出された。1次調査の成果より水田土壤と考えられるIII層は、1区から2区北部のA7グリッドにかけて確認された。1区A3グリッドから2区A7グリッドにかけてIV層が確認され、2区のA8グリッド以南では、削平と擾乱のため部分的に島状に残存するのみであった。

2区のV層上面で土坑1基が検出された。2区南端の10~11グリッドにかけては、IV層中及び倒木痕上面で弥生土器が比較的まとまって出土している。

II層検出構造

SD-1溝跡 1区中央西よりに位置し、弧状に延びている。調査区外に延びており検出されたのはその一部である。上幅



第10図 1・2区III層面全体図

IV 山田条里遺跡（第2次・3次調査）

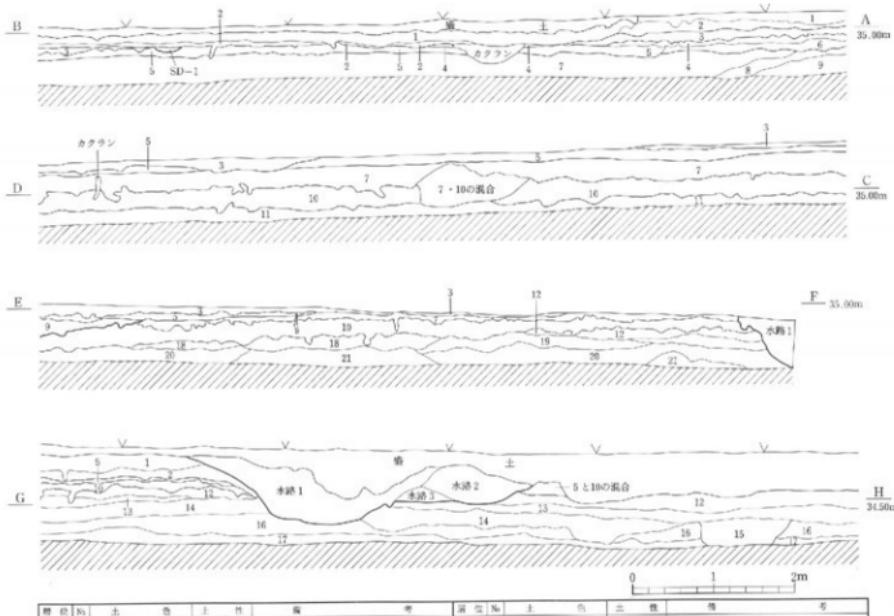
は20~60cm、底面幅は7~35cm、断面形は「U」字形であるが皿形を呈する部分もある。深さは、確認面から底面まで5~11cmである。底面はほぼ平坦で、底面レベルは地形の傾斜に沿って南に向かって徐々に低くなっている。堆積土は単層であり、自然堆積であると思われる。土器類、須恵器の摩小片が出土している。

VI層検出遺構

SK-1 土坑 2区中央部東よりに位置している。平坦形は長軸0.95m、短軸0.45mの不整な梢円形で、壁高は46cmあり、概ね底面から急角度で立ち上がるが、西壁は緩やかな角度である、底面は平坦である。堆積土は5層に分けられる。出土遺物はない。3・4・5・6区 3区は、1次調査のCトレーンチ北端、石組炉が検出された部分の東に隣接して設定した。I層直下でV層が確認され、II~IV層は削平され確認されない。

V層から、繩文土器、石器が僅かに出土している。V層上面で石組炉に関する遺構は検出されなかった。VI層は全体にグライしている。

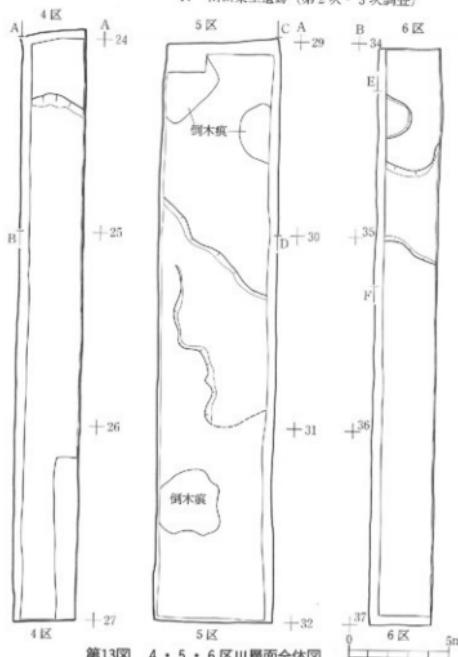
4・5・6区は、水田作業に支障のない場所で、1次調査の際に畦畔が検出された部分に近接した部分に設定し



層	No.	土色	土性	層	No.	土色	土性	層			
I	1	3VY/2 黒色	シルト	II	12	3VY/2 黒4リープ色	シルト	III	12	3VY/2 黑	シルト
	2	2.5VY/2 黄灰青色	シルト質砂		13	3G4/1 黄	シルト		13	3G4/1 黄	シルト
II	3	2.5V4/2 黄灰色	シルト	IV	14	3VY/2 黑	粘土質シルト	V	14	3VY/2 黑	シルト
	4	2.5V4/4 黄灰	粘土質シルト		15	3VY/2 黄4リープ色	シルト		15	3VY/2 黑	シルト
III	5	2.5V4/2 黄4リープ色	シルト	VI	16	3VY/2 黄4リープ色	シルト	VI	16	3VY/2 黑	シルト
	6	2.5V4/3 オーバー海色	シルト質シルト		17	3VY/2 黄4リープ色	シルト		17	3VY/2 黑	シルト
IV	7	3V4/3 黄4リープ色	シルト	VII	18	3BG4/2 黄灰灰黑色	シルト→細砂	VII	18	3BG4/2 黄灰灰黑色	シルト
	8	2.5V4/2 水4リープ色	シルト		19	3BG4/2 黄灰灰黑色	シルト		19	3BG4/2 黄灰灰黑色	シルト
V	9	2.5V4/2 黄灰青色	シルト質砂土	VII	20	3BG4/2 黄4リープ色	シルト		20	3BG4/2 黄4リープ色	シルト
	10	3.5V/0 黑	シルト質粘土		21	3BG4/2 黄4リープ色	シルト		21	3BG4/2 黄4リープ色	シルト
VI	11	2.5GY/4 黑4リープ色	中砂	VII	22	3V3/1 オーバー黑	シルト	VII	22	3V3/1 オーバー黑	シルト
	12	3V3/1 黑	シルト		23	3V3/1 黑	シルト		23	3V3/1 黑	シルト

第12図 1・2区土層断面図

IV 山田条里遺跡(第2次・3次調査)

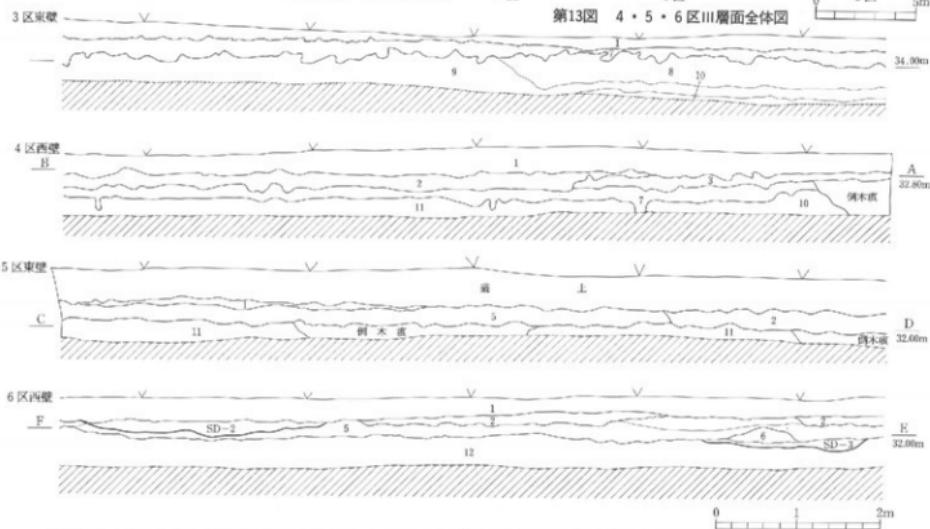


た。基本層は、IV層を除く5層が確認された。II層は南に行く程薄くなり、6区北半のB-35グリッド以南では確認されない。III層は所々に島状に確認される程度であり、V層は4区北半のB-25グリッド以南では確認されない。特に5区は、南西部を除いてグライしている。III層では水田跡と溝跡、IV層で水田跡と溝跡、倒木痕が検出された。

III層検出遺構

II層水田跡 4区北部、5区中央部、6区北部でそれ段差が確認された。段の方向は、5区のものがN-90°-Eとおよそ東西方向である。他のものは弧状になっている。耕作土は削平を受けている部分も多いが、10~30cm程認められ、下層に凹凸が認められる部分がある。遺物は4区で土器小片が出土したのみである。1次調査の2層水田跡と同時期と考えられ、近世~近代の水田跡と思われる。

SD-2溝跡 6区北側B-34グリッドに位置し、調査区を斜めに横切るように延びている。調査区外に延びており、検出されたのはその一部である。調査区内での方向は、N-90°-Eとおよそ東西方向である。上幅



層名	色	土性	層参考	層名	色	土性	層参考
I	3Y4/2 黄オリーブ色	シルト	鍾乳洞を含み、層下部に灰岩層有り。	6	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	樹木灰、風化沙泥を含む。
II	2.5Y4/1 貝殻褐色	シルト	鍾乳洞、ツバキ、1.1mの砂層アラート有り。	9	2.5Y3/3 黄褐色	粘土質砂	樹木灰を含み、下部はグライ。
III	2.5Y4/1 高褐色	粘土質シルト	黄色の灰岩アラート、10Y3/1 黄土色、ツバキ、貝殻等有り。	10	7.5GY3/1 深緑灰色	粘土・粘土質	樹木灰・砂層アラート。
IV	2.5Y4/2 黄褐色	粘土質シルト	黄色の灰岩アラート、貝殻等有り、ツバキ、ツバキ等有り。	11	2.5GY8/1 オリーブ褐色	シルト	上部に10Y4/2の土層アラート有り、遠山大湖アラート。
V	10YR5/2 黒褐色	粘土質シルト	10Y4/2の灰岩アラート、貝殻等有り、ツバキ、ツバキ等有り。	12	10YR5/6 黑褐色	粘土質砂	ツバキ、貝殻等有り。ツバキ・白木灰、樹木灰は薄い。
VI	3Y4/1 黑色	シルト	10Y4/1 黑褐色アラート、貝殻等有り。	SD-2	1 10YR4/1 黃褐色	粘土質シルト	樹木灰有り
VII	10YR4/1 黑褐色	粘土	樹木灰層上部有る。	SD-3	1 3Y4/1 黑色	シルト・貝殻粘土	2.5Y4/2 黑褐色シルト層に含む。
VIII	1.5/0 黑色	シルト・貝殻粘土	貝殻物質を含む。				

第14図 3・4・5・6区土層断面図

は2.5m前後、底面幅は2m前後

である。断面形は浅い皿状である。深さは確認面から底面まで20cm

C-35 +

前後である。底面は平坦で、底

面レベルは地形の傾斜に沿って、

若干西側に傾斜している。堆積

土は単層で自然堆積と思われる。

礫石器が出土している。

VI層検出遺構

III層水田跡 4区・5区各々の

北部で耕作土は検出されたが、

畦畔などの遺構は検出されなか

った。6区B-34グリッドで東西

に延びる上幅40~60cm、下幅70

~85cmの高まりを確認した。状

況から擬似畦畔Bと考えられ、直

上のIII層に畦畔が存在していた

ものと思われる。擬似畦畔は1

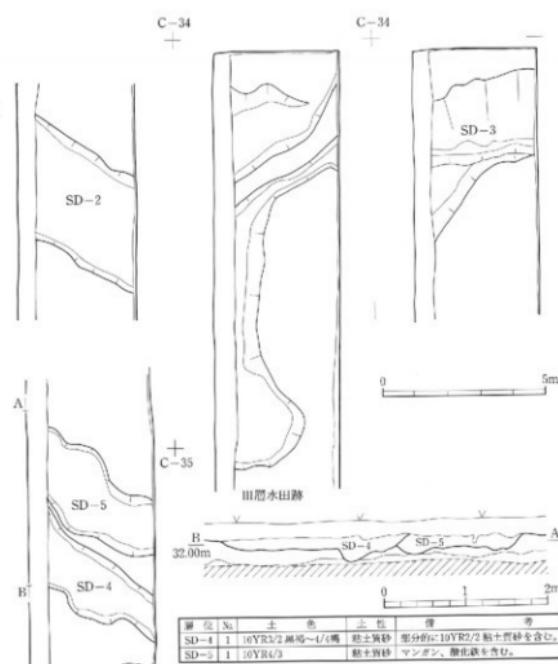
条のみで、高さは4~12cmであ

る。方向は、N-12°-Eである。

耕作土は3層あり10~20cm程認

められ、下面に凹凸が見られる。

C-37 +



第15図 SD2~5 III層水田跡

須恵器、石器が出土している。1次調査の3層水田跡と同時期と考えられ、平安時代の水田跡と思われる。

SD-3溝跡 6区北側B-2グリッドに位置し、調査区を斜めに横切るように延びている。調査区外へ延びており、検出されたのはその一部である。調査区内での方向はN-48°-Eである。上幅は2m前後、底面幅は30~45cmである。断面形は浅い皿形である。深さは確認面から底面まで20~30cm前後である。底面には緩やかな凹凸が見られ底面レベルは一定しないが、西側に傾斜している。堆積土は単層であり、自然堆積であると思われる。遺物はない。

SD-4、5溝跡 6区南側B-36グリッドに位置し、調査区を斜めに横切るように延びている。調査区外へ延びておらず、検出されたのはその一部である。重複関係にあり、SD-4がSD-5を切っている。調査区内での方向は、SD-4がN-87°-E、SD-5はやや蛇行しているが、N-83°-Eである。規模は、SD-4が、上幅0.85~1.0m、底面幅0.5~1.2m、深さは10cm前後である。SD-5は、上幅1.5~1.7m、底面幅1.0~1.4m、深さは10~15cmである。断面形は共に浅い皿形である。底面は平坦であるが、SD-4の底面には凹みが見られる。底面レベルは若干東側に傾斜している。堆積土は単層で、それぞれ自然堆積であると思われる。共に遺物はない。

倒木痕 4区で2カ所、5区で6カ所の倒木痕を確認している。

(4)まとめ

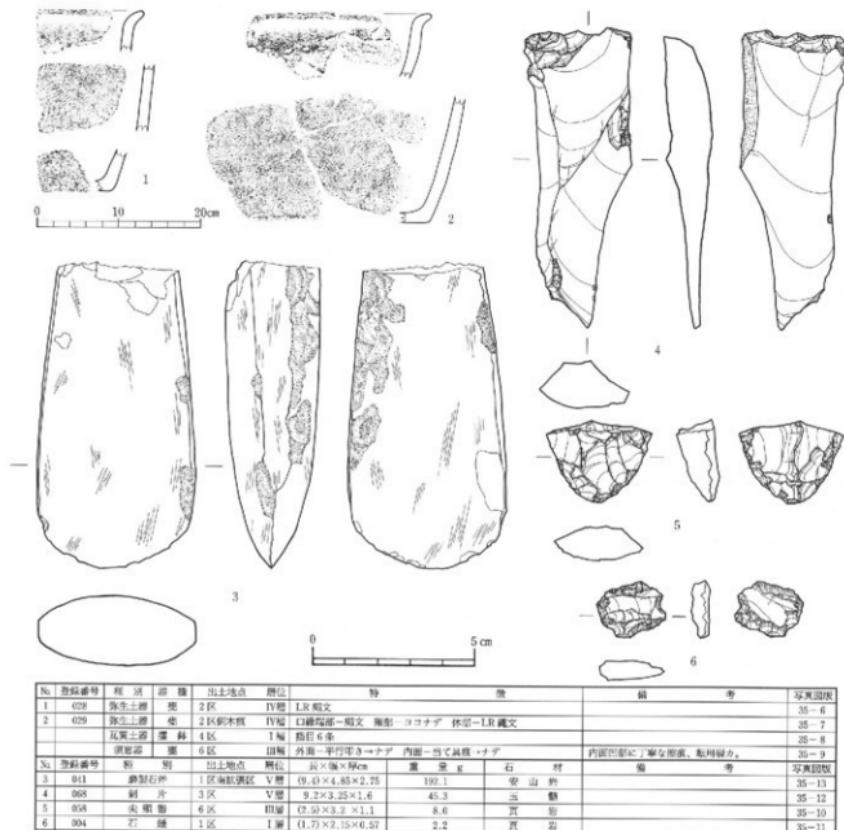
1. 今回の調査区は遺跡中央部を北西から南東方向に横切っており、標高は1区で36.0m前後、6区で32.0m前後である。

2. 近世~近代、平安時代の2時期の水田跡を確認した。畦畔、水路などの遺構はほとんど検出されず、水田跡の詳細は不明であり、「条里制」に関する痕跡も、わずかに東西方向(正方向)の段が見られるのみである。

3. その他の遺構として、土坑、溝跡、河川跡がある。遺物は極めて少ない。陶磁器、土師器、須恵器、弥生土器、繩文土器、石器がある。弥生土器はその特徴から、樹形開式期のものであると考えられるが、繩文土器は時期を特定できる資料はなかった。遺構の時期は不明である。

参考文献

- 渡部・川名（1992）：「山田条里遺構略報」「仙台平野の遺跡群III」仙台市文化財調査報告書第162集 仙台市教育委員会
渡部・弘美（1993）：「山田条里遺構発掘調査報告書」「仙台平野の遺跡群III」仙台市文化財調査報告書第170集 仙台市教育委員会



第16図 3次調査出土遺物



写真1 2次調査A区III層面全量（南西→）



写真2 A区III層上面の段（北東→）



写真3 A区南部土層断面（南東→）

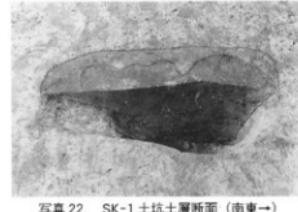
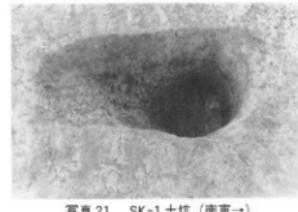
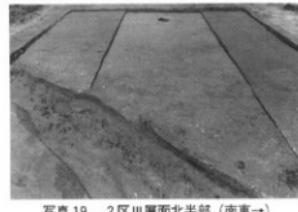
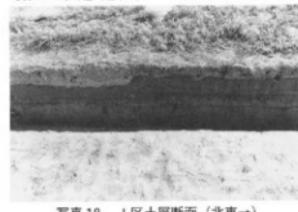
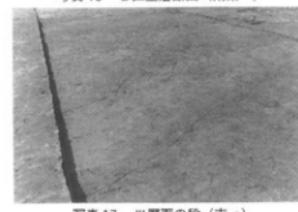
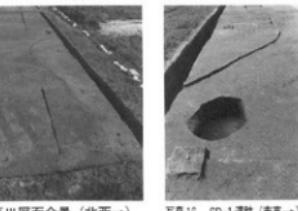
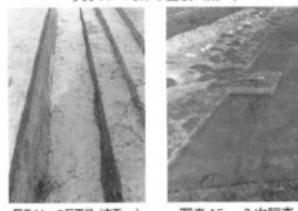
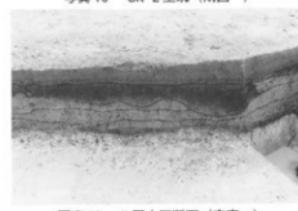
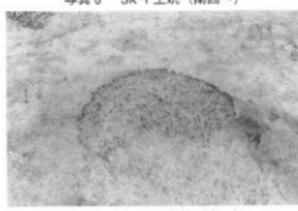
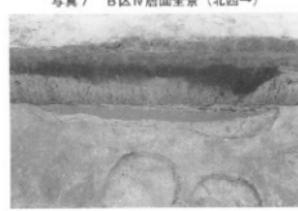
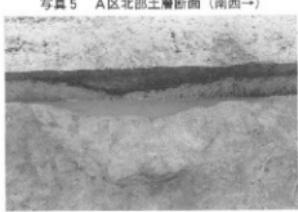


写真23 3区表土耕、調査前の状況（北西→）

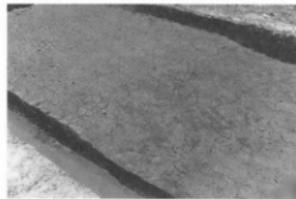


写真26 4区Ⅲ層面の段（南→）



写真29 6区V層面全景（北西→）

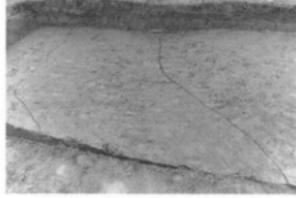


写真32 SD-3溝跡検出状況（南→）

写真24 3区土層断面（南西→）

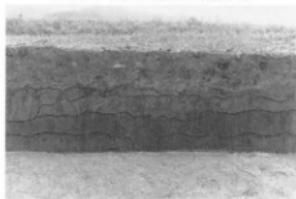


写真27 4区土層断面（北東→）

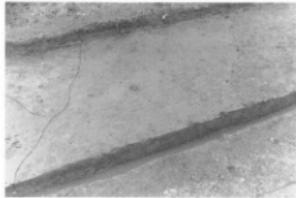


写真30 SD-2溝跡検出状況（西→）



写真33 SD-4.5溝跡検出状況（西→）

写真25 4区Ⅲ層面全景（南東→）



写真28 5区Ⅲ層面全景（北西→）



写真31 6区Ⅲ層水田跡、疑似時跡（北西→）

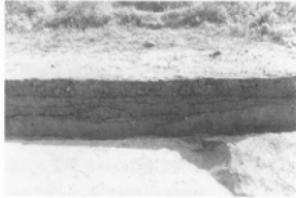


写真34 6区土層断面（北東→）

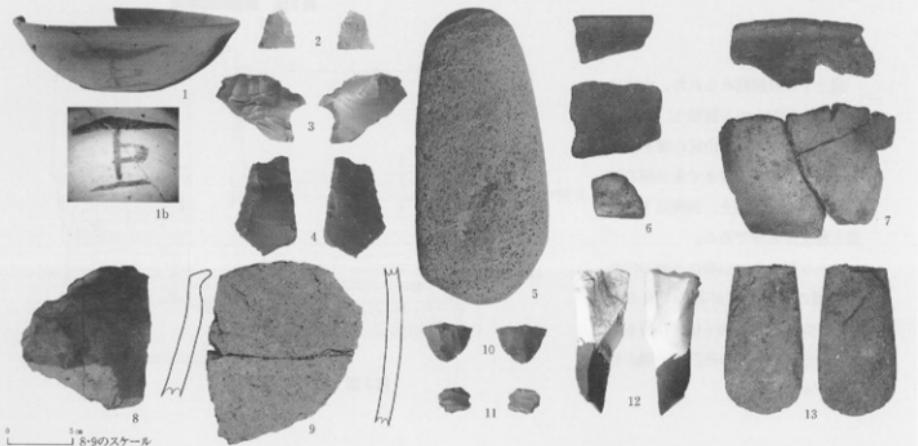


写真35 出土遺物

V 富沢遺跡（第110次調査）

I 調査要項

遺跡名	富沢遺跡（宮城県遺跡番号 01369）
調査地点	仙台市太白区長町南一丁目188-15
調査原因	RC 3階建事務所併用住宅建設
調査対象面積	111m ²
調査面積	40m ²
調査期間	平成10年5月18日～5月20日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	篠原信彦 竹田幸司 豊村幸宏
調査参加者	青山諒子 伊藤房江 香井民子 高橋勝恵 高橋美香
申請者	鈴木吉昭

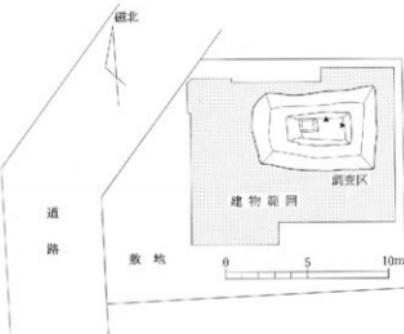


第1図 調査地点と周辺の地形

2 調査の経過と方法

遺跡の位置と環境については、これまで刊行されている発掘調査報告書を参照していただきたい。

平成10年3月20日付で、上記地内における重量鉄骨造3階建事務所併用住宅建設とともに発掘届が提出された。この場所は、富沢遺跡の南東部に位置し、北方約200mには35次調査区、西方約50mに44次調査区、南西方約80mには87次調査区があり、弥生時代から近代に至る水田遺構の存在が想定される地点である。調査は、建物予定範囲に5.3m×7.5mのトレーニングを設定し行った。

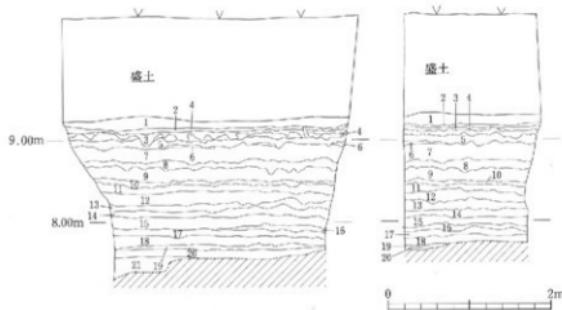


第2図 調査区配置図

3 基本層序

盛土下に21層認められた。土性は1層と2層がシルト質粘土、3層から16層まで6層の火山灰の層を除き粘土、17層から19層まで未分解の植物遺存体を含む粘土、20層以下は泥炭と粘土の互層である。

2～5層・7～13層は下面の凹凸や下層の巻き上げが著しく見られる。また1・15・16・18・19層も顕著ではないが下面の凹凸や下層の巻き上げが見られる。



第3図 北壁・東壁断面図

No.	色	土性	色
1	2.5GY/4 ブラック	シルト質粘土	地盤に埋め詰められた火山灰
2	9GY/1 オリーブ色	シルト質粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
3	7.5GY/1 灰褐色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
4	7.5GY/1 灰褐色	粘土	細かい火山灰を含む土質の火山灰・灰褐色の土
5	5Y/4/1 黄色	粘土	細かい火山灰を含む土質の火山灰・灰褐色の土
6	10YR/1 黄色	粘土	細かい火山灰を含む土質の火山灰・灰褐色の土
7	2.5Y/1 黄褐色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
8	7.5Y/1 黄褐色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
9	7.5Y/1 黄褐色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
10	5Y/5/1 黄色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
11	5Y/6/2 黄オーブ色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
12	5Y/6/1 黄色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
13	2.5Y/1 黄褐色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
14	2.5Y/1 黄オーブ色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
15	10YR/1 黄色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
16	5Y/5/1 黄オーブ色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
17	5Y/5/1 黄褐色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
18	5Y/4/1 黄色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
19	5Y/6/2 黄オーブ色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
20	5Y/6/1 黄褐色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰
21	5Y/5/1 黄褐色	粘土	下層を除いた部分は、中層より細かい火山灰

表1 土層記録表

4まとめ

1) 水田土壤

今回の調査で、現代の水田土壤である1層を除き、土層の状況から2・3・5・7・8・10~13・18層が水田土壤と考えられる。また4・9・15・16・19層もその可能性が考えられる。水田の時期は10世紀前半に下降したとされる灰白色火山灰が6層に堆積していることから、5層より上の層は10世紀前半以降近世以前、7層以下は10世紀前半以前の年代幅が考えられる。

次に当調査区の北側200mで行われた第35次調査区の層位の対応から年代を考えてみると表2のようになる。(註1)

第110次	2層	3層	4層	5層	7層	8層	9層	10層	11層	12層	13層	15層	16層	18層	19層
第35次	3層	5層	6層	9層	10層	13層	14層	16層	16層	16層	16層	22層	23層	24層	25層

表2 35次調査との層の対応

2)まとめ

- 今回の調査は富沢遺跡の東部で行われた。
- 現代の水田土壤である1層を除き、2・3・5・7・8・10~13・18層が水田土壤と考えられるまた、4・9・15・16・19層もその可能性が考えられる。
- 水田の年代は第35次調査と対応し、弥生~近世にかけての連綿と続いた水田土壤であることが分かった。

(註1) 土層の様子及び灰白色火山灰・自然堆積層などの鍵層などから判断した。

参考文献

平間亮輔 1989「富沢遺跡第44次調査」『富沢・泉嶋浦・山口』仙台市文化財調査報告書第128集

平間亮輔 1991「富沢遺跡第35次調査」仙台市文化財調査報告書第150集

佐藤甲二 1994「富沢遺跡第87次調査」『富沢・泉嶋浦・山口(7)』仙台市文化財調査報告書第184集



写真1 調査区全景



写真2 北壁断面

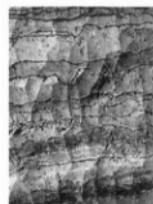


写真3 北壁アップ

VI 北目城跡（第2次調査）

I 調査要項

遺跡名	北目城跡（宮城県遺跡番号 01029）
調査地点	仙台市太白区郡山西四丁目214-1
調査原因	地中送電線設置工事
調査対象面積	117m ²
調査面積	80m ²
調査期間	平成10年11月9日～11月13日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	竹田幸司
調査補助員	岩井レイ子 斎藤由美子 島津レチ子 蓮沼英子 蓮沼秀子
申請者	東北電力㈱ 宮城支店

2 遺跡の位置と環境

JR長町駅の南東1.5kmに位置する平城跡である。名取川と広瀬川に囲まれた郡山低地の東部にあり、標高約9m前後の自然堤防上に立地している。北目城は、伊達政宗が関ヶ原の戦い（1600年）の際に入城し、仙台城に移るまでの間、居住したことで知られている。平成4～5年度に実施した第1次調査では、陶磁器類や三引両紋が描かれた漆器椀、脇差、虹架など豊富な遺物をともなう近世初頭の「障子櫛」を検出している。『仙台領古城書上』（延宝年間：1677年頃）によれば、政宗入城以前の北目城は、栗野大膳が茂ヶ崎城より移り天正年間（16世紀後葉）まで居城し、その後屋代勘解由兵衛が指置かれたという。



第1図 調査地点と周辺の地形

3 調査の方法

平成10年8月11日付で、東北電力株式会社宮城支店長より、上記地内における地中送電線敷設にともなう発掘届が提出された。この場所は、北目城跡の北西端に位置し、第1次調査試掘1・2地点の北側に位置し、外縄想定線上にある。このため申請者と協議の上、事前に発掘調査を実施することとした。調査は、堅坑予定範囲に9.5m×8.4mのトレンチを設定し、断面観察を中心に行った。

4 基本層序

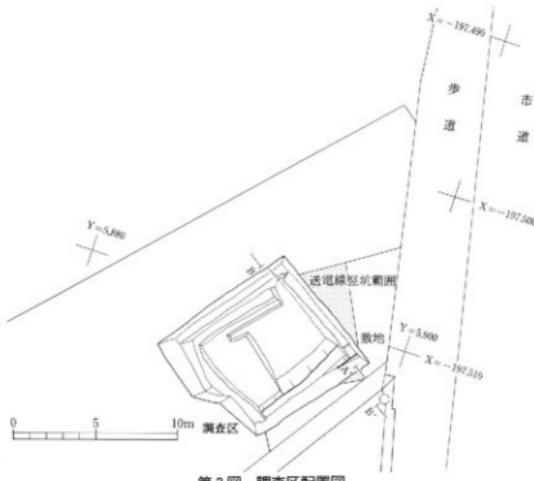
I層は躋地からの崩落土あるいは盛土時の埋め戻しの土、II層は近代～現代の水田土壤、III層はSD-1堀跡の確認面である。以下VIIa層を除き自然堆積と考えられる。VIIa層は第1次調査1区SD-1堀跡北壁の基本層23層の縄文時代後期の遺物包含層に対応すると考えられる。遺物はII層より19世紀以降の大堀相馬産の黒釉の陶器が出土し

ている。

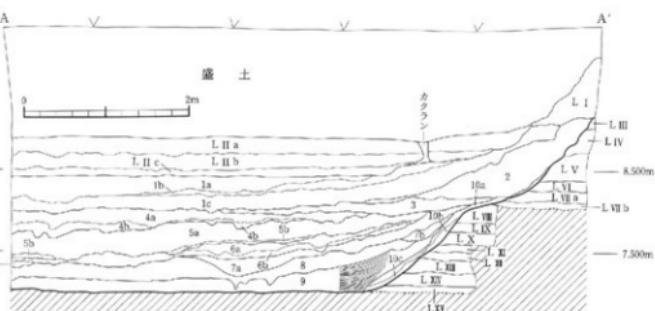
5 発見遺構と出土遺物

SD-1 堀跡

東側の立上がり部分の確認であるため全体の規模は不明である。上幅 6 m 以上、下幅 4 m 以上、深さ確認面から 2 m、東側の隣地からは 4.8 m を計る。底面は平坦であり、約 40° の角度で膨らみを持って立上がり中央部でテラス状の段差を持つ。その段差からさらに約 40° の角度で膨らみを持って立上がり上端に達する。底面標高は約 7 m である。方向は真北を基準に N-33°-E である。堆積土は大別 10 層細別 18 層に分けられる。下から 10 層は壁ぎわの崩落土、8・9 層は止水性の堆積土、7 層から 4 層の各層は下部が自然堆積あるいは崩落土で上部が埋め戻しの土となる。4 层上面でテラス状の段差と同じ高さになる。3 層は自然堆積で、2 層は埋め戻しの土である。1 層は水成堆



第2図 調査区配置図



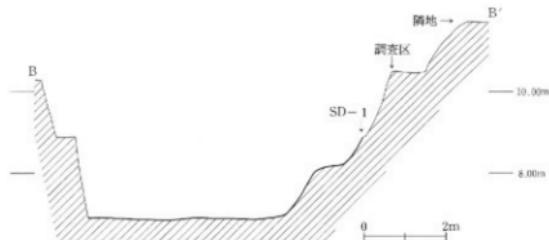
基本層

%	土色	土質	備考
I	10YR8/2 黄褐色	シルト	燃土
Ia	5GY7/1 硫黄色	粘土	既述に壁際の事例あり 水田耕作土
Ib	2.5GY7/1 オーブ状黄色	シルト質粘土	既述に壁際の事例あり 水田耕作土
Ic	7.5GY7/1 褐灰色	粘土質シルト	既述に壁際の事例あり 水田耕作土
II	10YR8/6 明黄褐色	シルト	田畠土、この辺より SD-1 堀跡をぬき出している
IV	10YR7/4 K3.5N 黄褐色	シルト質粘土	マンゴ粉を多く含む
V	2.5Y7/3 黄褐色	粘土	マンゴ粉を多く含む
VI	2.5Y8/2 褐黄色	粘土	シルト・粘土質の泥炭
VIa	10Y3/4/1 硫黄色	粘土	
VIb	10Y3/4/1 黄褐色	粘土	堆積を較めて多く
VIb	2.5Y7/2 黄褐色	粘土	
IX	2.5Y5/2 黄褐色	粘土	
X	2.5Y4/2 黄褐色	粘土	
XI	2.5Y5/2 C4.5N+黄色	シルト質粘土	
XII	7.5Y7/1 黑色	粘土	
XIII	2.5GY7/1 オーブ状黑色	シルト質粘土	
XIV	5GY7/1 オーブ状黑色	粘土	テラス化
XV	2.5Y5/2 4.5N+黄色	シルト質粘土	

%	土色	土質	備考
1a	5YV1/1 黄色	粘土質シルト	断面構造の変化なし 汽水ゾーンを横断せしもの 水浸堆積
1b	2.5Y4/1 黄褐色	シルト質粘土	IV・V带を中心とする少量化堆積 水浸堆積
1c	2.5Y3/1 黄褐色	シルト	IV・V带を中心とする少量化堆積 水浸による堆積
2	3GY8/6 明黄褐色	シルト	IV・V・V'・VI帶をアッカバガリ合む 人為堆積
3	3GY8/5 黄褐色	シルト質粘土	断面構造の変化あり 水浸堆積(浅水)
4a	2.5Y7/1 黄褐色	シルト質粘土	IV・V帯を中心とする少量化堆積
4b	2.5Y7/1 黄褐色	粘土	IV・V帯を中心とする少量化堆積
5a	2.5Y4/1 黄褐色	粘土質シルト	IV・V・VI・VII帶を中心とする多量化堆積
5b	3Y3/1 黄色	粘土	しまなし。自然堆積
6a	2.5Y7/4 黄褐色	粘土	IV・V带を中心とする少量化堆積
6b	3Y3/1 黄色	粘土	既述にオーブ状粘土を含む自然堆積
7a	10Y8/5/2 黄褐色	シルト質粘土	IV・V帶を中心とする少量化堆積
7b	10Y8/5/2 黄褐色	シルト質粘土	堆積を横断せしもの 水浸堆積
7c	2Y4/2 オーブ状黑色	シルト質粘土	水浸構造の変化なし 多量化
9	3GY7/1 黄色	粘土	多量化。既述のものと並んである。各種の透水性の層がある。水成堆積(水浸)。
10a	2.5Y4/2 黄褐色	シルト	IV帶を横断せしもの 布陣土
10b	2.5Y5/2 黄褐色	シルト	堆積を横断せしもの 含む 布陣土
10c	2.5Y5/2 オーブ状黑色	シルト質粘土	堆積を横断せしもの 布陣土

第3図 北壁断面図

積を示している。遺物は1層から19世紀代の陶器（第5図3・5）・弥生土器（第5図6）、5層から13世紀代？の龍泉窯系の青磁（第5図4）9層から16世紀以降の瓦質土器（第5図2）・須恵器・土師器・拳大の疊・かけや？（第5図1）が出土している。また自然遺物で8・9層からオニグルミ・ヒメグルミの核、ヒシの実、ミチャナギ？（タデ科）・シソ科の種子などの植物遺存体が出土している。



第4図 脇地高まりからのエレベーション図

6 調査のまとめ

(1) SD-1 堀跡の変遷

掘削の時期は底面付近から16世紀以降の瓦質土器が出土していることから、16世紀以降ととらえられる。その後、10層の堆積状況から掘削後すぐに壁際に崩落があったことが分かる。8・9層からヒシの実などの水性の植物が出土すること、炭化物層がラミナ状に堆積することから、底浸いされずに水が溜まっていた（水堀）ことがわかる。7層から4層は4段階の埋め戻しがあったことが示唆されるが、各層の下部の自然堆積層が薄く時期的に短い期間の変遷で上部の埋め戻しの土も各層似通っているので作業工程の違いとみたい。次の3段階でも水が溜まっており、2段階でもう一度埋め戻しを行っていることがわかる。そして、1段階でも開口しており、堀あるいは区画溝などの機能を有していたと考えられる。1層から19世紀代の陶器が出土しており、少なくともそのころまで開口していたことが分かる。明治初頭の「陸前国名取郡郡山村村絵図」（宮城県図書館蔵）では、調査区を含む南北に延びる低地部分は水路になっていたことがわかる。（仙台市教育委員会：1993）

(2) SD-1 堀跡の形態

東側の立ち上がり部分にテラス状の段差を有する。10層の堆積がこの段差よりも上位にきており、この段差の上まで水が張っていたと考えられる。よって、通路としての犬走りなどの防護施設ではなく、堀掘削時の作業能率を考えてのものととらえたい。

本調査区の南側の第1次調査試掘1地点ではV字形の幅5m以上の大堀跡が、第1次調査試掘2地点では堀障子をもつ幅10mの堀跡が検出されている。第1次調査1・2区の内掘に対して2重あるいは時期違ひの外堀ととらえられている。今回検出された堀跡は試掘2地点の延長線上のものであり、外堀の内側に当たる部分ととらえられる。試掘2地点では底面レベルが標高約6mなので、当調査区の方が高く、北から南の傾斜が想定される。

当調査区	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
第1次調査 試掘2地点	3	4	5	6	7	8	9	10・11	12・13	

表1 層対応表

また、層の対応は凡そ表2のようになる。

第1次調査検出の内堀の掘削が16世紀後半から17世紀初頭ととらえられている（仙台市教育委員会：1993）。今回発見の堀跡が内堀に対する外堀と想定できうるので、掘削の時期も16世紀以降の中でも、内堀と同様16世紀後半から17世紀初頭の時期と考えられる。

(3) まとめ

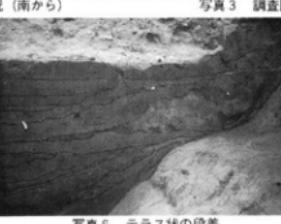
- ・今回の調査で第1次調査試掘2地点で検出した水堀跡の延長部分の東側立上がり部分を検出した。16世紀後半から17世紀初頭の掘削で2回以上埋め戻しきれていますが、19世紀代以降まで、開口していたことがわかる。
- ・第1次調査の縄文時代後期の遺物包含層と対応する層を検出した。

参考文献

- 仙台市教育委員会 1993 「北日城跡現地説明会資料」
 小川淳一 1997 「近世 北日城跡」『仙台市史 特別編2考古資料』仙台市史編さん委員会
 紫桃正隆 1973 「史料 仙台領内古城・館」



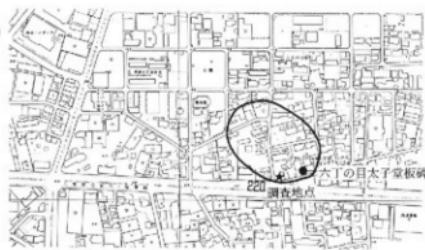
第5図 遺物実測図・写真



VII 北屋敷遺跡（第2次調査）

I 調査要項

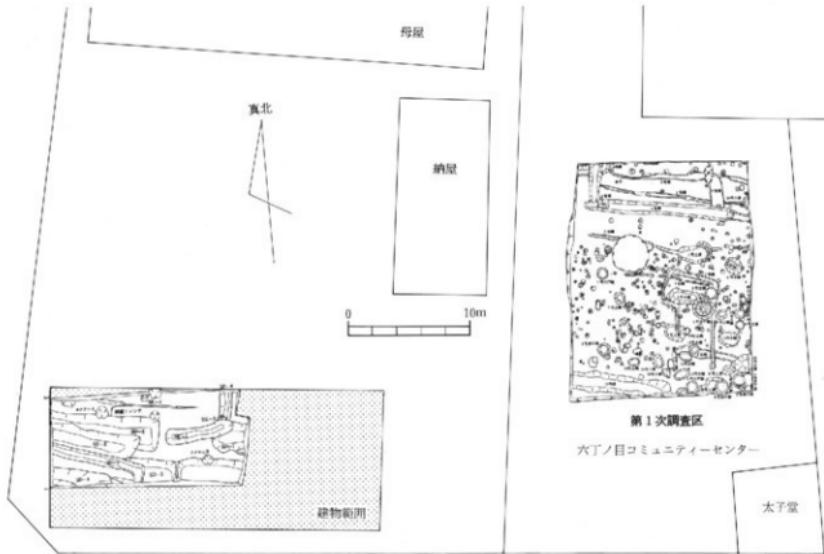
遺跡名	北屋敷遺跡（宮城県遺跡番号 01220）
調査地点	仙台市若林区六丁の目中町14-1
調査原因	共同住宅建設
調査対象面積	270m ²
調査面積	116m ²
調査期間	平成10年9月28日～10月9日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	工藤哲司 竹田幸司 結城慎一
調査参加者	秋葉泰徳 阿部美香 板橋祝子 内田節子 大友とし子 奥山妙子 奥山祐子 佐竹志女子 佐藤愛子 佐藤すみ子 佐藤弘子 永野くみ子 鈴木美代子 水戸智 武藤季鷹 渡部純子
申請者	（有）山寿



第1図 周辺の地形

2 遺跡の位置と環境

北屋敷遺跡は、仙台市の東部、県道仙台塩釜線沿いにあり、六丁の目交差点より東方約1km地点に位置している。標高は約5mで、七北田川と広瀬川の間に広がる沖積平野上の微高地に立地している。区画整理以前の小字名は、「六丁の目字北屋敷」である。それと同様近隣にも、東方0.3kmにある「明屋敷」を始め、「屋敷」「鹿子屋敷」「中



第2図 調査区配置図

星敷」「札屋敷」など、屋敷の所在を示す小字名が多数見られる。また、区画整理以前は「居久根」と呼ばれる屋敷林もよく残り、古き農村集落の景観をとどめていた。昭和53年の第1次調査では、近世を主体とする掘立柱建物跡・溝跡・土坑・井戸跡などの遺構群が検出された。これらの遺構については、道路跡を挟んで二つの屋敷があった可能性も指摘されている（佐藤：1995）。また、出土遺物には平安時代までさかのぼるものも見られる。第1次調査地点の南東側には六丁の目太子堂板碑がある。

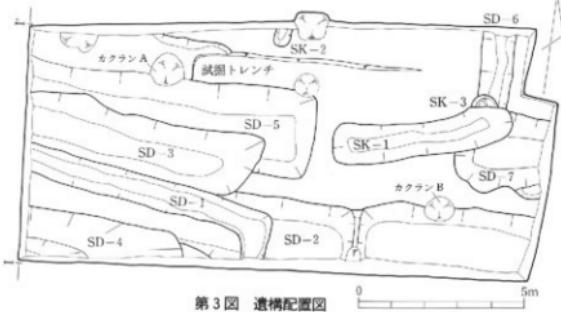
3 調査の方法

平成10年6月12日付で、有限会社山寿より、上記地内における鉄筋コンクリート3階建共同住宅建設にともなう協議書が提出された。この場所は北屋敷遺跡の南東部にあり、昭和53年度実施の第1次調査調査区の西方30m付近に位置していることから、仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、建築部分について確認調査を行なった。その結果、溝跡などが確認されたので、再度申請者と協議し、平成10年8月25日付で発掘届が提出され、本調査を実施することになった。調査は、建物予定範囲に16m×7.3mの調査区を設定して行った。

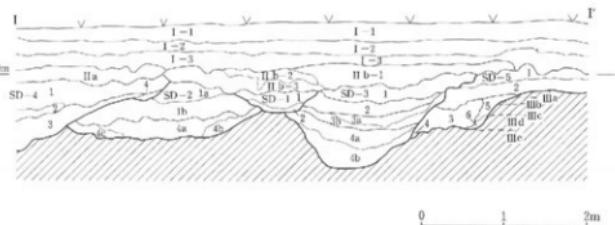
4 基本層序

I層は現代の畠の耕作土で西壁で3層に分かれる。南壁は現代の建物の基礎による搅乱である。遺物は17～19世紀の近世陶磁器・土師質土器小皿・土師器20点（註1）・須恵器3点・焼瓦1点等の他、銅版転写の染付けや現代のガラス瓶が出土している。II層は近代の整地層で、西壁で大別。

3層細別6層に分かれる。遺物は17～18世紀の近世陶磁器・土師質土器小皿・土師器10点・須恵器1点・古代瓦1点・明治23年の菊5錢白銅貨等が出土している。II層上面からの搅乱から19世紀以降の近世陶磁器・土師



第3図 遺構配置図



第4図 西壁断面図

遺構	No.	土色	土性	階	考
新	I-1	YTR2/2 黒褐色	透水シルト	Ⅱ	市町村分合後、現代の耕作土
	I-2	YTR2/3 黒褐色	シルト質砂	Ⅱ	シルト質砂合せ、耕作土
	I-3	YTR2/1 黑褐色	シルト	Ⅱ	黒褐色土を含む、ガラス瓶（ホーロー）等、人為的擾乱
	II-a	YTR3/4 黑褐色	シルト質粘土	Ⅲa	黒褐色土を含む、人為的擾乱
	II-b	YTR3/2 黒褐色	シルト質粘土	Ⅲb	黒褐色土を含む、人為的擾乱
本	III-a	YTR3/1 黑褐色	シルト質粘土	Ⅲa	黒褐色土を含む、人為的擾乱
	III-b	YTR3/2 黒褐色	シルト質粘土	Ⅲb	黒褐色土を含む、人為的擾乱
	III-c	YTR3/1 黑褐色	シルト質粘土	Ⅲc	黒褐色土を含む、人為的擾乱
	III-d	YTR3/2 黑褐色	シルト質粘土	Ⅲd	黒褐色土を含む、人為的擾乱
	III-e	YTR3/2 黑褐色	粘土	Ⅲe	粘土
Ⅲ	III-f	YTR3/1 黑褐色	粘土	Ⅲf	粘土
	III-g	YTR3/1 黑褐色	粘土	Ⅲg	粘土
	III-h	YTR3/1 黑褐色	粘土	Ⅲh	粘土
	III-i	YTR3/2 黑褐色	粘土	Ⅲi	粘土
	III-j	YTR3/2 黑褐色	粘土	Ⅲj	粘土
SD-1	1	YTR3/1 黑褐色	シルト質粘土	Ⅲ	黒褐色土を含む、人為的擾乱
	2	YTR3/2 黑褐色	粘土	Ⅲ	粘土を含む、小成窓
	3	YTR3/1 黑褐色	シルト質粘土	Ⅲ	粘土を含む、人為的擾乱
	4	YTR3/2 黑褐色	粘土	Ⅲ	粘土を含む、人為的擾乱
	5	YTR3/1 黑褐色	粘土	Ⅲ	粘土を含む、人為的擾乱
SD-4	3	YTR3/2 黑褐色	粘土	Ⅲ	粘土を含む、人為的擾乱
	4	YTR3/2 黑褐色	粘土	Ⅲ	粘土を含む、人為的擾乱
	5	YTR3/2 黑褐色	粘土	Ⅲ	粘土を含む、人為的擾乱
	6	YTR3/2 黑褐色	粘土	Ⅲ	粘土を含む、人為的擾乱
	7	YTR3/2 黑褐色	粘土	Ⅲ	粘土を含む、人為的擾乱

遺構	No.	土色	土性	階	考
SD-1	1	YTR2/2 黒褐色	粘土質シルト	Ⅳ	セモリ土
	2	YTR2/1 黒褐色	シルト質粘土	Ⅳ	セモリ土
	3a	YTR3/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	3b	YTR3/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	3c	YTR3/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
SD-2	4	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土
	5a	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	5b	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	5c	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	5d	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
SD-3	6	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	7	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	8	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	9	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	10	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
SD-4	11	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	12	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	13	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	14	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）
	15	YTR2/1 黒褐色	粘土	Ⅳ	セモリ土を含む（土色）

第4図 西壁断面図

器 2 点・焼瓦 1 点が出土している。III 層は遺構検出面で粘土と砂の自然堆積層である。III 層以下では遺物の出土はなかった。

5 発見遺構と出土遺物

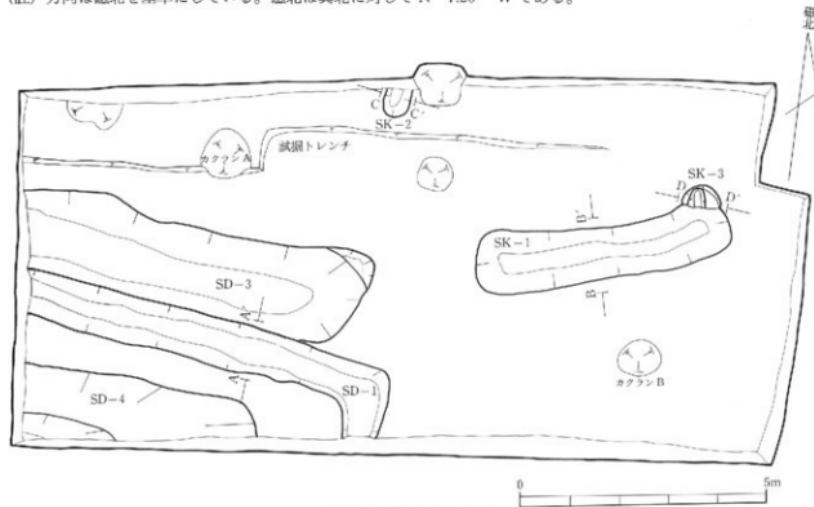
主な発見遺構としては溝跡 7 条・溝状土坑 1 基・土坑 2 基がある。切り合い関係及び遺物から便宜的に新しい方を A 期（第 5 図）古い方を B 期（第 7 図）とした。

(1) A 期

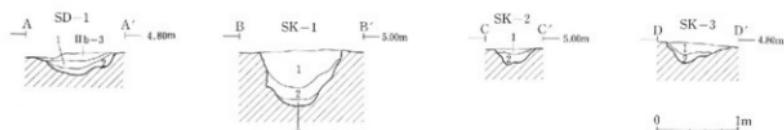
SD-1 溝跡

調査区西側で検出した溝跡で、長さ 9 m 分を確認した。調査区を東西方向 W-7°-N (註) に延び、調査区中央で南に L 字状に折れ曲がる。SD-2・3 を切っている。上幅 80cm～100cm・底面幅 40cm～50cm・深さ 40cm～55cm を計る。底面はほぼ平坦で西に向かって緩やかに傾斜している。断面形は逆台形である。堆積土は、2 層に分けられる。1 層は黒褐色シルト質粘土の自然堆積層、2 層は粘土を主体とした砂を含む水成堆積である。18～19世紀の近世陶磁器・土師器 5 点・漆器の漆膜が出土している。

（註）方向は磁北を基準にしている。磁北は真北に対して N-7.20°-W である。



第 5 図 A 期遺構平面図



遺構	名	土 色	土 性	備 考	遺構	名	土 色	土 性	備 考
SK-1	1 10YR 4/2 黄褐色	粘土	ブロック状に堆積。人為堆積(埋め戻し)	田原を西側に少許含む。人為堆積(埋め戻し)					
	10YR 4/2 に近い黄褐色	粘土質シルト							
	2 7.5Y 3/1 オリーブ褐色	粘土							
溝跡	3 7.5Y 2/1 ターコイズ色	粘土	灰色(底層)泥炭化(底部)水成堆積(上半)	田原を西側に少許含む。人為堆積(埋め戻し)					
SK-2	1 10YR 4/2 黄褐色	粘土質シルト	田原を西側に少許含む。人為堆積(埋め戻し)						
	2 10YR 4/2 黄褐色	シルト質粘土							
SK-3	1 10YR 4/2 黄褐色	シルト質粘土	田原を西側に少許含む。人為堆積(埋め戻し)						
	2 10YR 4/2 黄褐色	粘土							

第 6 図 A 期遺構群断面図

SD-4溝跡

調査区西側で検出した溝跡で、長さ5m分を確認した。調査区を東西方向W-7°-Nに延び調査区中央でとぎれるかL字状に折れ曲がる。SD-2を切っている。SD-1との切り合いは直接はないが、SD-1の上部にあるIIb層に切られていることから、SD-1より古いと思われる。SD-3との関係は不明である。方向性からSD-3との関連性も考えられる。南側が調査区外のため全体の規模は不明であるが、上幅180cm以上・底面幅不明・深さ80cm以上を計る。断面形は逆台形と思われる。堆積土は、4層に分けられる。1・2層はブロック状に堆積する埋め戻しの土で、3・4層は植物遺体を含む水成堆積である。18世紀代の近世陶器と中世陶器・土師器1点・石臼?が出土している。

SD-3溝跡

調査区西側で検出した溝跡で、長さ7m分を確認した。調査区を東西方向W-7°-Nに延び、調査区中央でとぎれる。SD-2・5を切り、SD-1に切られる。上幅180cm~200cm・底面幅70cm~90cm・深さ120cm~140cmを計る。底面はほぼ平坦で、西に向かって緩やかに傾斜している。断面形は逆台形である。堆積土は、大別4層細別6層に分けられる。1・2層は均一な土質の自然堆積層で、3層は砂を縞状に含む水の流れによる堆積で、4層は植物遺体を含む水成堆積である。17~19世紀の近世陶磁器・土師器4点・須恵器2点・焼瓦1点・古代瓦4点・砾石・漆器・木製品多数（下駄・桶樽類・横樋等）・板材が出土している。木製品L-28（第12図6）の下から拳大の礫が2個並ぶように出土している。（写真16・17）

SK-1溝状土坑

調査区東側で検出した調査区を東西方向E-15°-Nに延びる溝状の土坑である。SK-2・SD-6・7を切っている。規模は、長軸方向で5.5m、短軸方向で1.0mで、底面幅40cm~50cm・深さ70cmを計る。断面形はU字形である。堆積土は、3層に分けられる。1層はブロック状に堆積した埋め戻しの土で、2層は砂を縞状に含む水成堆積、3層は基本層ブロックを含む崩落土あるいは埋め戻しの土である。1層から中世陶器・土師器3点が出土している。

SK-2土坑

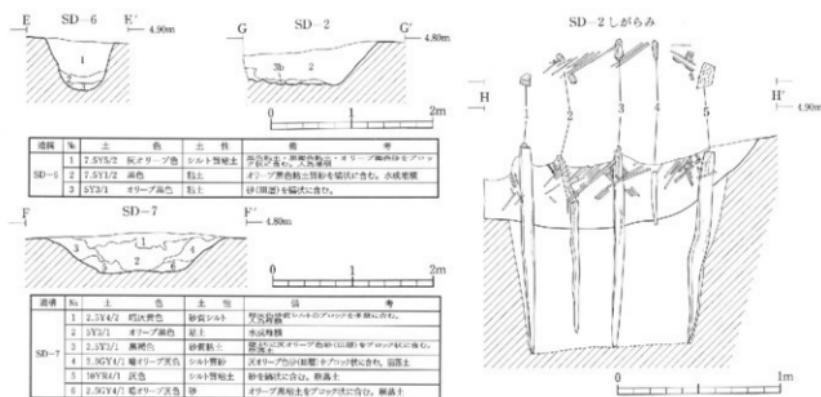
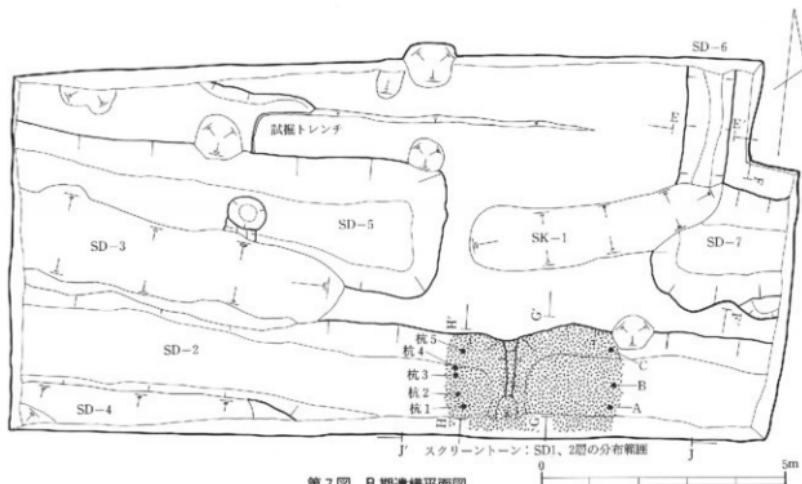
調査区中央の北壁際で部分的に検出した土坑である。調査区外へ延びるため長楕円形を呈するのか、溝状に延びるのか不明である。方向はN-7°-Eであり、SD-3の方向と直交する。規模は、長軸方向で55cm以上・短軸方向で50cm、底面幅20cm・深さ45cmを計る。断面形は偏平なU字形である。堆積土は、2層に分けられる。基本層III層をブロック状に含むが自然堆積と考えられる。出土遺物はない。

SK-3土坑

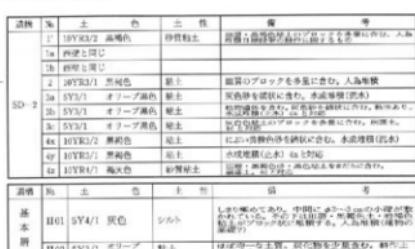
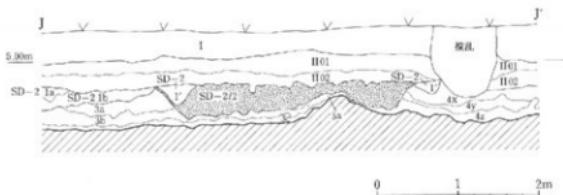
調査区東側で検出した土坑である。SK-1に切られSD-6を切っている。SK-1に切られているため形状は不明だが、円形を呈すると考えられる。規模は、長軸方向で80cm・短軸方向で50cm以上、深さ25cmを計る。断面形は偏平なU字形である。東側がテラス状になる。堆積土は、2層に分けられる。1層はブロック状に堆積した埋め戻しの土で、2層は炭化物を含む自然堆積の土である。遺物は土師器が1点出土している。

(2) B期**SD-5溝跡**

調査区西側で検出した溝跡で、長さ9m分を確認した。調査区を東西方向E-0°-Nに延び、調査区中央でとぎれる。SD-3に切られる。上幅260cm・底面幅80cm~130cm・深さ90cmを計る。底面はほぼ平坦で西に向かって緩やかに傾斜している。中央付近にピット状の落ち込みがある。断面形は逆台形である。北側にテラス状の高まりがあり調査区外に立上がりがある。堆積土は、6層に分けられる。1・2層はブロック状に堆積する人為堆積層、3・4層は自然堆積層、5・6層は基本層ブロックを含む崩落土である。2層から中世陶器・土師器17点・古代瓦1点・木製品（下駄等）・板材が出土している。



第8図 B期遭構断面図及びSD-2 しがらみ平面図



SD-7溝跡

調査区東側で検出した溝跡で、長さ2.5m分を確認した。調査区を東西方向E-0°-Nに延び調査区中央でとぎれる。SK-1に切られる。上幅250cm・底面幅80cm~100cm・深さ50cmを計る。底面はほぼ平坦で東に向かって緩やかに傾斜している。断面形は逆台形である。堆積土は、6層に分けられる。1層はブロック状に堆積する人為堆積層、2層は自然堆積層、3・4・5・6層は基本層ブロックを含む崩落土である。土師器7点・漆器・木製品（曲物等）・板材が出土している。SD-5と堆積土・方向が類似し、位置的にも一連のもので、中央部分が通路になると想定できる。

SD-6溝跡

調査区東側で検出した溝跡で、長さ2.6m分を確認した。調査区を南北方向N-0°-Eに延びる。SK-1・3に切られる。上幅90cm~100cm・底面幅40cm~50cm・深さ60cmを計る。底面はほぼ平坦で南に向かって緩やかに傾斜している。断面形はU字形である。堆積土は、3層に分けられる。1層はブロック状に堆積する人為堆積層で、3・2層は自然堆積層である。出土遺物はない。SD-7との切り合いは不明であるが、層が類似し、底面の標高もほぼ同じであることとSD-7の底面が直角に屈曲することから一連のものと考えられる。

SD-2溝跡

調査区南側で検出した溝跡で、長さ15m分を確認した。調査区を東西方向E-2°-Sに延びている。SD-1・3・4・5に切られる。南側が調査区外のため全体の規模は不明であるが、上幅210cm以上・底面幅100cm~110cm・深さ90cmを計る。底面はほぼ平坦で西に向かって緩やかに傾斜している。断面形は逆台形である。中央部に馬の背状の高まりが溝を横断している。堆積土は、大別4層細別10層に分けられる。1層は基本層をブロック状に含む人為堆積で、2層はブロック状に堆積した埋め戻しの土でしきりがあり、3・4層を切るような形で堆積している。3層は高まり部分の東側で確認された植物遺体を含む水成堆積で、4層は高まり部分の西側で確認された層で基本的に3層と同じである。17~18世紀の近世陶磁器・土師器27点・須恵器4点・古代瓦3点・砥石・石臼・古窓水鏡・漆器・木製品（木鉢等）・板材が出土している。特に3層は18世紀代の陶磁器が纏まって出土した。尚、中央部の高まり部分の西側で溝を塞止めるように設置された「しがらみ」が検出された。この構造は杭を打ち付けて、直径1cm前後のササタケ類の茎で絡めている。高まりの反対の東側からも「しがらみ」に関係すると考えられる杭列が検出されている。この部分の北側がSD-5とSD-7の間の通路と想定される部分になる。杭は角材と丸材が交互に並ぶ。

6 調査のまとめ**(1) 遺構の切り合いと年代について**

遺構の重複関係は表4のようになる。

SD-1の1層から19世紀(幕末)代の堤岸の擋鉢(写真4-5)、SD-3から19世紀代の瀬戸美濃産の染付蓋(写真4-8)等が出土しており、遺構の年代もその頃ととらえられる。SD-4から18世紀代の肥前系の陶器(写真4-22)、SK-1から中世陶器(写真5-1・2)が出土しているが、切り合い関係から19世紀代と考えられる。SD-



写真1 SD-2とSD-5、SD-7の間の通路

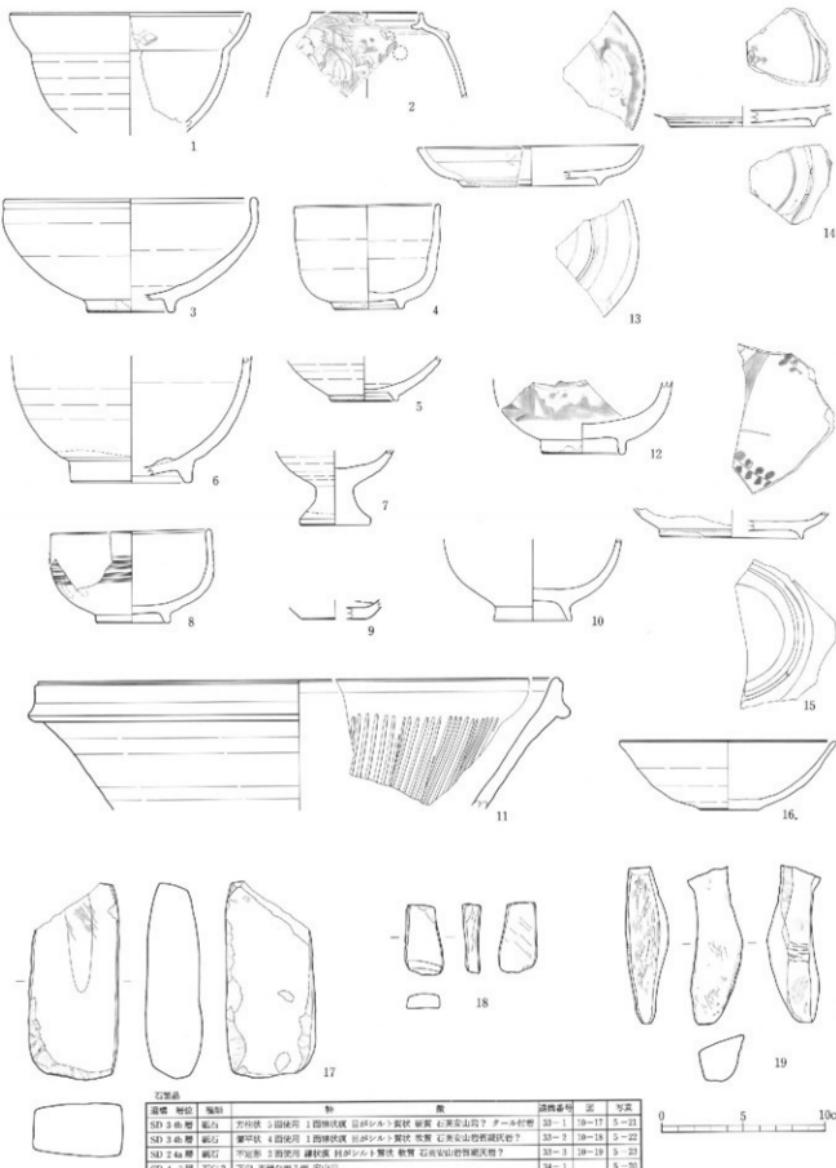


写真2 SD-2「しがらみ」アップ



写真3 作業風景

VII 北尾敷遺跡（第2次調査）



第10図 出土遺物実測図（近世陶磁器・土師器・砥石）

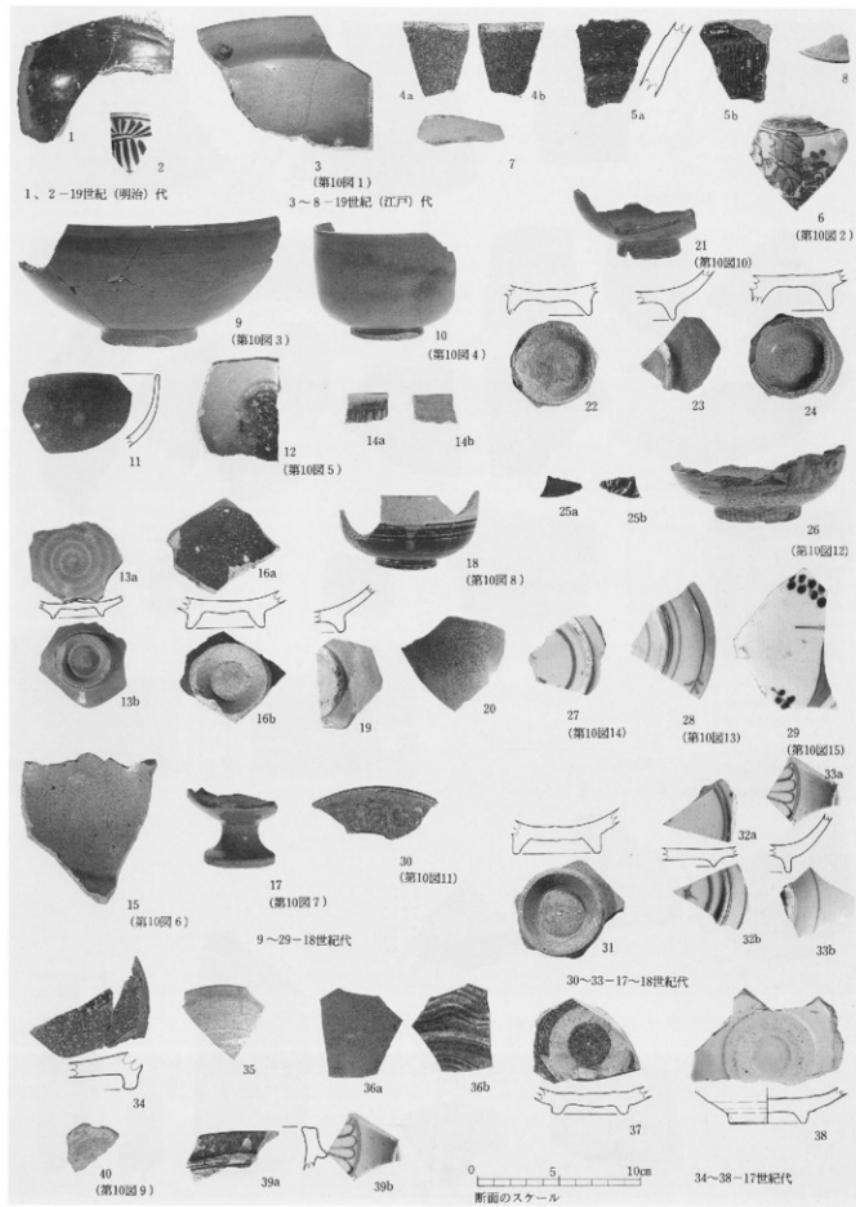


写真4 近世陶磁器

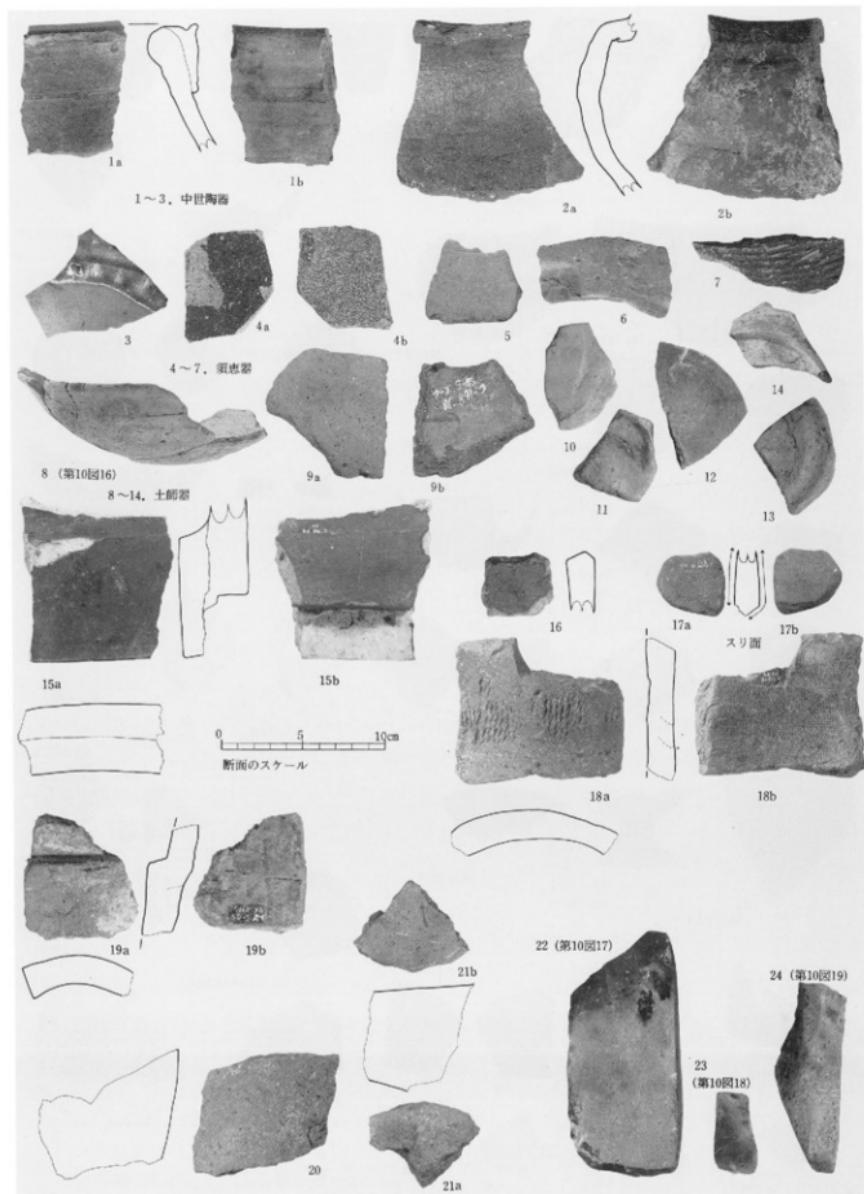
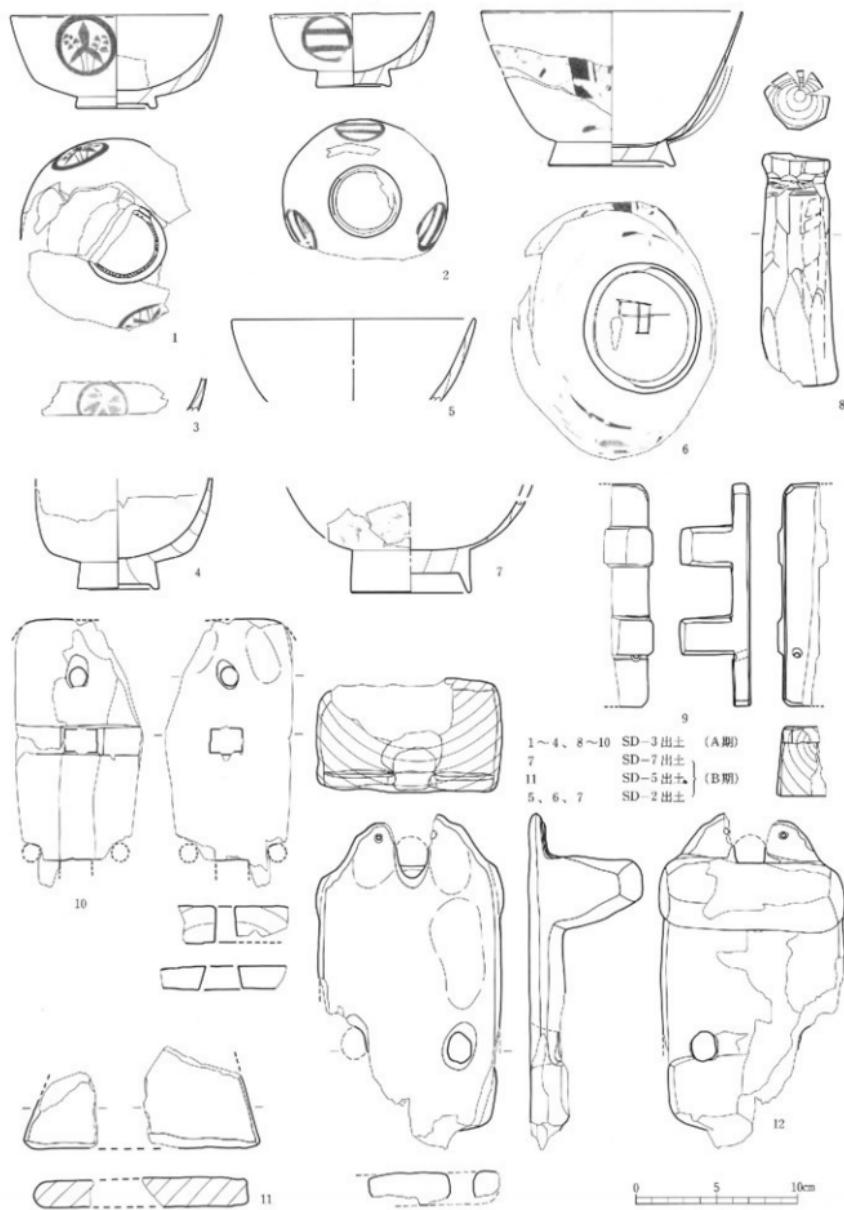


写真5 中世陶器・須恵器・土師器・瓦・石製品

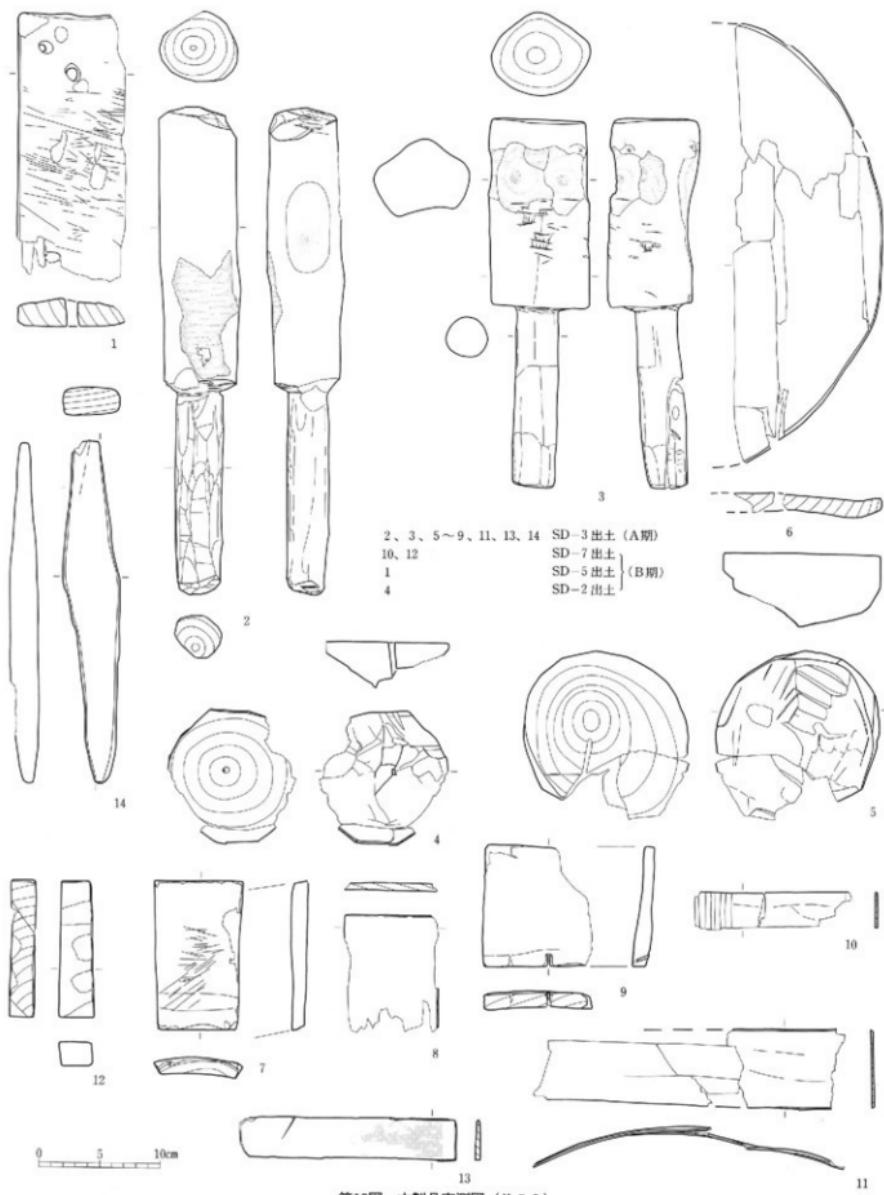
表1 近世陶磁器遺構別觀察表

VII 北原敷遺跡(第2次調査)

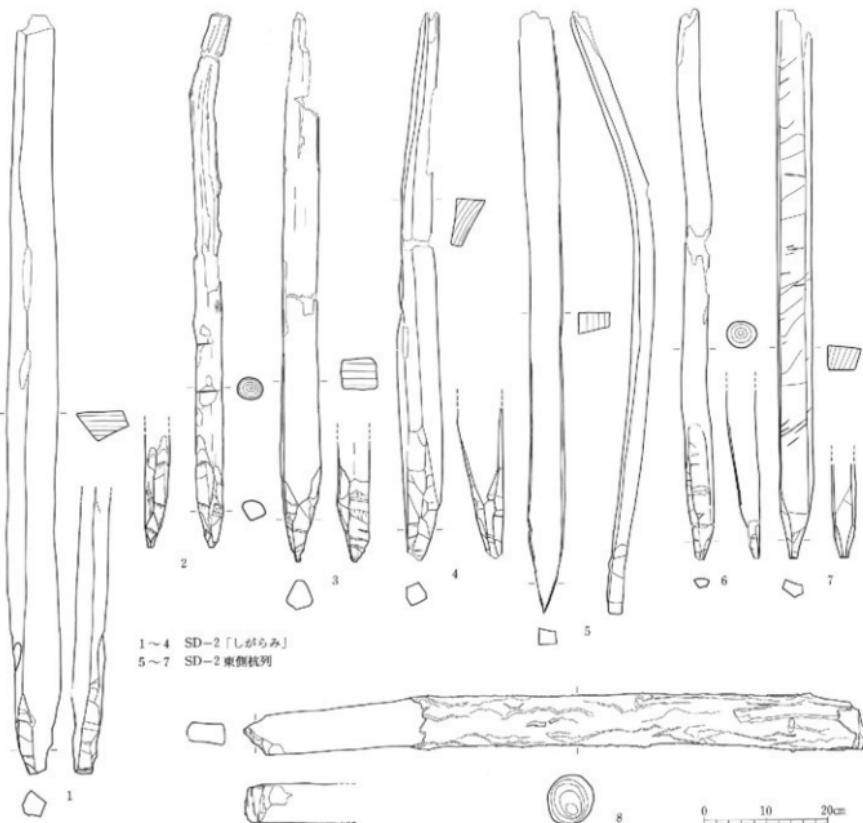
遺構	層	種類	遺構	施主	時 期	備 考	遺物番号	回	写真
基本層		廻籠敷付 金銅	廻籠美濃	15e 宋以降	削鉛鋸歯	2-5			
		廻籠敷付 錫銅系	廻籠美濃	15e 宋以降	削鉛鋸歯	2-6			
		廻籠	銅(井)	15e(鉢)	白磁石器の灰化(10Y1/1灰白)隙に所附(動物)	1-1	10-3	4-3	
		廻籠敷付 上工(金銀)	肥前	15e(鉢?)	往(?)の鉢底 番文	2 3	10-3	4-6	
		廻籠敷付	廻籠美濃	15e 以降		3-5			
		廻籠敷付 小坪	廻籠美濃	15e 以降		3-5			
		廻籠	肥前	15e(鉢?)	往(?)の鉢底 番文	2-2			
		廻籠敷付 丸田	肥前	15e(鉢?)	往(?)の鉢底 番文	3-1	10-13	4-28	
		廻籠	肥前	15e(鉢?)	外縁斜角丸底(5Y1/1灰白)内腹青緑釉口(10G5/1灰白)	1-2		4-35	
		廻籠	肥前	15e 代	鉢形(2.5Y8/2灰白)6-8上縁合	2-1		4-34	
		廻籠敷付 丸田	肥前	江戸時代	内腹墨	2-4			
基本層	II層	廻籠	大納門	15e 以降	鉢形(4G7/1 明神焼)口(リニア)底 番柄か?	5-1	10-3	4-9	
		廻籠	小箱	15e 宋以降	口(リニア)底 番柄か?	6 2		4-15	
		廻籠	肥前	15e 代後半	口(リニア)底 番柄	6-3			
		廻籠	肥前	15e 以降	透明白釉(10Y1/1灰白)透付露窓	2-2		4-25	
		廻籠敷付 金田	肥前	17-18c	高台内側あり	6-5		4-32	
		廻籠敷付 滅	肥前	17-18c	見込み墨花文	6-6		4-33	
		廻籠	肥前	17c 後半	新無口(所附)(5Y8/4 に付し赤物)見込み蛇口(5Y8/4)共付付口	6 1		4-37	
		廻籠	肥前	17c 後半	鉢形(2.5Y8/2 緑青色)底上部白(山野(黄石・石窓))が入る	6-4		4-39	
		廻籠敷付 丸田?	肥前	江戸時代	鉢(10G5/2/明神焼)	6 7			
		土器實付 金田?		江戸時代		6-9	10-9	4-46	
カランA		廻籠	堺	15e 以降	なまご輪 动土が黒く(7.5Y1/1 オリーブ墨)山砂(真紅・石窓)を含む	7-1		4-1	
カランB		廻籠小盆	廻籠美濃	15e 以降		8-1		4-2	
SD 1	1層	廻籠	肥前	15c	山砂(10R2/1 黄赤)地上に山砂を含む 番柄か?	8-2			
SD 2	4層	廻籠	肥前	15c	見込みカシュー印の瓦介在 墓石内蔵(2.2文字)	9 2	10-14	4-27	
SD 3	1層	廻籠	堺	15c	鉢形(10Y1/1灰白)	16-1		4-22	
	2層	廻籠	肥前	15c	鉢形(5Y8/2 深窓)	19-1		4-19	
	4a層	廻籠	肥前	15c	廻籠(10R3/2/赤青色)込込み口断付 2つ 口内トキン	11-1	10-7	4-17	
	4b層	廻籠	肥前	15c	鉢形(5Y8/2 深窓)	11-2		4-16	
	5層	廻籠	肥前	15c	鉢形(5Y7/2 深窓)	11-3			
	6層	廻籠	肥前	15c	鉢形(5Y7/2 深窓)泥付	12-2		4-23	
	7層	廻籠	肥前	15c	鉢形(5Y8/2 深窓)泥付	13-1		4-24	
	8層	廻籠	肥前	15c	鉢形(10Y1/1灰白)	12-1	10 12	4-26	
	9層	廻籠	肥前	15c	新物(10Y1/2/リニア)底付	12-3		4-36	
	10層	廻籠	肥前	15c	見込みカシュー印付付口付	12 4		4-38	
	11層	廻籠	山砂(真紅)	15c(帯?)	鉢形(2.5Y8/4/赤)在墨無(10H1/4灰白)の裏付掛け	13-2		4 4	
	12層	廻籠色絵	肥前	15c(帯?)	新物(5Y7/2 深窓)泥付は朱色に似るより疎密	13-4		4-7	
	13層	廻籠敷付	肥前	15c	鉢形(5Y8/2 深窓)	21-1			
	14層	廻籠	肥前	15c	鉢形(5Y8/2 深窓)	21 2		4-8	
	15層	廻籠	肥前	15c	新物(10Y1/2/リニア)底付	13-1	10-11	4-30	
	16層	廻籠	肥前	15c	鉢形(10Y1/2/リニア)底付口(10H1/2/リニア)	14-3		4-31	
SD 2	2層	廻籠敷付	肥前	15c	草花文(10H1/2/リニア)底付口(10H1/2/リニア)	18-1	10-15	4-29	
	3層	廻籠	肥前	15c	新物(2.5Y8/4/赤)在墨無(10H1/4灰白)の裏付掛け	18-2			
SD 4	1層	廻籠	肥前	15c	新物(2.5Y8/4/赤)在墨無(10H1/4灰白)	17-1	10-4	4-10	
SD 5	2層	中型廻籠	肥前	15c	新物(2.5Y8/4/赤)在墨無(10H1/4灰白)	17 6		4-11	
SD 6	2層	中型廻籠	肥前	15c	新物(2.5Y8/4/赤)在墨無(10H1/4灰白)	20-1			
SD 7	2層	中型廻籠	肥前	15c	新物(2.5Y8/4/赤)在墨無(10H1/4灰白)	17-9			
SD 8	1層	廻籠敷付	肥前	15c	新物(2.5Y8/4/赤)在墨無(10H1/4灰白)底付	2-1		4-1	
	2層	廻籠	肥前	15c	新物(2.5Y8/4/赤)在墨無(10H1/4灰白)底付	17-7	20-16	4-21	
	3層	廻籠	肥前	15c	新物(3Y8/2/灰色)底付	17-7		4-21	
	4層	廻籠	肥前	15c	新物(3Y8/2/灰色)底付	17-11			
	5層	廻籠敷付	肥前	15c	見込み墨花文	17-12			
	6層	廻籠	肥前	15c	新物(10Y1/2/リニア)底付	19 1	10-5	4-12	
表2 中世陶器・須恵器・土師器・瓦窓察表									
遺構	層	種類	遺構	施主	時 期	備 考	遺物番号	回	写真
SK 1	1層	中型廻籠	小型廻	自立窓	15c(帯)~16c(帯)	受け口 瓦片插入	22-1		5-2
SK 1	1層	中型廻籠	堺	15c	後半	挽り窓(?) 瓦片	22-2		5-1
SD 4	2層	中型廻籠	製	古戸	14~15c	窓跡(G3Y7/1/リニア)~(5Y7/4/リニア)	16 2		5-3
SD 5	2層	中型廻籠	兔脛	古戸	中世	瓦窓 内面窓沿	20-1		
SD 6	2層	中型廻籠	要?	六戸窓?	中世	瓦窓 内面窓沿	17-9		
SD 6	4層	廻籠敷付	要?	廻籠	古代	瓦窓動(?)	4 1		2-4
SD 5	4層	廻籠	要?	六戸窓?	古代	ヘラカット上げ	21-3		5-6
SD 4	4層	廻籠	要?	東隅地?	古代	ロフカット	25-3		5-5
SD 5	4層	廻籠	要?	要?	古代	ヘリカット	24-1		5-7
SD 6	8層	ロフカット	要?	六戸窓?	古代	瓦窓(瓦起)瓦窓	26-1	10-16	5 8
SD 5	4層	ロフカット	要?	六戸窓?	古代	瓦窓(瓦起)瓦窓	53		5-9
SD 6	4層	ロフカット	要?	六戸窓?	古代	瓦窓(瓦起)瓦窓	40-1		5-10
基本層	II層	ロフカット	环	平安	瓦窓 窓枠(?)の窓	44		5-11	
SD 5	3層	ロフカット	环	平安	瓦窓	60		5-12	
SD 2	10層	ロフカット	瓦付付	平安	窓口をやり付ける 瓦付窓	26-2		5-13	
SD 2	14層	ロフカット	瓦付付	平安	窓口をやり付ける 瓦付窓	45		5-14	
表3									
遺構	層	種類	若 延	時 期	備 考	遺物番号	回	写真	
カランA		丸瓦	裸丸	近世	四隅ツバキ? 白面平滑なハナナゼ ツバキに瓦面を施す	27-1		5-15	
SD 2	1層	丸瓦	平丸	近世	突出出張	30-2		5-16	
基本層	II層	丸瓦	平丸	平安	四隅ツバキ? 例示する瓦窓(?) 手筋付	35-2		5 17	
SD 3	4層	丸瓦	丸瓦	平安	四隅ツバキ? 手筋付	30-1		5-18	
SD 6	4層	丸瓦	丸瓦	平安	四隅ツバキ? ハナナゼ	33-3		5-19	



第11図 漆器・木製品実測図（その1）



第12図 木製品実測図（その2）



第13図 桁穴測定図

表3 漆器・木製品観察表

表3 漆器 木製品 部位	種別	特 徴		遺物番号	回	写真
		外裏色漆に赤色漆で文(油に植物)内裏色漆に赤色漆横木柱目?板様の向きから簾の可能性あり	外裏地に黒色漆、内裏地に赤色漆、高台面くロクロ抜き込みが複数あり、模木柱目			
SD-2 3層 漆器 柱	外裏地に黒色漆、内裏地に赤色漆、高台面くロクロ抜き込みが複数あり、模木柱目	L-1 11-3	6-3			
SD-3 4層 漆器 柱	外裏色漆に赤色漆文(模二引目)内裏地に赤色漆、高台面くロクロ抜き込みが複数あり、模木柱目	L-2 11-4	6-4			
SD-3 4層 漆器 柱	外裏色漆に赤色漆文(模二引目)内裏地に赤色漆、高台面くロクロ抜き込みが複数あり、模木柱目	L-4 11-2	6-2			
SD-3 4層 漆器 柱	外裏色漆に赤色漆文(輪に立合表目)内裏地に赤色漆、高台面く	L-3/5 11-1	6-1			
SD-2 3層 漆器 柱	内に気吹が残なっている模あり、剥れ方に複数 模木柱目 L-4と形態が似似し柱内に納まる	L-6 11-5				
SD-2 3層 漆器 柱	外裏地、裏地漆に赤色漆の文様?、内裏地、裏地漆に赤色漆、模木柱目	L-7 11-6				
SD-7 2層 漆器 柱	外裏地に黒色漆、内裏地に赤色漆、高台面に黒色漆で赤色漆、高台面が高い、模木柱目	L-10 11-7				
SD-1 2層 漆器 柱	黒色漆に赤色漆、漆舟(ひのぎひもし)		6-5			
SD-3 3層 漆器 柱	外裏色漆に赤色漆、内裏色漆(金箔?)桜形		6-6			
SD-3 3層 漆器 柱	外裏色漆に赤色漆、内裏地に墨書き(○)		6-7			
SD-2 3層 木綿	上部を平滑、端部に切りこけし形の形態、もじり編み用、芯持ち丸材	L-11 11-8	6-10			
SD-2 4層 漆器 下駄	漆器の後に縫跡丸、子供用?、芯持ち角材	L-15 11-9				
SD-3 4層 漆器 下駄	漆器、後面の前に横縫孔、左足用?、仮縫	L-13 11-10	6-9			
SD-3 4層 漆器 下駄	漆器	L-20 11-11				
SD-5 4層 漆器 下駄	鉛頭の前に横縫孔、左足用?、縫跡孔の両斜め前に木釘の穴あり補修痕跡か、表面	L-14 11-12	6-8			

遺 墓	證 位	種 别	特 徴	像	登録番号	図	写 真
SD-5	4 級	穿のあら木製品	3か所に穿孔があり 刀模多數 田下駄か 板目	L-16	12-1		
SD-3	4 級	柄鏡	「口」として使用しているので便用鏡が著しい 心持ち丸材	L-8	12-3		
SD-3	4 級	鏡鏡	使用あり 反対残り 心持ち丸材	L-9	12-2	6-11	
SD-3	4 級	仙人状木製品	上面を半円に下面を二角鏡状に削り出す 鏡面を削り六角形に成形 心持ち丸材 効美？鹿台の台座？	L-17	12-5	6-14	
SD-2	4 級	仙人状木製品	上面を半円に下面を二角鏡状に削り出す 中央部に斜めに穿孔 心持ち丸材 猶豫？鹿台の台座？	L-18	12-4	6-13	
SD-3	4 級	柄 or 棒鏡	鏡板	L-21	12-7		
SD-3	4 級	柄 or 棒鏡	鏡板	L-22	12-8		
SD-3	3 級	柄 or 棒鏡	鏡板 近くに剣が差し込まれている 板目	L-23	12-9		
SD-3	山型	柄 or 棒鏡	天吹あるいは近板 板目	L-28	12-6		
SD-3	山型	柄鏡	鏡板 板目	L-25/26	12-11		
SD-7	2 級	曲物	鏡面 方向に3~5 mの齊鋒 板目	L-27	12-19		
SD-7	2 級	角材	円柱状に平滑に成形 鏡面	L-19	12-12		
SD-3	山型	板材	表面に黒漆の上に赤通村竹 花口	L-34	12-13		
SD-3	4 級	板材	中央部を穿いた状態をよく纏め上げる 織み具の木製品？ 板目	L-12	12-14	6-12	
SD-2	2 級	角材	机 1 4面加工角材 1面をそのまま使用し 1面光面下側 建築材の板用か 心無分割材	L-29	13-1		
SD-2	2 級	角材	机 2 角材 先端 2面加工	L-30	13-2	6-17	
SD-2	2 級	角材	机 3 4面加工角材 5面光面下側 建築材の板用か 心無分割材	L-31	13-3		
SD-2	2 級	角材	机 4 4面加工角材 5面光面下側 建築材の板用か 心無分割材	L-33	13-4		
SD-2	2 級	角材	机 A 4面加工漆平角材 2面をそのまま使用し 2面光面加工 建築材の板用か 心無分割材	L-36	13-5		
SD-2	2 級	角材	机 B 大太材 先端2面加工	L-34	13-6		
SD-2	2 級	机	机 C 4面加工角材 先端 5面加工 建築材の板用か 心無分割材	L-35	13-7	6-16	
SD-3	4 級	丸材	丸太材 先端の側面を削りだし 2面加工	L-37	13-8	6-15	

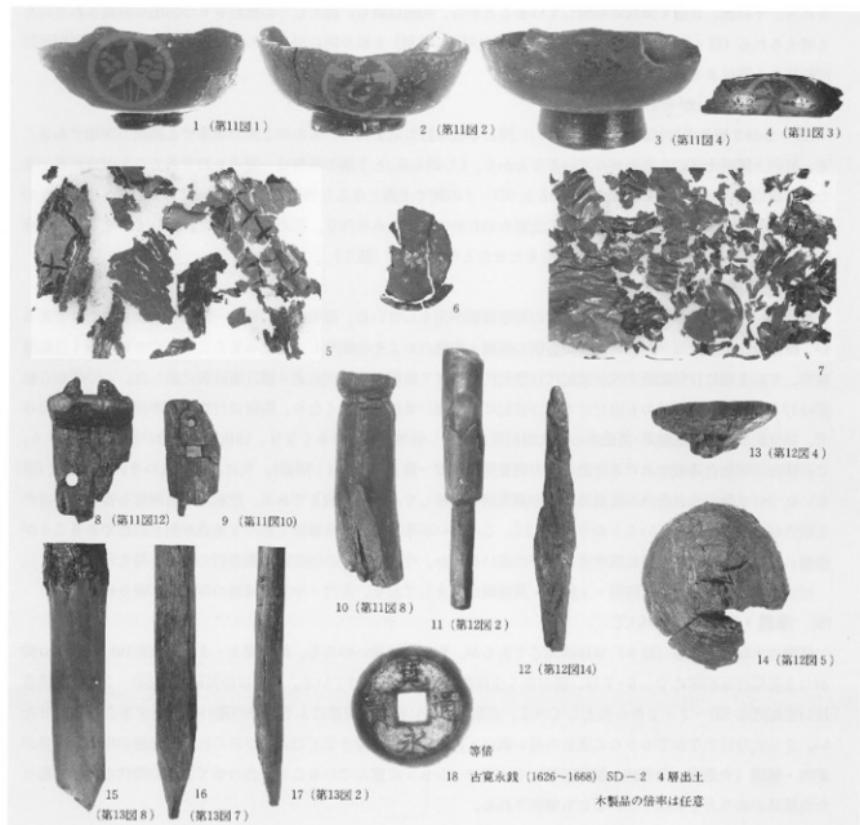


写真6 木製品写真 古銭X線写真

2からは19世紀代の遺物は出土しておらず、新しいものでも3層から18世紀中頃の美濃産の陶器（第10図-8）であることから遺構の年代もその頃ととらえられる。SD-5・6・7は時期を決定するような遺物の出土はないが切り合いからSD-2とSD-3の間の時期であり、遺構の様子からSD-2との関係が示唆されるので、ここでは18世紀代ととらえておきたい。よって、大まかにA期を18世紀後半、B期を19世紀代（幕末頃）と考えその中の変遷ととらえたい。

（2）溝跡の性格について

明治初頭に作成された「宮城郡国分六町目村全圖」（写真7）によると当調査区が「ニシヤシキ」の南側の水路付近に、第1次調査区が隣の「新ヤシキ」の中軸部分に位置する。江戸時代のものが踏襲されている（註2）と考えられることから、検出した溝跡群が屋敷の南側を区画する堀跡であることが想定される。遺物の出土状況から18世紀代（註3）にSD-2が掘られ、その後3～4回の掘り直しがあり、最終的に幕末頃のSD-1に至ったものと推定される。その後、II層も溝状に堆積していることから、明治以降も、堀としての機能をもつ凹地が形成されていたと考えられる（註4）。現代でも七郷地区では屋敷林（居久根）を取り囲む堀がみられ、それと同じような景観が江戸時代から現代まで連続と存在したと思われる。

（3）SD-2「しがらみ」について

SD-2の2層の堆積状況と、「しがらみ」に関わる杭が打ち込まれているのが2層の堆積する範囲の両端であることと、杭の上部が土圧のため曲がっていることから、「しがらみ」と2層の堆積は一連のものであることが分かる。また、2層の施された部分の北側のSD-5とSD-7の間で土橋となると想定される。よって3・4層が溜まったのち、馬の背状の高まり付近を掘り直し、土留めのためのしがらみを作り、埋め戻しをした。そして、その部分をSD-5・7の時期に通路としての機能をもたせたと考えたい。（註5）

（4）近世陶磁器について

基本層及び各遺構から17世紀～19世紀の陶磁器類が出土している。屋敷の中の堀の一部分を検出ただけであるが、屋敷のなかで使用されていた陶磁器類の器種・産地のおよその傾向としてとらえることができる。表1は観察表で、それを基に17世紀後半18世紀代19世紀代に分けて器種別産地別に表5破片集計表に表した。この表から磁器は17・18世紀が肥前産のものだけで、19世紀になり瀬戸美濃産が多くなり、陶器は17世紀が唐津産・岸窯系のみで、18世紀になると肥前系・美濃産の他大堀相馬が出現し個体数が一番多くなり、19世紀に在地の堤産が出現する。この傾向は旧仙台藩領における近世遺跡の調査例とほぼ一致する（1994：関根）。次に、個体数の多い18世紀代（註6）について他の仙台市内の近世農村部の調査例と比較してみたのが表6である。肥前系（唐津産も含む）が占める割合が当調査では大きいことが分る（註7）。この違いが本遺跡が旧宮城郡で他の3地点が旧名取郡であることが影響しているのか、ただ単に居住者の嗜好の違いなのか、今後の近世の屋敷跡の調査例の増加を待ちたい（註8）。

近世陶磁器のほか、中世陶器・土師器・須恵器が出土しており、古代・中世の遺構の存在が示唆される。

（5）漆器・木製品について

漆器は木取り・技法（註9）はほぼ同じであるが、形態では違いがある。第11図1・2・4（註10）が胴部に稜がつき底部付近が厚めで、6・7は、後がなく全体的に薄めに仕上げている。前者は19世紀代のSD-3から、後者は18世紀代のSD-7・2から出土している。点数が少ないので時期差による形態の違いと即断することは避けたい。2つに分けたなかでもさらに高台の高い低い・口径に対する深さなどの違いがみられ、陶磁器の中の食膳具が産地・種別（大型碗・簡茶碗・腰錆碗等）でバリエーションに富んでいることと合わせて、この時代の食膳を彩った食膳具のあり方を反映しているとも解釈される。

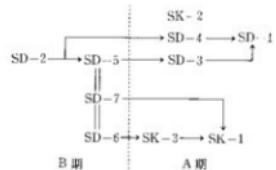


表4 遺構の切り合い関係

樽・桶類や曲物が出土しているが、陶磁器のうち全体的にみて貯蔵具の数が少ないと関連するものと考えられる。その他、横樋・木継・田下駄などの農具も出土しており屋敷内居住者の農業従事を示唆する。

(註1) 土師器・須恵器・瓦など調査表に載せない分が多數あるので、図示資料も含めて破片数を掲載した。

(註2) 安永元年(1772)に書かれた「封内風土記」によれば「戸口凡二十九。」で絵図でも28軒描かれており江戸時代の屋敷が明治以降まで踏襲されていることが窺える。

(註3) 17世紀代の陶磁器類が出土しているので屋敷の期限もそこまで遡る可能性はある。

(註4)申請者の山口氏の話によると昭和60年代の土地区画整理前まで、屋敷の回りに水路が巡っており、洗い場として使用したりしていたということである。

(註5) 3・4層はしまりがなくそのままでは人の通行に難があるための振り直しと考えられる。

(註6) 六丁の日村の石高は、江戸時代の元禄郷帳(1699)によると 266石で天保郷帳(1883)によると約5倍の1514石になる。つまり、18世紀末に新田開拓が進んだことが想定され、屋敷内の盛期であったことが遺物の出土量に反映しているのかもしれない。(七郷の今井家玉蔵一合: 1000)

(註2) 第1次調査でも土器相馬産の他、漆豆美濃産・肥前系の陶器が出土している。

(註8) 山田季通著では「絵巻」に描かれている「ヤナシキ」の断跡が検出され、この断跡から幕末～明治初めの頃の一括廃棄資料が出土した。そのなかで18世紀後半～19世紀前半の陶磁器も出土しており、陶器の大半が大瀬駒馬庭で求められている（渡部）。

(註9)技術は、下地や顔料の種類などの分析は今回できなかったので、肉眼による観察である。どれも黒色下地に黒色漆を塗り、さらには表面を茶色で仕上げ、表面には茶色の絞り模様をつけていた。複数あります。

(註16) 3—2は上ノニ形態が類似しておる。3は1の枚中に下塗地ある。

卷之三

太田昭夫 1995 「宮沢遺跡第88次調査」[宮沢・奥野浦・山口遺跡(8)]仙台市文化財調査報告書第202集

「伊豆川染付の空瓶」「別荘大門花瓶」など18
染付の勢」株式会社平良社

工藤哲司・佐藤洋 1987 「柳生一土地区画整理事業に伴う柳生地区の遺跡分布調査と、松木道路の発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第5集

佐藤道一 1982 「金剛城跡」仙台市文化財調査報告書第58集

佐藤洋 1995 「近世・北国敷陳物」『妙公用中』桂川編著者著者目録第60条

上記の会員が開催する企画展「アートトーキング」に参加するための依頼書。会員の名前と会員登録番号が記載されている。

関根達人 1994 「第3章仙台城二の丸跡第5地点調査成果の検討 2. 陶磁器」『東北大学埋蔵文化財調査年報7』 東北大学埋蔵文化財調査会員会

脚注(1) 1992「新規開拓地における「三母の農業生産の相違」」(新規開拓地農業生産の現状と問題)(新規開拓地農業生産の現状と問題)、農林水産省農業政策局農業政策課編

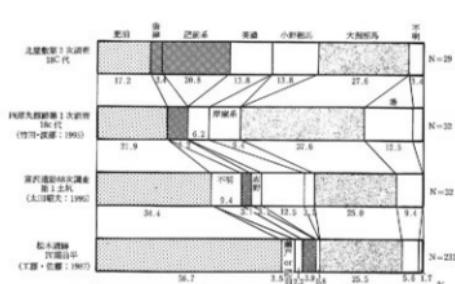
岡田健一郎・1996「相模湾における近江蒸魚生産の展開」[東北八手理歴大]、pp.10-11。

1993 「門印大師印」仙台市文化財調査報告書第200号

横井弘美 1993 「山田栄里遺稿先細目報告書」「朝日千野の遺稿先細目」 1993

表 5：近卅期收購篩財率（破片數）

序号	项目	基期	报告期	销售量		销售额		销售量 百分比	销售额 百分比
				基期	报告期	基期	报告期		
1.1	江浙	零售	烟酒杂货			1		1	
1.2		批发	烟酒杂货	1	2			0	
1.3		小计		1	3		1	0	
1.4								0	
1.5	西南	零售	烟酒杂货			1		1	
1.6		批发	烟酒杂货	2	1			3	
1.7		小计		1	1			1	4
1.8								0	
1.9	华东	零售	烟酒杂货	2	2	2	2	0	0
1.10		批发	烟酒杂货	1	1			0	0
1.11		小计		3	3			0	0
1.12	西北	零售	大包装卷烟	8				0	
1.13			小包装卷烟	3				0	
1.14			香烟	4				0	
1.15			酒类	6				0	
1.16			其他	1				1	4
1.17			总计	20				0	0
1.18			烟酒副食	1				0	
1.19			副食	2	3			0	11
1.20		小计		3	3			0	0
1.21	华南	零售	大包装卷烟			1		1	
1.22			小包装卷烟					0	
1.23			烟酒副食	1	1	2	1	1	9
1.24			副食					0	0
1.25		小计		2	2	3	1	0	0



德基



写真7.明治初頭の絵図（宮城県蔵）



写真8.西壁断面 SD-2 中心（東より）



写真9.西壁断面 SD-3 中心（東より）

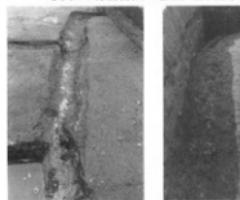


写真10. SD-1 完掘（西より）



写真11. SD-4 完掘（東より）

写真12. SD-3 完掘（東より）

写真13. SK-1 完掘（東より）

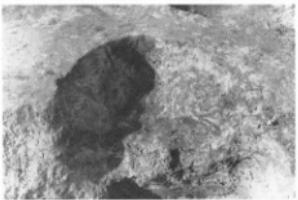


写真14. SK-3 完掘（南より）



写真15. SD-2 漢器 L-7 出土状況（東より）



写真16. SD-3 L-28 出土状況（北より）



写真17. L-28下の敷石出土状況（北より）



写真18. B期完掘（西より）



写真19. SK-2断面（南より）



写真20. SD-7断面（西より）



写真21. B期完掘（東より）



写真22. SD-5 完掘（東より）



写真23. SD-6断面（南より）

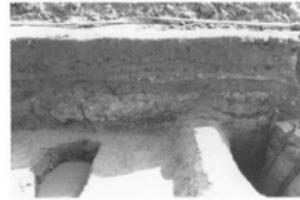


写真24. 南壁断面 SD-2 しがらみ周辺



写真25. SD-2 しがらみ検出状況（東より）

写真図版

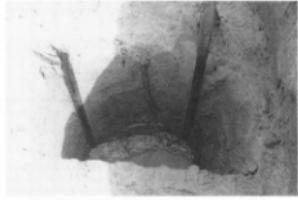


写真26. SD-2 杖列検出状況（西より）

報告書抄録

ふりがな	むつこくぶんにじあとほかはっくつちょうきほうくしょ						
書名	陸奥国分尼寺跡ほか発掘調査報告書						
調査名							
巻次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第238集						
編著者名	佐藤洋・主浜光朗・竹田幸司・伊東真文						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目 7番1号 ☎022-214-8893~8894						
発行年月日	1999年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号					
陸奥国分尼寺跡8次	仙台市宮城野区 宮千代一丁目	04100	01020	38°14'58"	140°54'21" ~ 0810	120m ²	マンション建設
3次	仙台市太白区 大野田字王ノ塙	04100	01428	38°14'15"	140°52'53" ~ 0609	205m ²	マンション建設
4次				38°13'14"	140°52'51" ~ 1216	160m ²	地下倉庫付店舗建設
2次	仙台市太白区 山田条里遺跡	04100	01367	38°12'57"	140°49'21" ~ 0612	450m ²	区域整理
3次	仙台市太白区 山田字中前地			38°13'14"	140°52'51" ~ 0714	1,835m ²	市道建設
110次	仙台市太白区 長町南一丁目	04100	01369	38°13'14"	140°52'52" ~ 0520	40m ²	事務所兼住宅建設
2次	仙台市太白区 郡山四丁目	04100	01629	38°13'16"	140°53'43" ~ 1113	80m ²	地中送電線設置
2次	仙台市宮城野区 六丁の目中町	04100	01220	38°14'54"	140°55'31" ~ 1009	116m ²	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
陸奥国分尼寺跡	寺院跡	奈良・平安	竪穴住居跡 土坑	土師器・須恵器・赤焼土器・瓦・鉄製品・石製品			
王ノ塙遺跡	集落跡 屋敷跡	縄文後期 平安・中世・近世	溝跡・土坑・小溝跡(排水溝)・古墳(周溝)・道路跡	陶器・磁器・瓦質土器・土師器・須恵器・縄文土器・石器・石器			
山田条里遺跡	水田跡	古代・近世	溝跡・水田跡・土坑	陶器・磁器・土師器・須恵器・縄文土器・石器・瓦・鉄製品・鉄貨			
富沢遺跡	水田跡	弥生・古墳・古代 中世・近世	水田作土				
北月城跡	城館跡	中世・近世	堀跡	陶器・磁器・須恵器・弥生土器・木製品			
北屋敷遺跡	集落跡	近世	堀跡・溝跡・土坑	陶器・磁器・中世陶器・土師器・須恵器・土器・瓦・木製品・石製品・鉄貨			

仙台市文化財調査報告書第238集

陸奥国分尼寺跡 ほか

発掘調査報告書

1999年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8893

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24

TEL 022(263)1166
